

BULLETIN OF CULTURE DEPARTMENT
 URASOE CITY No.11 “YO-NO-TUDI”
 2015・3



よのつぎ

浦添市文化部紀要

第11号

目次

沖縄の日本復帰とそれが在沖フィリピン人社会へ与えた影響	仲地 清	1
アメリカ情報コーナーの10年	宇良留美・森田牧子	9
沖縄の墓の墓室について －本島中南部にみる墓室構造の変遷－	仁王浩司	15
極楽寺創建場所の考察 －極楽寺と山岳信仰－(下)	武部拓磨・長濱健起	29
歴史的な漆工芸品の科学分析 －浦添市美術館所蔵の「朱漆楼閣山水箔絵盆」について－	山府木碧・本多貴之・宮里正子・岡本亜紀 下山進・下山裕子・宮腰哲雄	39
伊是名村伝世の丸櫃の科学分析及び漆芸文化 －伊平屋神女職家に伝世する丸櫃について－	本多貴之・伊郷宗一郎・神谷嘉美 宮里正子・岡本亜紀・宮腰哲雄	49
浦添市美術館所蔵漆器にみる漆器図様への画譜利用について	當山綾乃	59
英文要旨(English summary)		69
南洋群島からの戦時引揚と沖縄出身女性について	川島 淳	84(七)
(資料紹介)浦添市美術館新収蔵の琉球製提重について	金城聡子	90(一)

〔表紙写真〕

新収蔵の岡コレクション

写真上 : 「黒漆牡丹文字文螺鈿皿」

写真下右 : 「朱漆牡丹密陀絵漆絵分銅形硯箱」

写真下左 : 「黒漆楼閣人物螺鈿卓」

写真作品は、平成26年度に日本画家・岡信孝氏より寄贈された漆器である。浦添市美術館は開館間もない平成2年に、岡氏より琉球漆器をはじめアジア各地の漆器、琉球王家縁の酒器など189件の寄贈を受けた。その後も岡氏からは琉球王国時代の漆器や葛飾北斎「琉球八景」の校合摺りなどをご寄贈いただいております。美術館では「岡コレクション」として企画展や常設展に活用してきた。

この度新たに岡氏作の絵画と古美術品142件の寄贈を受け、琉球王国時代の螺鈿の優品や今までの収蔵品には無い木彫作品などの貴重な作品がコレクションとして加わった。美術館はそれらの作品を展示紹介する「沖縄の古美術とともに～岡信孝の日本画～」展（会期：平成27年1月16日～2月15日）を開催した。

タイトル「よのつち」は、古琉球の歌謡集『おもろそうし』にみられる古語で、世間・現実の頂上や最上を意味します。オモロで謡われる「よのつち」は大半が浦添関係オモロにあり、「うらおそい（浦襲い）」の同意語としてやや固有名詞化して「浦添城」を示しています。

沖縄の日本復帰とそれが在沖フィリピン人社会へ与えた影響 1～8頁



1. 空手を指導する城間盛義さん



2. グアムで活躍するキングスクール出身の方々



3. マゼランが寄港したウマタック港（グアム）



4. グアムのホテルストリート

アメリカ情報コーナーの10年 9～14頁



アメリカ情報コーナー 2014年9月



同左 2014年9月



写真 1 朱漆楼閣山水箔絵盆 (右は X 線 CT 写真)

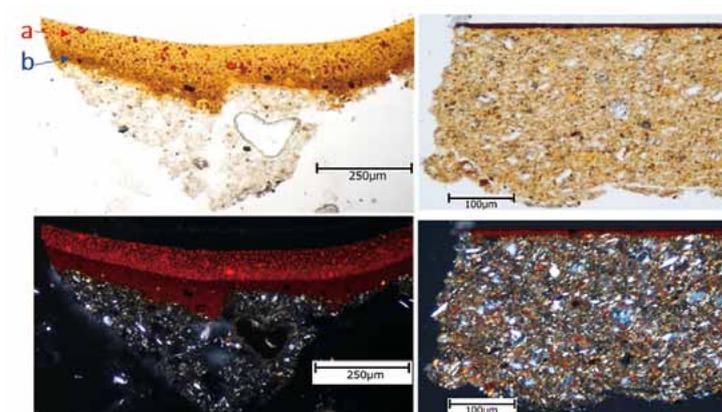


写真 5 試料のクロスセクション 1
上段左：見込み端部の塗膜の透過光写真
上段右：覆輪上の塗膜の透過光写真
下段左：見込み端部の塗膜の偏光写真
下段右：覆輪上の塗膜の偏光写真

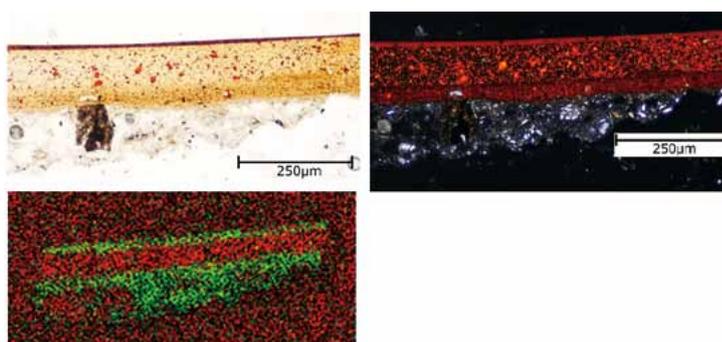


写真 6 試料のクロスセクション 2
上段左：縁付近の塗膜の透過光写真
上段右：縁付近の塗膜の偏光写真
下段左：蛍光 X 線元素分析マッピング分析 (G:Fe, R:Hg)



写真 7 赤外線写真 (左：全体図, 中：左写真の四角部分の拡大, 右：通常の写真)



名嘉家 潤塗山水人物箔絵丸櫃



玉城家 黒漆鳥花文点斜格子
沈金丸櫃



伊礼家 黒漆山水人物箔絵丸櫃

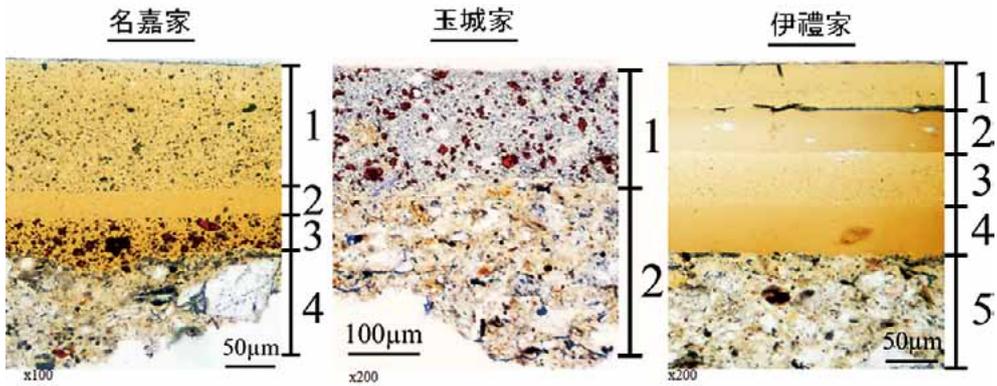


図3 分析試料のクロスセクション画像

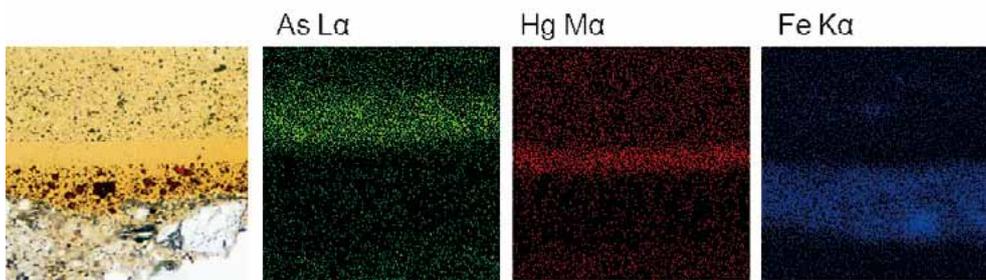


図4 名嘉家の試料のEDX分析結果

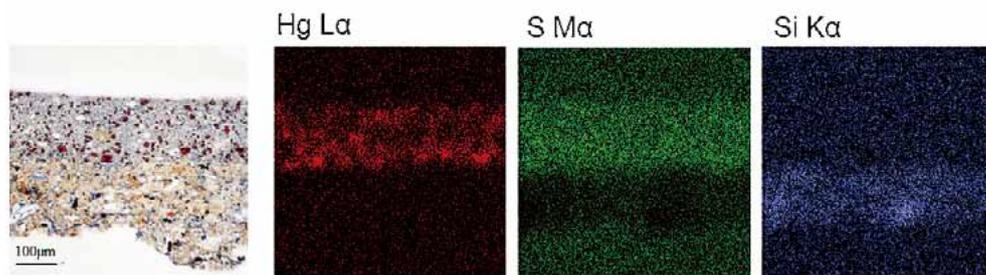


図5 玉城家の試料のEDX分析結果



①黒漆山水樓閣螺鈿提重 18 ~ 19 世紀
縦 23.0cm 横 41.0cm 高さ 40.0cm



②朱漆牡丹唐草沈金提重 18 ~ 19 世紀
縦 20.0cm 横 35.5cm 高さ 33.5cm



③朱透漆樓閣山水人物漆絵密陀絵沈金提重
18 ~ 19 世紀
縦 18.0cm 横 32.0cm 高さ 30.5cm



④朱漆牡丹唐草七宝繫箔絵提重 19 世紀
縦 15.5cm 横 25.0cm 高さ 23.5cm

よのつち 浦添市文化部紀要 第11号

BULLETIN OF CULTURE DEPARTMENT URASOE CITY NO.11

浦添市教育委員会

2015・3

『浦添市文化部紀要よのつち』原稿募集規定

平成 20 年 12 月 3 日 文化部長決裁

最 終 改 正 平成 26 年 7 月 4 日

1. 目 的：浦添市文化部紀要よのつち（以下「よのつち」という。）に掲載する、浦添・沖縄の歴史、文化、美術工芸、芸能、自然などに関する論考を募集するために、この規定を定める
2. 発 行 主 体：浦添市教育委員会文化部
3. 原 稿 内 容：①浦添市の文化財、文化振興、図書館、美術館の将来展望につながる調査・研究など
②浦添や沖縄の歴史、文化、美術工芸、芸能、自然などに関する研究
③日本本土や東アジア（東南アジアを含む）の歴史、文化、美術工芸、芸能、自然などに関する調査・研究で、①②への貢献が期待されるもの
4. 応 募 資 格：①浦添市文化部内の職員、嘱託職員、臨時職員
②県内外の研究者ほか
5. 応 募 方 法：タイトル（仮題でも可）と簡単な論旨（400字以内）及び住所・氏名・所属等・連絡先（電話・FAX・E-mail）等を明記の上、郵送またはメールにて提出
6. 掲載の可否：よのつち編集委員会にて審査の上、掲載の可否を決定し応募者へ通知
7. 原 稿 枚 数：1 頁 1,800 字（45 字×40 行）で 10 頁以内（註、写真、図版等含む）
8. 写 真 掲 載：カラー写真の掲載は原則 1 点とする。ただし、掲載できるとは限らない
9. そ の 他：①論文はオリジナルのものとし、二重投稿は不可とする
②著作権は浦添市に帰属する
③提出された原稿は返却しない
④原稿料は無料。執筆者には、本誌 5 部を贈呈する
⑤市HP掲載の様式で申し込むこととする
⑥掲載された原稿は、Web 上の一般公開に同意する

沖縄の日本復帰とそれが在沖フィリピン人社会へ与えた影響

仲 地 清

(大阪大学大学院 特任教授)

はじめに

1945年に太平洋戦争が終わり、沖縄は共産主義国からの侵攻を防ぐという目的から米国の重要基地の島となった。それに伴い、沖縄では米軍の恒久基地が建設された。米兵が駐留する沖縄島はアジアの国々からもビジネス上魅力ある島と捉えられた。特に、フィリピン人、台湾人、インド人などが沖縄へ移住してきた。中でも1945年から1955年にかけて、フィリピンからは米軍属、基地建設請負企業の被雇用者として来沖した。終戦直後の沖縄社会で、英語ができてアメリカ文化にも造詣の深いフィリピン人は米国人の次に経済的、社会的地位も高く、生活も比較的豊かで、沖縄女性と結婚するなど沖縄社会と深いつながりもできていた。しかしながら、1972年の沖縄の日本復帰が近づくとつれて、米国はフィリピン人雇用者の継続雇用に否定的となり、沖縄のフィリピン人社会は将来へ不安を抱いた。そうした社会不安を受けて、沖縄在住のフィリピン人は主に次の3派に分かれた。アメリカの市民権を得て、米国、特に近くのグアムへ移住した人々、フィリピンへ帰った人々、日本国籍をとって沖縄に残った人々であった。沖縄の日本復帰は、在沖外国人の人生にも大きな影響を与えた。本論文は、フィリピン人社会に焦点をあてて、沖縄戦後史の中のフィリピン人社会の変遷を歴史的に描き、その特質を示す。

1 沖縄移住の形

(1) フィリピン・スカウト

戦後、いち早く沖縄に駐留したフィリピン人は、フィリピン軍人だった。再度の日本軍との戦いに勝利した連合軍極東軍のダグラス・マッカーサー司令官は、1945年、フィリピン戦で編成したフィリピン人だけの部隊「フィリピン・スカウト」を立ち上げた。1947年2月1日時点で、フィリピンに3万人、沖縄に5千人、マリアナ諸島に1千人が配備された。我部報告によると1947年7月1日には、沖縄に6千5百人、マリアナに1千5百人、フィリピンに2万2千人が駐留していた。

米国政府は、1947年3月14日、米比基地協定を結び、米軍はフィリピンに駐留することと、フィリピン人を米軍属として雇用することができる特権を得ていた。我部報告によるとマッカーサー司令官は「沖縄、マリアナ、フィリピンで米軍兵力が足りない場合、この地域で日本占領の終了までスカウトを配備する方針」を持っていた。フィリピン人軍属の労働賃金が安かったことが「フィリピン部隊」を立ち上げた理由だったが、国防予算が削られたので、米国は1949年末までに、「スカウト」を廃止することを決めた¹。

当時、沖縄では、「黒人部隊」と「フィリピン部隊」の素行が住民から不評を買っていたので、沖縄諮詢会の志喜屋孝信委員長が「フィリピン兵」の帰国を、米軍政府に訴えたほどだった。そうし

た背景から、「フィリピン・スカウト」は、沖縄を離れるに至った。ただ、1945年から1949年まで「フィリピン・スカウト」が駐留中、何人の沖縄女性と結婚したかどうかは定かでない。けれども、この期間にフィリピン系混血児がいたという数字はあるので、結婚していたとの予想は成り立つ。

(2) 米軍恒久基地建設に伴うフィリピン人リクルート

フィリピン人の戦後の第2の沖縄移住は、1951年のサンフランシスコ講和条約、日米安全保障条約の締結により、米国が沖縄に恒久的な米軍基地を建設することが契機となったことだった。フィリピンでの日米大戦で、フィリピン人は米国の同盟国民であった。またフィリピンは1898年のスペイン戦争以来、米国の植民地で、米国はフィリピン人に対しては特別の親しみをもち、さらにフィリピン人の英語力、米国文化の理解力を評価していた。

沖縄に恒久的な米軍基地を置き、米軍政をスムーズに進めるには「英語力のある高度マネジャー、技術者」を必要とした。終戦直後の沖縄では、そのような人材は少なく、フィリピン人を雇用することがてっとり早かった。米軍はマニラへ事務所を構えて雇用した。医者、公認会計士、電気技術者、マネジャーなど高学歴のフィリピン人が雇われた。また、1950年から53年にかけて、沖縄は第1次基地建設ブームを迎え、フィリピン企業も参加し、沖縄にはフィリピン人が働く場所が備わっていた。因みに、米軍政府はその頃の基地建設に必要な従業員を5万5千人と見積もっていた²。アメリカのアトキンソン社、ジョーンズ社、日本の松林組、清水組、沖縄の国場組などが請け負っていた。フィリピン企業は主にアメリカ企業の下請けを担った。当時の米軍政府の予算の大半は基地建設費が占めており、沖縄中が基地経済で潤っていた。

鈴木、玉城の研究は米国側が「太平洋戦争中の同盟国民、フィリピン人の高度な建設技術と工業機械の使用技術」を評価、フィリピン側は「沖縄での生活レベルの向上、技術職やスーパーバイザー職の専門職と高い賃金、さらに沖縄とフィリピンが近距離であったことに、魅力を感じていた」と、分析する。また、沖縄では米軍政府の独自裁量の行政が行われていたので、米軍の軍令、旅行命令書があれば、フィリピン人は民間空港を通らないで軍事基地を経由して自由に往来ができた。事実、フィリピン人は、直接、米軍嘉手納飛行場、ホワイトビーチから入域するのが通常だった³。

その後、職種はフィリピン人が得意とする音楽などのエンターテイナー、英語をより必要とする理容師、ウェイター、メイドなど一般職まで拡大していった。

2 フィリピン・コミュニティ

(1) 高い学歴と高い給料

当時の米軍政府下でのフィリピン人社会の生活水準は沖縄人社会よりも高かった。それは、当時の米軍基地での給与の比較を通して明らかである。米軍基地内では米国人、フィリピン人、日本人、沖縄人の順で査定されていた。ここで言うところの日本人とは、琉球籍を持っていない日本人のことで、主に鹿児島県奄美郡出身者が多かった。

たとえば、1950年代初めの基地内での平均時給額はフィリピン人が最高196円80銭から最低48円、沖縄人は最高25円から最低9円50銭だった。また、あるフィリピン人電気技師は月給300ドル弱もらい、沖縄で遊興費に使ってもまだ余裕があったので、故郷のフィリピンへ送金していた⁴。また、全沖縄軍労働組合を結成して、12年間委員長を務めた上原康助は自著で「米国人（時給最低1ドル20セント、時給最高6ドル52セント）、比島人（52セント、3ドル77セント）、日

本人（83セント、1ドル3セント）、沖縄人（10セント、36セント）。同じ仕事でも、陸軍工作隊で働いているフィリピン人は月給263ドル、沖縄人は月給60ドルであった」と記している⁵。

この労働待遇の順位について、全軍労は説明を軍当局に求めてきたが「沖縄人にはまだ、英語を駆使できる専門職がない、能力級である」と説明していた。その後、米国留学で、沖縄の基地従業員も英語を駆使し、また高度技術者を取得するにつれて、賃金格差はなくなっていった。フィリピン人上司の下で働いた雇用環境について「フィリピン上司にいじめられた」と、沖縄タイムス発刊の『庶民が綴る沖縄戦後生活史』にも、ところどころに記されている。

（2）国際結婚

澤岬報告によると、1948年から1953年まで沖縄における国際結婚は1004組とある。大半はフィリピン人との結婚で、特に沖縄女性の出身地は全琉球的に広がっている、居住地は那覇、沖縄市、具志川市が多かった。1953年以後は白人との結婚が増えていく。1945年代に来て1949年に帰ったフィリピン・スカウトとの結婚があったかは明らかでない⁶。また、1950年に那覇市役所が受け付けた国際結婚の数字はフィリピン人80件、アメリカ人45件、1951年はアメリカ人100件、フィリピン人35件の統計もある⁷。

県内の混血児の数は、1949年9月段階で、450人（男221人、女229人）。これを人種別にみると、白人、黒人、フィリピン人、中国人、日系2世との混血で、そのうち白人が多かった。地域別にみると、那覇が94人、前原（現在のうるま市）が90人、次いでコザ（現在の沖縄市）が73人となっており、「軍人との接触の多い南部地域に断然多い」と澤岬論文は説明している⁸。

国際結婚は市町村役場への登録であるので、実態はあまりはっきりしない。複数の報告から、フィリピン人が上位を占めていた時期もあった。

（3）統計でみた在沖フィリピン人総数の変遷

下記の図表は、フィリピン国籍の沖縄在留総数の変遷である。フィリピン国籍は、日本籍、アメリカ籍に続き1964年と1965年を除くと、常に3位の位置にあった。1972年の復帰前まで、日本籍とアメリカ籍が多かったことは、至極当然なことである。1964年と1965年は、台湾からの在留者が多かった。言うまでもなく日本人籍（鹿児島県奄美大島郡居住者を含む）とアメリカ籍が1位と2位を占め、その2か国を除くと、フィリピンと沖縄の関係が一番深かったことを意味する。ただ、1966年に高等弁務官布令11号「琉球政府における外国人の投資」に基づいて制定された規則112号「非琉球人の雇用に関する規則」に基づき、1966年から1971年まで、毎年千人以上の外国人と日本人が雇用された。特に、1968年から72年まで、台湾からサトウキビ農家の労働者、パイナップル缶詰工場で働く女工が来沖した。

1959年から1963年までの在留フィリピン人の50%以上が軍雇用員で、1964以後から軍雇用員は著しく減少している。米軍が採用を控えたことと、フィリピン人が退職したことが想像できる。特に、1970年と1971年のその他のカテゴリーで1,000人を超えていることは退職後、そのまま沖縄に滞留したとみられる。因みに、2010年12月段階における外国人登録数は中国人が2,011人、その次はフィリピン人1,643人⁹となっており、現在でも依然として在沖フィリピン人は多いと、言える。

図表：フィリピン人の目的別沖縄在留総数（1956年から1971年）

参考：（琉球政府企画統計局の『琉球統計年鑑』、琉球政府企画局統計庁の『沖縄統計年鑑』から作成）

単位：人

年	総数	公用者	一時訪問者	商用入域	技術入域	請負業の被雇用者	永住者	軍雇用員	その他
1956年	247		48	65	24	110			
1957年	275		75	63	33	104			
1958年	301		136	43	71	51			
1959年	1550		178	66	95	52		1159	
1960年	1667		194	88	107	58		1220	
1961年	1761		246	88	97	72	3	1255	
1962年	1819		275	87	119	78	4	1256	
1963年	1883		349	81	128	87		1238	
1964年	851		233	67	99	33	2	417	
1965年	935		278	69	137	30	2	419	
1966年	1258		366	56	202	201	2	431	
1967年	1319		447	52	230	158	6	426	
1968年	1374		549	53	263	110	4	395	
1969年	1575		671	54	398	94	4	354	
1970年	2040		154	41	164	88	6	304	1283
1971年	2005		225	52	140	72	12	247	1257

3 クライスト・ザ・キング・インターナショナル・スクールで学んだフィリピン人

フィリピンはカトリック教の信者が多い。そうした社会背景からか、多くのフィリピン人の子供達は宜野湾市真栄原に在ったカトリック教系のキング・スクールで学んだ。キング・スクールは1957年1月、沖縄に移住したフィリピン、インドなど他のアジアの国々の両親の手で開校した。キャンプブーンの前設兵舎を借りて、2人のシスターと、1年生から3年生までの35人でスターとした。ここで学んだのは米軍基地内の学校への入学が認められない生徒達だった。両親は沖縄に移住した民間人が主だった。学校造りの熱意に理解を示したのが、カトリック那覇教区で、教区から派遣されたヴァレンタイン神父の指導と監督で校舎建設を含めた学校建設が始まった。京都のノートルダム女子学校からシスターが派遣されるなど世界のカトリック教団の援助、協力で学校は発展していった。1970年には幼稚園から高等学校まで1,015人の生徒が在籍するほどまで拡大した。学校の特徴は、50%以上がフィリピン系人で、特にフィリピン男性と沖縄女性の間で生まれた混血児が多かった。1972年の復帰を機に在籍数の減少も続き、周辺から存続運動があったのにもかかわらず1989年には閉校をせざるを得なくなった。その後は、聖ドミニコ宣教修道女会（台湾管区）がキング・スクールの施設を継承し、現在は学校法人カトリック沖縄学園が日本人向けの小学校と中学校を運営している。¹⁰

キング・スクールの同窓生はその後、グアム、ハワイ、米国本土に移り「日本語と英語コミュニケーション力」を生かして、地元の経済に寄与している。

4 沖縄の日本復帰に伴うフィリピン人社会の動向

ベトナム戦争への深い介入により国内財政で危機に陥った米国は、基地従業員数を縮小する方針を打ち出し、1965年、長年雇用していたフィリピン人従業員の全員解雇を発表した。また、日本政府も、1972年の復帰後、基地従業員を米軍の直接雇用から防衛施設庁長官を雇用主とする間接雇用制度に移管することを発表した。基地内で働く日本人従業員の給料を日本政府が支給することになった。その際、日本の税金を用いフィリピン人従業員まで賃金を支給して良いものかどうか、立法院で疑義が出された。Filipino Overseas Employee's Association (President : Alfonso M. Alarcon) はフィリピン人従業員が不利にならないように処置することを米軍に要請した。Alarcon氏によると、「米軍属、または15年以上勤務の基地従業員」であれば、米国大使館を通して「市民権が申請できた」と説明していた¹¹。1972年5月15日の沖縄復帰を前に、復帰前に沖縄に来た台湾人、インド人も同じような不安を抱き、沖縄外に活路を求める人々もいた。前述したようにフィリピン人はアメリカに市民権を申請する、またはフィリピンへ帰国する、または沖縄へ残る人に分かれた。アメリカ市民権を取得したフィリピン人はグアムを移住先に選んだ人が多かった。

5 グアムの沖縄人

(1) グアム県人会の特徴

太平洋上のマリアナ諸島の一つ、グアムは米国領で沖縄と自然、文化、歴史などの面でよく似た特徴を持つ島である。面積は沖縄本島の3分の2、人口約16万人(2010年)で先住民のチャモロ人の外、米国に移住したフィリピン人、韓国人、中国人、日本人などが住む。米軍事基地と観光業に依存する経済体制は沖縄とよく似ており、特に海の観光資源は沖縄のライバルである。1898年の米西戦争で米国領となり、戦前、日本の委任統治下にあったサイパン、テニアン、パラオ、ポナペなど日本人移民が多かった南洋群島とは違った歴史を歩んだ。

2012年3月、浦添市移民史編集委員会専門委員として、グアムにおける戦後沖縄移民を調査した。グアムの沖縄系人は、戦前の南北米、ハワイ、フィリピンなどとは違い、沖縄の戦後史から生まれた移民である。戦後の早い時期、米国は第二次世界大戦中、日米大戦時に協力したフィリピン人軍属に対して、アメリカで働くことができる市民権を与えた。沖縄が日本へ復帰した1972年から約40年も経過しているのではほとんどの沖縄女性は免税品店を退職していたが、60歳、70歳を過ぎた今でも働いている沖縄女性もいた。グアムに移住した沖縄系人には高齢を迎えた人々が多い。沖縄系の葬式には約400人が集まるという。現在の沖縄県人会の世話と相談役は城間盛義(1942年生)と新崎康弘(1947年生)である。城間と新崎は那覇市出身で、1970年頃、グアムへ来た。城間は現在、沖縄小林流空手道協会志道館グアム道場で空手を広めている。新崎は免税品店などの支配人として働いてきた。また、キング・スクール出身者は今ではグアム経済界で、ゴルフ場マネージャー、不動産業、レンタカー経営など、多方面で活躍している。フィリピン人、日本人、グアム人意識が混ざったアイデンティティを持っている。

(2) それぞれの人生模様

ヘンリー・パンジナンは、1952年3月6日生まれで、退職後は沖縄に帰るか、フィリピンに帰るかを思案中という。ヘンリーの父親はフィリピン人で、母親は沖縄県小緑出身の當間春子。母

親一家はサイパンへ移民して、日本人の高橋と結婚して、息子をもうけた。戦前、沖縄へ戻りフィリピン人の父と結婚した。父親の名前は Exequiel B.Pangilinan (1922年4月10日生まれ、1986年に亡くなった)。兄の高橋健吉は琉球大学を卒業して、沖縄教職員会の組合活動に没頭した。姉にリンダ(よしこ)がいる。フィリピン人の父親は兄を育てたが、アメリカ反対の政治運動をしたと嘆いていた。ヘンリーは、キング・スクールを復帰前に卒業し、学校時代はアメリカンフットボールの選手として活躍した。その後、日本語もできるので、波の上のレストランで働き、ずっと沖縄で住むことを考えていた。復帰の年に、軍属として働いていた父は解雇された。そのとき、フィリピンへ帰るか、アメリカの市民権をとってアメリカへ渡るかの選択肢が与えられた。軍属であった父は優先的にアメリカ市民権がとれたので、グアム行きを選択した。弟のジュンはまだ高校生だったので、両親と一緒にグアム行きを決意して、ヘンリーだけが沖縄に残った。その後、グアムから父親の危篤の手紙がきたので、グアム永住を決意してグアムへ移った。キング・スクール出身の学生の中にはフィリピンへ帰った人もいたが、ほとんどはグアムへ移った。ベトナム戦争の終わりが近づいていた頃のグアムは、ようやく観光を主流とする経済復興が始まろうとしていた。その時期に、日本語と英語のできるキング・スクール出身者は重宝がられた。多くの沖縄系女性は免税品店で働き、グアムの経済復興に寄与した。

1942年9月24日生まれの城間盛義は那覇市石嶺出身で、フィリピン人との直接な関係は薄いですが、沖縄出身者が少ない中で、沖縄県人会の世話役と相談役を買って出ている。空手8段の高段者で、沖縄県那覇市の宮平勝哉道場で10年間学んだあと、1964年にフィリピンのミンダナオ島やマニラでも教えた。弟子を頼って1967年にグアムへ来た。海外で空手を教えるパイオニアである。現在は30人ほどの門下生がいるが、一時は100人ほどの門下生がいて、グアム島内で2つの道場を持っていた時もあった。1974年、フィリピンで開かれた世界空手選手権大会で金メダルをとるほど輝かしい空手歴を持つ。1970年代のグアムは好景気に溢れて、米兵が夜を楽しんでいる頃であったので、ホテルの酔っ払い米兵の対策として雇われて、金が儲かるほくほくの時代であった。城間はこれまで、観光業、レンタカー業など多種多様なビジネスに携わり、今はお土産店のマネジャーとして働いている。

大宜見一は、フィリピン人の父と沖縄人の母を持ち、那覇市の石田中を卒業し、16歳まで沖縄で育った。父親のジミー・ムーバス(83歳)と母親の大宜見千代(79歳)は健在である。母方の祖父が教育者であったので、日本語教育を受け、国際学校には行かなかった。復帰後、父親がアメリカの市民権をとってグアムへ移住した。

新崎康弘は1970年にグアムへ来た。世界一周のTWAが寄港するほどの島にあこがれて移住した。当初2ヵ年間の予定だったが、すっかり人生の半生をすごした。那覇出身だが、父が教員だったので、中部地域を中心に生活した。だから、故郷意識があまりない。1973年から免税品店で働き始めた。本人はウチナンチュ意識を本人は、あまりないという。けれども子供には日本語教育を受けさせたい思いが強く、現在、京都の大学へ通わせている。今まで免税品のマネジャーを中心に仕事をしてきた。2ヵ年の予定が、長年居続けられた理由は、グアムの観光業の発展に伴い、免税品店で働く仕事があったからである。

アンジン・フーティンの母親は沖縄市出身で、父親はフィリピン人である。キング・スクール出身で、父親がフィリピン人であったので、グアム移住を決意した。沖縄人ということで、日系企業では日本人より給料が安く、昇任にも恵まれなかった。ただ、日本語と英語ができることで大事にされた。移った当時のグアムは信号機もなく閑散としていたが、仕事には恵まれて「グアムへ移ってよかった」

という。母親は免税品店で80歳まで働いた。アンジンは不動産の仕事をしているが、沖縄基地のグアム移転計画が伸びたので、不動産ビジネスは立ちいかなくなり、先行投資した人々には困ってしまった人も出たと、話していた。

那覇市出身のA子は50年余も免税品店で働き、他の沖縄出身者同様に免税品店を通してグアム経済の発展に寄与した。A子は1934年生の那覇市牧志出身で、フィリピン人と結婚し、娘が一人いる。那覇の小学校に在学していたころ、何度も、娘に日本籍を与えようとしたが、父親がフィリピン国籍ということで、籍の変更ができなかった。父親はベトナム戦争に参加し、送金してもらい、その娘は今、スチュワーデスとして働いている。夫とは言葉が通じないので会話は少ない、という。この年まで仕事があるのはグアムにきたおかげ、と感謝していた。

それぞれの人生の歩みがあった。

6 まとめ

沖縄戦後史の中で沖縄に移住してきたフィリピン人の人生の変遷を描写した。英語力とアメリカ文化の理解力で、米軍から重宝視されて、高賃金と専門職を得て豊かに生活し、沖縄女性との結婚を通して沖縄にフィリピン社会と文化を定着させた。また1972年の沖縄の日本復帰を境にアメリカ(グアム)移住、フィリピン帰国、沖縄永住の選択などの人生の岐路があった。しかしながら、こんな過去の歴史の中でも国際結婚と混血児に対する偏見と無理解があったに違いない。

戦後の沖縄在の外国籍の数は1950年から1972年まで、断然、フィリピン籍の人々が多く、沖縄とフィリピンの関係が深かったことがわかった。この事実を裏づける証拠に、現在、沖縄県内には高齢のフィリピン人で組織するThe Filipino Community in Ryukyu Islands(琉球諸島のフィリピン人会)そして、日本へ帰化した若いフィリピン人で組織するAssociation of Filipino-Japanese Nationality(日本国籍フィリピン協会)、さらにフィリピンの文化と人が好きな沖縄人で組織する沖縄フィリピン協会がある。また、グアムとフィリピンにはそれぞれ沖縄県人会があり、それぞれの特色を生かした活動が行われている。

グローバル時代、国際化時代の今日、異文化理解にとどまらず共生文化の醸成が提唱されている。現在でも、2,000人余のフィリピン人が沖縄に住み、フィリピン文化は沖縄における共生文化を支える大きなファクターとなっている。今回は、フィリピン人社会に焦点をあてたが、中国人社会(台湾)、インド人社会、香港人社会もそれぞれ、沖縄戦後史の1頁を占める特徴的な一面があると仮定している。これらは、次の研究課題である。

-
- 1 我部政明『日米関係の中の沖縄』三一書房、1996年、75から79頁
 - 2 琉球銀行調査部編『戦後沖縄経済史』琉球銀行、昭和57年、270頁
 - 3 鈴木規之、玉城里子「沖縄のフィリピン人一定住者としてまた外国人労働者として—(1)」『琉大法学』(57):39-66、1996年9月、54から55頁
 - 4 前掲論文、55頁
 - 5 上原康助『基地沖縄の苦闘—全軍労働争史』創広、1982年、20頁
 - 6 澤岬悦子『オキナワ・海を渡った米兵花嫁たち』高文研、2000年、126頁
 - 7 琉球新報社編『ことばに見る沖縄戦後史』ニライ社、1992年、25頁
 - 8 澤岬、前掲書、120頁

- 9 沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課編『国際交流関連業務概要』平成24年3月
- 10 カトリック那覇教区、那覇地区創立50周年、那覇教区創立25周年記念誌『うりずんの里』2013年
- 11 2014年11月25日、宜野湾市在のフィリピン領事館で名誉領事のAlacon氏を、インタビューした。

【参考文献】

1. 上原康助『基地沖縄の苦闘—全軍労働争史』創広、1982年
2. 我部政明『日米関係の中の沖縄』三一書房、1996年
3. 澤岬悦子『オキナワ・海を渡った米兵花嫁たち』高文研、2000年
4. 琉球新報社編『ことばに見る沖縄戦後史』ニライ社、1992年
5. 鈴木規之、玉城里子「沖縄のフィリピン人一定住者としてまた外国人労働者として—(1)」『琉大法学』(57):39-66頁、1996年9月
6. 琉球政府企画統計局編『琉球統計年鑑』(1956年から1966年)、琉球政府企画局統計庁編『沖縄統計年鑑』(1967年から1971年)

アメリカ情報コーナーの 10 年

宇 良 留 美 ・ 森 田 牧 子

(浦添市立図書館)

1. はじめに

当館 2 階にあるアメリカ情報コーナーは、平成 16 年 9 月 14 日設置され、今年（平成 26 年度）で 10 年を迎えた。設置の経緯と開設当初の様子については『よのつち』第 7 号で触れているが、そこで以後のコーナーの運営や関連プログラムの持ち方についての展望も述べている。本稿では、設置以後のコーナーの変遷について、設置基準やプログラム数の設定などとともに振り返り、節目となる 10 周年事業の準備から 9 月の実施の様子を中心に紹介する。

2. 設置基準の変遷とプログラム

コーナーの運営は『A Handbook for American Spaces Partners – Managing American Spaces –』をもとに領事館と共同で行われ、国内 2 ヶ所（平成 26 年 12 月現在）のコーナーと 23 のシェルフは年ごとに見直しが行われている。コーナー担当者は毎年 1 回の研修でこの目標を確認し、プログラムを設定することになる。平成 18 年 9 月に文化広報担当領事と市立図書館館長との間で覚書を更新したが、平成 25 年 9 月の覚書は大幅な変更があり、総領事の交代の時期であったことと、在沖米
国総領事館からの希望もあり、総領事と市長による締結となった。また、覚書の内容も『英語が話せる有資格スタッフを配属するよう努め』、『「コーナー」は毎年少なくとも 24 のプログラム、活動、サービスを提供し、それらについて広報するものとする』こととなり、具体的なプログラム内容は領事館との打ち合わせにより実施している。アメリカの季節ごとの習慣やイベントにあわせた展示活動も活発になった。（表 1）

現在は、英語習得をテーマにした企画へのニーズが高く、映画上映会やゲームをしながら気軽に英会話に触れる教室が人気である。また、当館独自の取り組みである「うらそえ YA（ワイエー）文芸賞」でも呼び込みたい層をターゲットにしていることから、10 周年記念に、県内に移住して活動している若い米国人作家による小説の書き方についての講演会を企画した。市内小中高校へ、文芸賞への応募と講演会への参加を呼びかけ、多くの参加と好評を得た。

また、この数年は、領事館を介して ALA（アメリカ図書館協会）関係者を講師とする図書館関係者向けの講演会を行っている。アメリカをはじめ、海外の図書館事情に触れることで、図書館の役割や可能性の広がりを考える機会にできればとの願いからである。

3. 10周年記念事業

平成26年9月14日、アメリカ情報コーナーは10周年を迎えた。4月より10周年記念事業として行った15件のプログラム(表2)から、3件について紹介する。

(1) 講演会「インフォプロと新たな図書館の役割」(写真1)

昨年度に引き続きALA関係の講演会ということで関心が高く、早々に高校司書の研修担当より是非参加したいと申込があった。県内公共図書館から館長の参加も多くあり、活発な質疑応答があった。「アメリカでの図書館の役割が幅広いことに驚いた」「日本とアメリカでは、ゲームに対する考え、場所(Space)に対しての考えが違うと思った。日本の学校で問題とされている発言力、表現力などに対して図書館ももっと関わっていけないのではないかと考えさせられた」「雑誌の切り抜き1枚で人の人生を変える、という言葉が印象深かった。その言葉を胸に仕事にはげみたい」など、参加者の前向きな感想が多く寄せられた講演会だった。

(2) 講演会「本で伝える世界～なぜぼくが久米島で小説を書いているか～」(写真2)

「素人が本を出版するまでの過程を丁寧に教示して下さいととても興味深く聞きました」「本になるまでの実務がきけたことは収穫でした」など、実践的な話の内容に満足したという声が多かった。「また作家をまねいてほしい」「私は声優を目指していて、沖縄を拠点に東京で活動したいので、ベンジャミンさんを見て、話を聞けてよかったです。Thank you so much!」などの感想から、YA世代の参加者へ、将来への刺激も与えられたと思われる。

(3) 「2014 Education USA 留学セミナー」、「カレッジフェア」(写真3)

偶数月に行っているアメリカ留学説明会の10周年記念版として、領事館の呼びかけでアメリカ本国より11校の大学関係者が来館し、希望者に直接説明を行った。通訳には留学経験のあるボランティアが各校のブースに1名つき、生きた英会話に触れる機会にもなった。

4. おわりに

戦後国内にはCIE図書館、沖縄には県内5箇所「琉米文化会館」が設置された。それらは文化政策の一環という側面もあるが、その後の日本の公共図書館の発展に寄与したとされ、設置目的等はアメリカ情報コーナーにも共通点があるように思う。

アメリカの公共図書館は、市民からの要望に沿い発展してきた経緯があるとされるが、アメリカ情報コーナーの企画・運営に携わっていると、アメリカ公共図書館の歴史や使命が踏まえられていると強く感じることもある。

「市民のため」「常に」「開かれている」こと、これらの実現のために迷わず進んでいくのが彼らであり、サービス向上に対する飽くなき探究心には終わりが無いように見える。また、資料の選択・活用に対する姿勢にも目をみはるものがある。

「市民」「常に」「開かれる」ことや「資料と人とを結びつける」ことは、私たちにとっても大切なキーワードなのだが、彼らとの比較においては、万事消極的すぎるような気がしてならない。

今後もサービス先進地から謙虚に学び、浦添市民の生涯学習のお役に立てるよう、手を携えながら、

歩んでいきたいと考えている。

【参考】

『民衆と社会教育 戦後沖縄社会教育史研究』 小林文人・平良研一編著 エイデル研究所 1988.2

『アメリカン・センター アメリカの国際文化戦略』 渡辺靖著 岩波書店 2008.5

『アメリカの公共図書館』 白石鷹美・川戸理恵子 文部科学省 HP

http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/houkoku/06082211/008.pdf



写真1「インフォプロと新たな図書館の役割」



写真2「本で伝える世界」



写真3「留学セミナー&カレッジフェア」

表1 実施イベント

実施年度 (平成)		種別	プログラム	日時	場所	参加 人数
23 年度	1	講座	SPEND SPRING BREAK IN AMERICA WITHOUT LEAVING OKINAWA	平成23年4月5日(水) 平成23年4月6日(木) 15時30分～17時	図書館 2 階 視聴覚室	14 名
	2	おはなし会	Singing Program	平成23年5月10日(火) 10時30分～11時30分	パンダ保育園	80 名
	3	おはなし会	Story Telling Program	平成23年5月26日(木) 10時～11時	図書館 1 階 かたりの部屋	40 名
	4	講座	Thanks Giving Day Program	平成23年11月22日(火) 12時～13時	図書館 2 階 視聴覚室	9 名
	5	講座	Christmas Program	平成23年12月20日(火) 13時～14時	図書館 2 階 視聴覚室	16 名
	6	講座	Conversation Cafe (全 5 回)	平成24年1月25日(水) 2月8日(水)、22日(水) 3月14日(水)、18日(水)	図書館 1 階 かたりの部屋	35 名
	7	講演会	「アメリカンドリームを追いかけて」 小山田 真	平成24年3月29日(木) 16時～18時	図書館 2 階 視聴覚室	46 名
24 年度	1	講演会	「国際交渉と強調による海洋資源の確保について」 ダニエル・クルーン (主席次官補代理)	平成24年5月25日(金) 16時～17時	図書館 2 階 視聴覚室	47 名
	2	講座	「英語の絵本読み聞かせ」 在沖米国商工会議所ボランティア	平成24年6月21日(木) 10時～11時	図書館 1 階 かたりの部屋	19 名
	3	おはなし会	「英語のおはなし会」 在沖米国商工会議所ボランティア	平成24年7月13日(金) 14時30分～15時30分	図書館 1 階 かたりの部屋	23 名
	4	講座	「英語教育スペシャリストによる英語教員のためのワークショップ」 エミリー・オースティン・スラッシュ	平成24年8月14日(火) 10時～12時	図書館 2 階 視聴覚室	42 名
	5	おはなし会	「Bedtime Stories ～おやすみまえのおはなし～」 ミツイー・ウエハラ・カーター (浦添市国際交流協会会員)	平成24年8月16日(木) 15:00～15:30	図書館 2 階 視聴覚室	25 名
	6	おはなし会	「英語のおはなし会」在沖米国商工会議所 小山田 真	平成24年9月19日(水) 14時30分～15時30分	図書館 2 階 視聴覚室	41 名
	7	講座	「英語であそぼう ～アメリカの子育て～」 ミツイー・ウエハラ・カーター (浦添市国際交流協会会員)	平成24年9月20日(木) 15時～15時30分	図書館 2 階 視聴覚室	11 名
25 年度	1	企画展示	「Earth Day」(環境問題に関する資料)	平成25年4月12日(金) ～24日(水)	図書館 2 階 アメリカ情報コーナー周辺	259 名
	2	企画展示	「アメリカを旅する」	平成25年5月7日(火) ～30日(木)	図書館 2 階 アメリカ情報コーナー周辺	450 名
	3	説明会	アメリカ留学説明会 在沖繩米国総領事館職員	平成25年5月15日(水)	図書館 1 階 かたりの部屋	4 名
	4	映画会	アメリカ映画上映会「ソーシャルネットワーク」	平成25年5月18日(土)	図書館 2 階 視聴覚室	4 名
	5	講演会	「中国経済の台頭と日米関係」	平成25年6月13日(木)	図書館 2 階 視聴覚室	55 名
	6	映画会	アメリカ映画上映会「DEAD POETS SOCIETY」	平成25年6月22日(土)	図書館 2 階 視聴覚室	19 名
	7	企画展示	「Independence Day」	平成25年7月2日(火) ～14日(日)	図書館 2 階 アメリカ情報コーナー周辺	675 名
	8	講座	Rosetta Stone 説明会①	平成25年7月7日(水)	図書館 2 階 視聴覚室	19 名
	9	講座	洋書目録講習会	平成25年7月17日(木)	図書館 2 階 視聴覚室	10 名

25年度	10	説明会	アメリカ留学説明会 在沖縄米国総領事館職員	平成25年7月17日(木)	図書館2階 視聴覚室	3名
	11	映画会	アメリカ映画上映会 「DIARY of a Wimpy Kids」	平成25年7月20日(土)	図書館2階 視聴覚室	10名
	12	講座	Rosetta Stone 説明会②	平成25年7月20日(土)	図書館2階 視聴覚室	3名
	13	映画会	アメリカ映画上映会 「Revenge of the Electric Car ～電気自動車の逆襲～」	平成25年8月17日(土)	図書館2階 視聴覚室	24名
	14	講座	Rosetta Stone 説明会③	平成25年8月17日(土)	図書館2階 視聴覚室	6名
	15	講演会	「デジタル時代を生き抜く！情報リテラシーの育成」 バーバラ・M・ジョーンズ	平成25年8月29日(木)	図書館2階 視聴覚室	66名
	16	説明会	アメリカ留学説明会 在沖縄米国総領事館職員	平成25年9月18日(水)	図書館2階 視聴覚室	1名
	17	映画会	アメリカ映画上映会 「Charlotte's Web」	平成25年9月21日(土)	図書館2階 視聴覚室	14名
	18	映画会	アメリカ映画上映会 「All the President's men」	平成25年10月19日(土)	図書館2階 視聴覚室	20名
	19	映画会	アメリカ映画上映会 「The PURSUIT of Happiness」	平成25年11月16日(土)	図書館2階 視聴覚室	14名
	20	説明会	アメリカ留学説明会 在沖縄米国総領事館職員	平成25年11月20日(木)	図書館2階 視聴覚室	7名
	21	講座	ホリデーカードを書いてみよう！ 在沖縄米国総領事館職員・図書館職員	平成25年12月18日(水)	図書館2階 視聴覚室	14名
	22	映画会	アメリカ映画上映会 「Dr.Seuss's How the Grinch stole Christmas」	平成25年12月21日(土)	図書館2階 視聴覚室	14名
	23	説明会	アメリカ留学説明会 在沖縄米国総領事館職員	平成26年1月15日(水)	図書館2階 視聴覚室	4名
	24	映画会	アメリカ映画上映会 「Freedom Writers」	平成26年1月18日(土)	図書館2階 視聴覚室	9名
	25	企画展示	「Black History Month」(黒人歴史月間)	平成26年2月1日(土) ～16日(日)	図書館2階 アメリカ情報コーナー周辺	771名
	26	映画会	アメリカ映画上映会 「The Help」	平成26年2月15日(土)	図書館1階 かたりの部屋	10名
	27	講座	ミニ英会話教室 Fun!Fun!English	平成26年2月15日(土)	図書館1階 かたりの部屋	15名
	28	企画展示	「Women's History Month」(女性史月間)	平成26年3月1日(土) ～16日(日)	図書館2階 アメリカ情報コーナー周辺	644名
	29	講座	ミニ英会話教室 Fun!Fun!English	平成26年3月8日(土)	図書館2階 視聴覚室	21名
	30	映画会	アメリカ映画上映会 「Mona lisa smile」	平成26年3月15日(土)	図書館2階 視聴覚室	2名
	31	説明会	アメリカ留学説明会 在沖縄米国総領事館職員	平成26年3月19日(水)	図書館2階 視聴覚室	2名

※平成25年度の「英語のおはなし会」は、浦添市国際交流員に依頼し、月1回の定例行事とした。

表2 10周年記念事業一覧（7/31講演会配布資料（領事館作成）より）

	事業名 / 会場（特に記載がない場合は図書館2階視聴覚室）	実施日	参加人数
1	アメリカ情報コーナー 10周年記念ポイントラリー	5月5日（月）～ 9月14日（日）	
2	講演会「インフォプロと図書館の新たな役割 米国図書館協会（ALA）の取り組み：Libraries Change Lives」 講師：バーバラ・ストリプリング氏（米国図書館協会会長） 場所：浦添市男女共同参画ハーモニーセンター 1F ホール	7月31日（木） 14時～15時30分	122名
3	英語のおはなし会 講師：浦添市国際交流員	8月5日（火）	
4	なつかしの映画会『シェーン』	8月16日（土）	11名
5	夏休み映画上映会『ハイスクール・ミュージカル』	8月16日（土）	16名
6	空とぶじゅうたんおはなし会 アメリカの司書によるスペシャルおはなし会 講師：フォスターライブラリ司書	8月17日（日）	41名
7	Education USA アメリカ留学説明会	8月20日（水）	
8	コーナーデコレーション&コーナーの10年パネル展	9月11日（木） ～30日（火）	680名
9	英語のおはなし会 講師：浦添市国際交流員	9月2日（火）	12名
10	Wifi 無料体験	9月13～14日	
11	TEDをみてみよう（TED 初心者向けのプログラムより4本上映） 「ビデオによる教育の再発明」、「やる気に関する驚きの科学」、「創造性をはぐくむには」、「優れたリーダーはどうやって行動を促すか」	9月13日（土） 10時～11時40分	11名
12	講演会「ウエストサイドストーリーのひ・み・つ～えっ、ロミオとジュリエット～」 13:00～13:50 講師：ドローレス・ブラン氏 映画上映会「ウエストサイド物語」14:00～16:30	9月13日（土）	38名
13	講演会「本で伝える世界～なぜぼくが久米島で小説を書いているか～」 講師：ベンジャミン・マーティン氏	9月14日（日） 10時～11時30分	48名
14	浦添アメリカ情報コーナー 10周年記念覚書調印式	9月14日（日） 14時～15時	28名
15	2014 Education USA 米国留学セミナー 12:50～13:00 学習室 カレッジフェア 14:00～16:30 視聴覚室	9月14日（日） 12時50分～16時30分	約60名 約80名

※事業名を仮としていたものは、実施した名称であげた。 ※（予定）と記載していたが実施しなかったものは除いた。

沖縄の墓の墓室について —本島中南部にみる墓室構造の変遷—

仁 王 浩 司
(浦添市教育委員会文化課)

1. はじめに

沖縄の墓の形態については、古くは伊波普猷が「南島古代の葬制」で指摘したように、最初は共同の岩窟に放り込む風葬だったものが、板の戸を入口に立てる墓に、その後、板の戸が石の戸に変えられて、最終的には亀甲墓のような壮大な石材建築へと発展していったと考えられている。

しかし、墓の外形と比べると、墓の内部の構造については、これまであまり注意が払われてこなかったように思える。例えば2012年3月に沖縄県教育委員会より『沖縄の葬制に関する総合調査報告書』が発行されているが、墓の構造については「墓は（中略）いくつかの種類に分けられるが、基本的に屋根・墓室・墓庭の3つで構成されている。形のちがいは屋根の部分だけで、墓室や墓庭の構造はほぼ同じである」とされている。

ここでイメージされる墓室の構造は、出入口を入ってすぐにシルヒラシがあり、左右に一段ずつの棚があり、奥に三段の階段状の棚を持つものであると思われる。確かにこのような墓室は沖縄で最もよく見るタイプと言えるが、近年の発掘調査事例の増加によって、そんなイメージを覆すような、墓室内部の形態の多様なあり方が明らかになっている。

本稿はこういった墓の内部構造が時間の経過とともにどう移り変わっていくのかについて見ていくという試みであるが、このような問題に取り組んだのは私が初めてというわけではない。

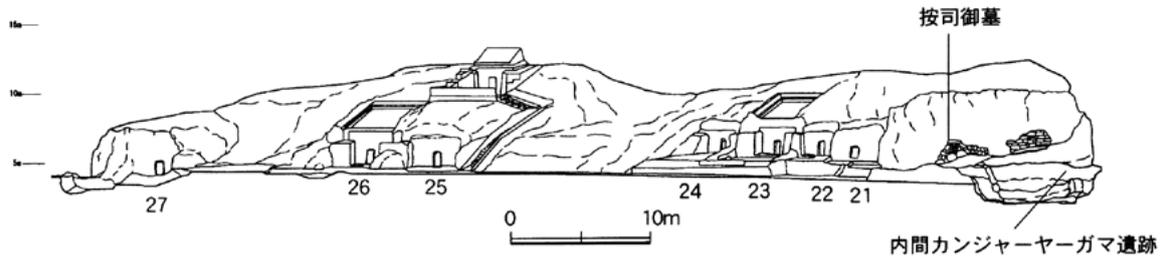
第1図は2002年に浦添市教育委員会が調査を行った内間西原近世墓群であるが、調査報告書の「まとめ」では、墓室の形態について次のように述べられている。

『墓室の棚形態を「出窓状」と「階段状」に大別したとき、出窓状棚の構築方法が古い手法と考えられた。出窓状棚は那覇市の膨大な古墓調査成果から17世紀以前を想定しており、階段状棚は1738年頃に造営された宜野湾御殿墓や1793年造営の宜野湾佐喜間墓等の事例から18世紀以降の構築方法と考えられる。（中略）つまり、棚を造らない形態→形墓（筆者注：棚に柱状の意匠を有する棚）→階段状棚へ変遷していくことが想定される。』

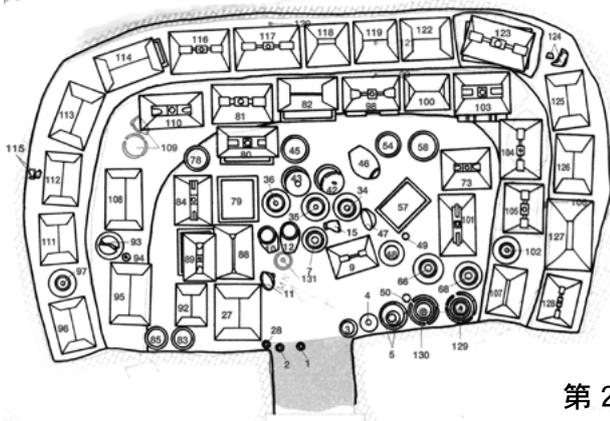
つまりここでは、墓室の構造について、棚のないものから出窓状棚に、出窓状棚から柱のような意匠を施す墓に、そして最後に階段状の棚になったという変化の方向性が示されている。さらに、2005年には沖縄考古学会の定例会において「前田・経塚近世墓群」の発掘調査で得られたデータから推察した墓室の形態と消長の表が示された。これによって墓室には様々な形態があり、それらが時間によって変化していくことが認知されることとなった。今回はこれをもう少し押し広げて、那覇・浦添をはじめとする本島中南部地域の墓について考えていく試みである。

ただし、第2図の具志川ジョーミーチャー墓のごとく、那覇・浦添地域から離れると全く違った

世界が広がっているように思えるため、今回は扱っていない。今後はそれぞれの地域からの視点で論じていく必要があるだろう。



第1図 内間西原近世墓群の横断面見通し図



第2図 具志川ジョーミーチャー墓 墓室内平面図

2. 墓室の分類

では、実際に墓の内部構造にはどのような種類があるのかについて見ていくことにしよう。私は墓室の構造を柵の形状に着目して、5つの系統に分けたいと思う。すなわち、一段柵系と出窓状系、平坦コの字状系、有段コの字状系、柵の無いものの5つである。

まずは一段柵系であるが、これは墓室の奥に柵を一段だけ造るもので、浦添市の玉城朝薫の墓や宜野湾の大山上江家古墓などにみることができる。第3図1は玉城朝薫の墓の平・断面図であるが、これを見ると奥に一段の柵を持つ墓ということがわかる。

次に出窓状系であるが、これは墓室に出窓状の柵を造り出す墓のことで、いくつかのバリエーションがある。第3図2はノーマルな状態の出窓状の柵であり、墓室の奥と左右に出窓状の柵を削り込む比較的単純な形をしている。

また、墓室内に出窓状の柵を設ける墓でも、かなり複雑な構造を持ったものがある。那覇市のナーチャー毛古墓群や安謝西原古墓群に見られる墓室で、前室と奥室の二つの墓室を持ち、それぞれに出窓状の柵を持つものである(第3図3)。これは先ほどの出窓状柵に先行するものと考え、「原出窓状」と名づけた。

さらに、墓室の奥に出窓状の柵を設け、左右にも平坦な柵を設ける墓があり、墓室の正面を見ると奥の柵に柱のような構造体があるように見える。これを出窓状の柵の変形したものと捕らえ、「出窓状柵変形」と名づけた(第3図4)。先述した『内間西原近世墓群Ⅲ』の「まとめ」で「形墓

という表現があったが、これはこのような墓室構造を持つ墓を指したものである。

次に平坦コの字状系の柵であるが、これは上から見た柵の形がカタカナのコの字をしたもので、奥壁と左右にそれぞれ一段の柵を持ち、3方の柵が全てフラットになっているものである。最も単純な形をしたものに「平坦コの字状柵」と名づけた（第4図5）。また、平坦コの字状柵の奥に、更に二段の柵を持つものがあり、これに「平坦コの字状柵+二段」と名づけた（第4図6）。さらに平坦コの字状柵の奥に一段だけ柵を持つものもあり、これに「平坦コの字状柵+一段」と名づけた（第4図7）。

次は有段コの字状系の柵であるが、これは奥の柵が左右の柵よりも少し高くなっているものの一群を差し、最も単純な形をしたものに「有段コの字状柵」と名づけた（第4図8）。さらに有段コの字状柵の奥に、更に二段の柵を持つものに「有段コの字状柵+二段」と名づけたが、これは沖縄で最も見る機会の多い墓室であろう（第4図9）。

最後に、墓の調査事例を見ていくと柵が無いものも相当数存在しており、これらを柵なしとしてひとまとめにしている（第4図10）。

以上、墓の内部構造を5系統10種類に分類した。実際には墓の調査を行うといろいろと細かな違いがあるが、このような分け方でおおむねはカバーできるのではないかと思う。

3. 編年の方法

次に墓の類型の新旧を決めていく方法について考えていきたい。おおざっぱに言うと、墓には造られた時期と使用された時期、使われなくなる時期に分けることができるが、今回問題となるのはそのうち造られた時期ということになる。しかし、墓を造った年代はそれを書いた墓誌でも見つかからない限りは分からない。そこで、今回は以下のような方法を採用した。

まず、発掘調査報告書に記載された平面図や断面図から、墓を墓室の類型ごとに分類する。例えば第5図の墓は、平坦コの字の柵に更に奥に一段の柵を持つので、平坦コの字状柵+一段となるわけである。発掘調査の結果、この墓の内部からは身と蓋がセットになった甕型厨子が4基と、身のみが2基、蓋のみが1基と、現代厨子、転用厨子がそれぞれ1基ずつ出土している。

第6図は厨子の実測図であるが、次は出土したそれぞれの厨子甕について、その特徴から新旧を割り出し、古いものから順に並べていく。厨子甕の新旧を判断する基準としては、浦添市の「比嘉門中の墓」のボージャー厨子編年と「伊祖の入れ御拝領墓」の甕型厨子編年を参考にした。例えば第6図の24-3と24-8はⅣ型式だけれども、24-10はⅢ形式といった具合である。銘書の書かれているものについては、その年代もチェックした。

そして、出土した甕形厨子を年代順に並べたの第1表である。これから見ると、第5図の墓はⅢ形式の厨子が2基、Ⅳ形式の厨子が3基、Ⅴ形式の厨子が1基ある。このうち太い四角が蓋と身がセットになったものである。また、蓋や身に書かれた銘書については、その年代に“銘書”と記入している。これを見ると、この墓は少なくともⅢ形式の上限である1800年から、最も古い銘書のある1830年代、つまり網掛の範囲の年代にはこの世に存在したであろうことが推定できる。

そして、このような手続を行った墓を型式ごとに並べると、特定の型式の墓が造られたおおよその年代を割り出すことができる。すなわち、一基々々の墓の造られた正確な年代は分からないとしても、各々の墓から確認できる最も古い時期を並べることによって、その型式の墓が造られたであろう時期を推定できるのではないか、ということである。

ただ、ボージャー厨子と甕形厨子以外の厨子については現状では細かな編年が無く、特に古手の墓によく見られるサンゴ石製の石厨子は使用年代が数百年にも及ぶため、年代の特定には使いづらい。そのため、今回は銘書が書かれているもの以外の石厨子等は考慮の対象から外している。

また、厨子甕の型式は調査報告書に掲載された図と写真から判断したもので、資料的限界があることをあらかじめ断っておきたい。さらに、調査報告書によっては銘書データのみを掲載したものもあるが、それらも参考として取り扱っている。分類した墓室について上記の手続を行ったものを第2・3表としてまとめた。

4. 墓室構造編年の結果

第2・3表で得られた全ての墓室型式の消長を、推定も交えてまとめると第4表のようになる。これをみると、一段棚と出窓状系の棚、平坦コの字状棚が古くから存在する墓室形態であることがわかる。ただし、これらの型式の墓からはボージャー厨子だけでなく、石厨子なども出土することから、実際の出現はもっと遡るものと考えられる。よって出現期はよくわからないという意味で、点線にしている。

その前提で見ていくと、一段棚のものは1640年代には存在していたであろうと考えられる。その後、しばらく存在が確認できない年があるが、その後は1900年頃までコンスタントに造られ続けるようである。

次に原出窓状棚であるが、2例しか扱ってないので何とも言えないが、1660年頃には出現していて、1720年までは続くようである。次に出窓状棚は1660年頃には出現していて、1770年頃まで続くが、その後は造られなくなるようである。出窓状変形も1750年頃には造られなくなる。

次に平坦コの字状棚であるが、これは出窓状棚系と同じ位の時期から存在しており、その後は1900年を超えるまでコンスタントに造られ続ける。また、平坦コの字状棚+二段は1680年頃に現れて1900年頃まで造られ続ける。平坦コの字状棚+一段は二段のものよりやや遅れて1730年頃に出現するが、やはり1900年頃まで造られ続ける。

有段コの字状棚は平坦コの字状棚よりやや遅れて1680年頃に出現して、1860年頃まで造られる。また、沖縄の墓で最も見る機会の多い有段コの字状棚+二段は1700年頃から出現するようである。この型式の墓は、今回の分析では1860年で途切れているが、この型式のものは現在までも引き継がれている(写真1)。最後に棚の無い墓であるが、これは造りが単純な分、古い時代から最近まで造られ続ける。



写真1 現代の墓の内部



写真2 宜野湾御殿の墓内部

5. まとめと今後の課題

以上、沖縄中南部における墓室構造の変遷を見てきたが、様々な墓の内部構造でも、一段の柵を持つものや出窓状の柵を持つもの、平坦コの字状の柵を持つものが比較的古い時期——少なくとも1600年代半ば——から存在することが明らかとなった。また、出窓状の柵を持つものが1700年代の後半には姿を消すのに対し、一段柵のものは1900年代まで造り続けられることも明らかとなった。

さらに平坦コの字状柵は、奥に二段ないし一段の柵を持つものや有段コの字状柵に細分化しつつ、最終的には今日でもみることのできる有段コの字状+二段という形態まで進化したのではないかと考えられる。また、1700年前後に様々な型式の墓室が現れるということも見逃せないことだと思う。墓室の型式が多様化するということは、この時期に洗骨や厨子の安置に対する考え方が大きく変わったのかもしれない。

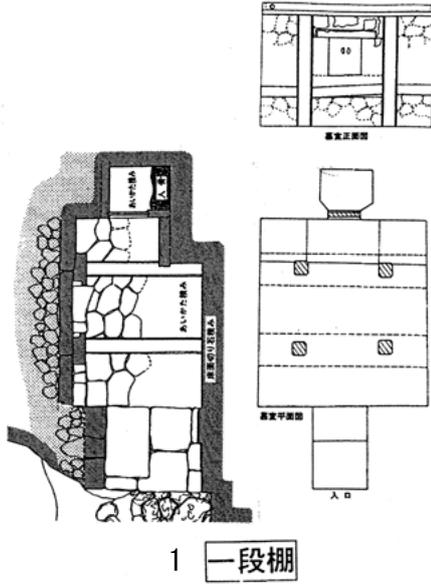
以上、近世墓における墓室形態の消長を検討したが、今回は扱わなかった墓室の形態も多々あるなど、まだまだ課題も多い。例えば写真2は1738年に造られたと考えられている宜野湾御殿の墓の内部であるが、この墓室は左右の柵は無く、正面奥のみに三段の柵を持っており、類例の少なさから今回は取り扱っていない。しかし、今後発掘調査事例が増加して類例が蓄積されると、いつかその位置づけが明らかになる日が来るだろう。

本稿を作成するにあたり、宜野湾市教育委員会の長濱健起氏をはじめ、浦添市教育委員会文化課の職員、嘱託職員の皆様に多大なるご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

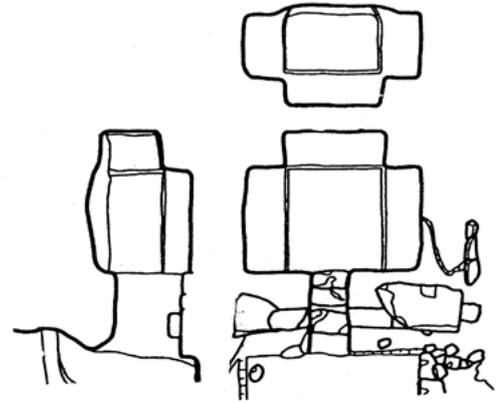
【主要参考文献】

- 安里進 『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者』 (浦添市教育委員会、1997年)
- 『内間西原近世墓群Ⅲ』 (浦添市教育委員会、2004年)
- 安里進、新里まゆみ 『比嘉門中墓の家族史』 (浦添市教育委員会、2006年)

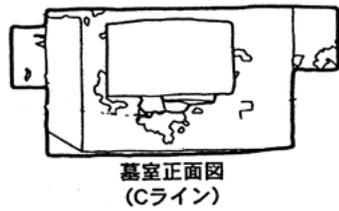
第3図 墓室の類型



1 一段棚



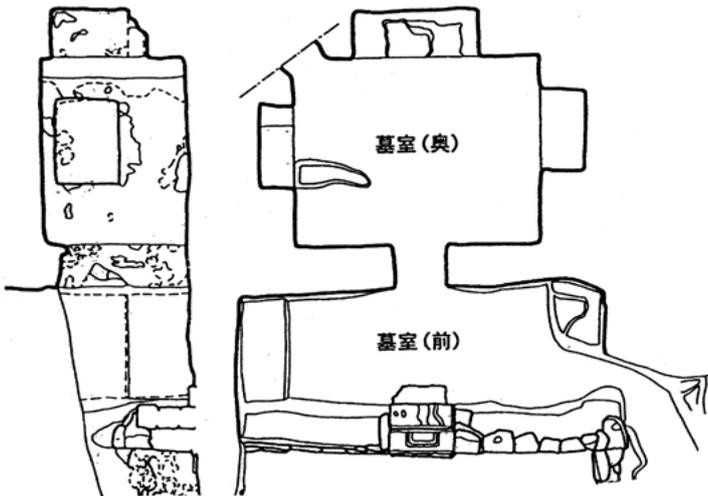
2 出窓状棚



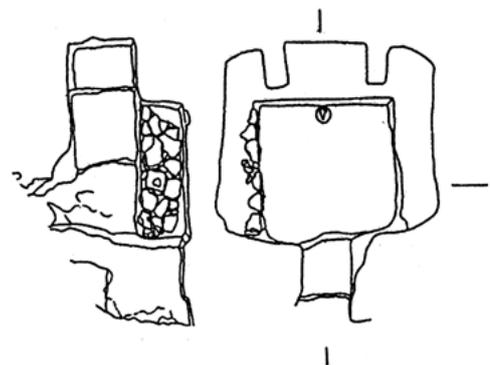
墓室正面図 (Cライン)



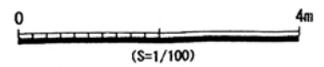
墓室横断面見通し図



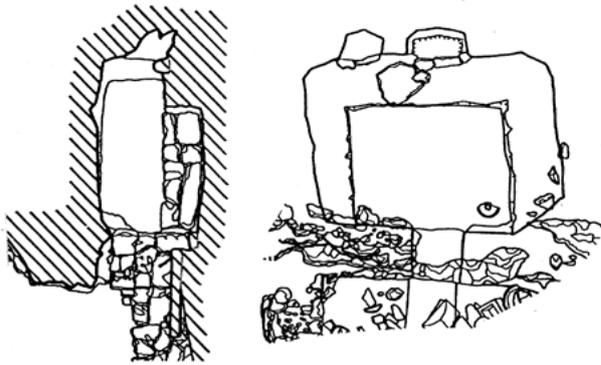
3 原出窓状棚



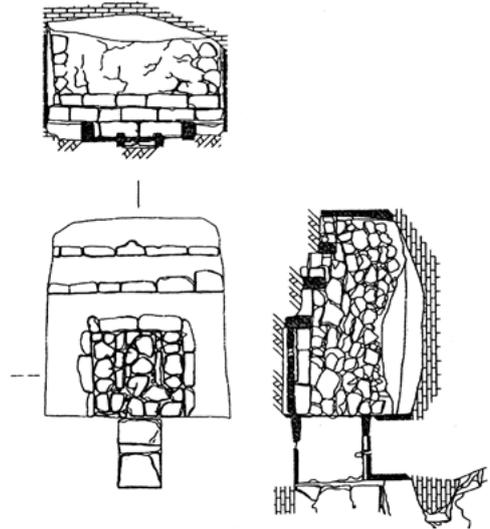
4 出窓状棚変形



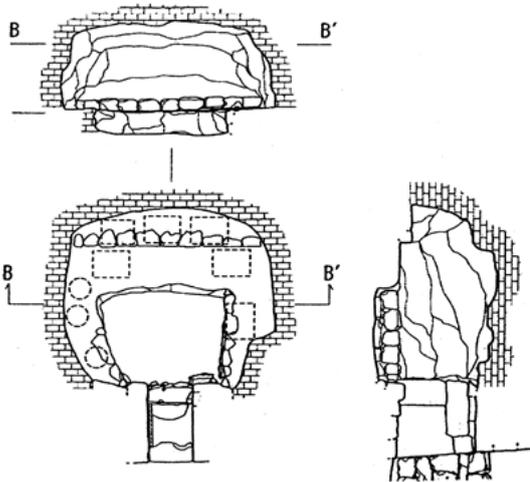
第4図 墓室の類型



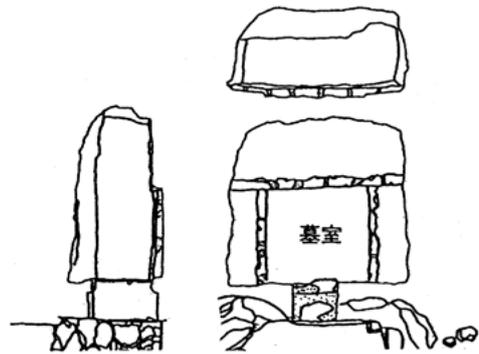
5 平坦コの字状棚



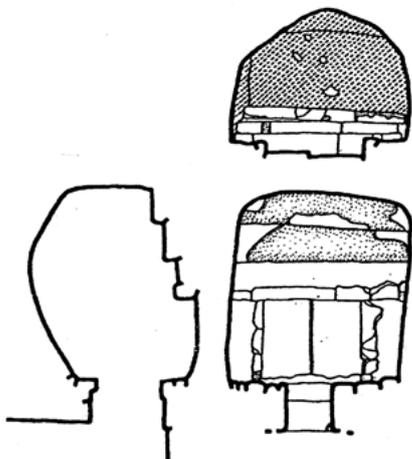
6 平坦コの字状棚+二段



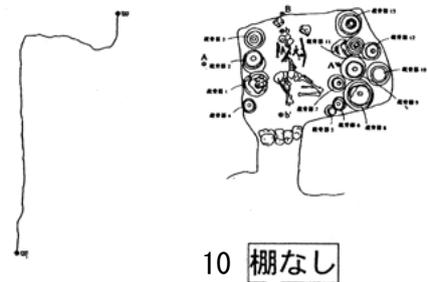
7 平坦コの字状棚+一段



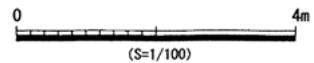
8 有段コの字状棚



9 有段コの字状棚+二段



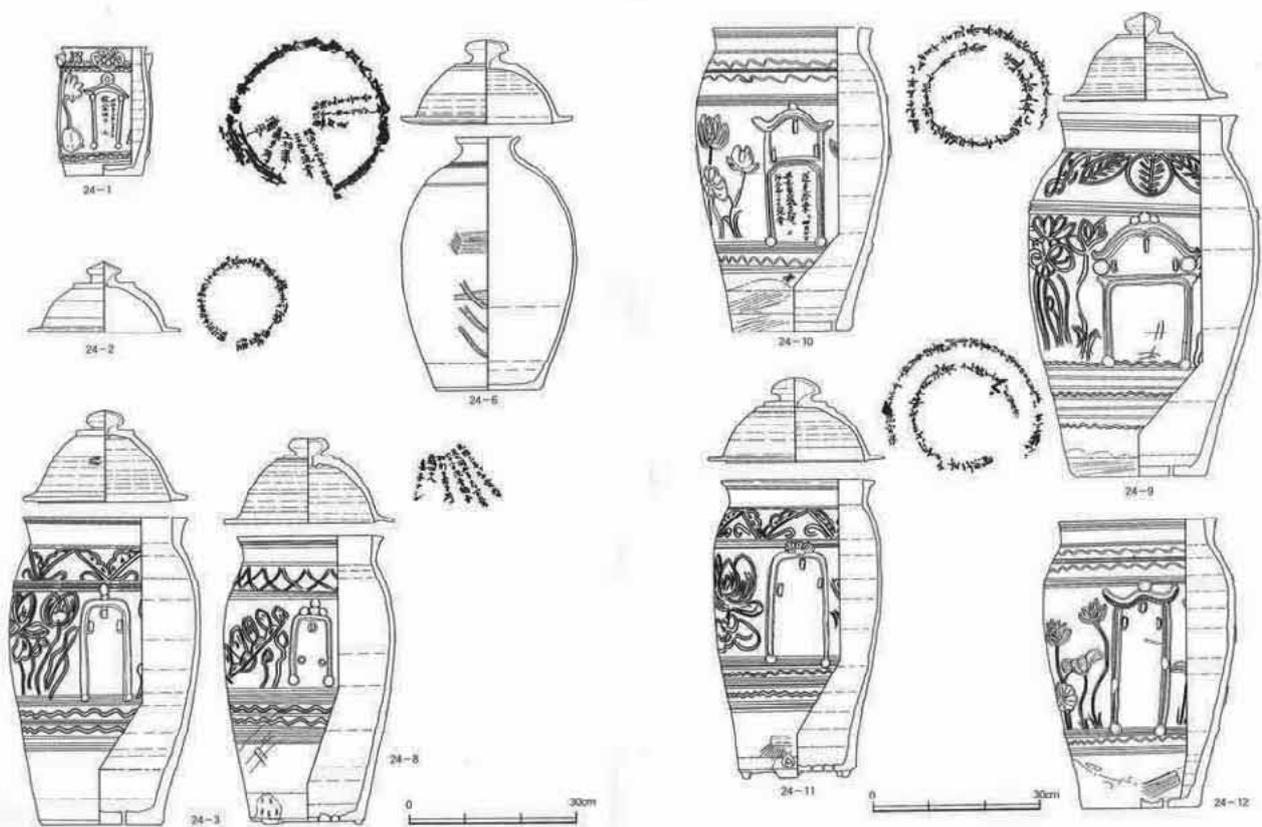
10 棚なし



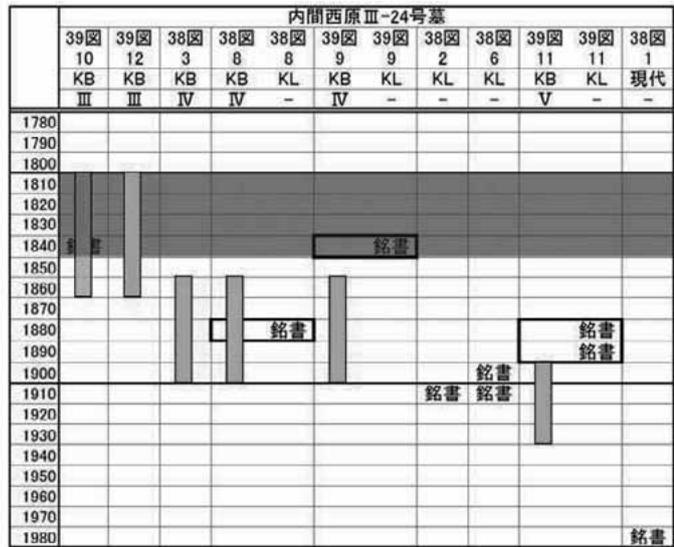
第5図 内間西原近世墓群Ⅲ -24号墓
横断面見通し図・墓室内厨子配置図



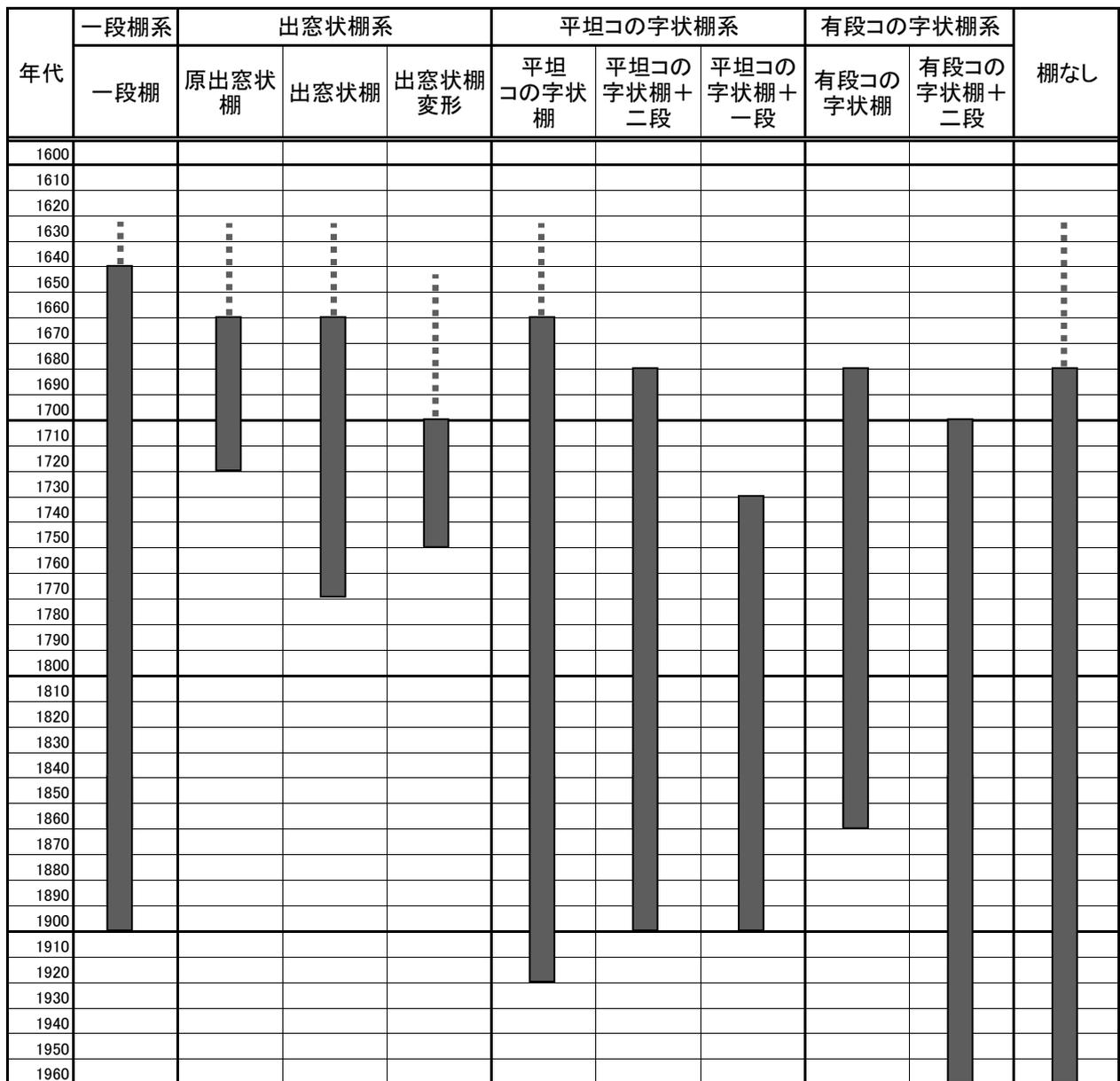
第6図 内間西原近世墓群Ⅲ -24号墓
出土厨子実測図



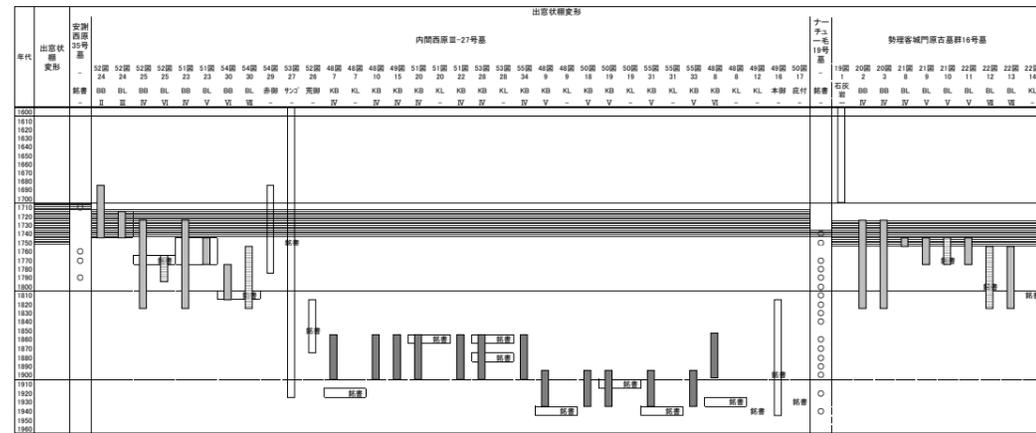
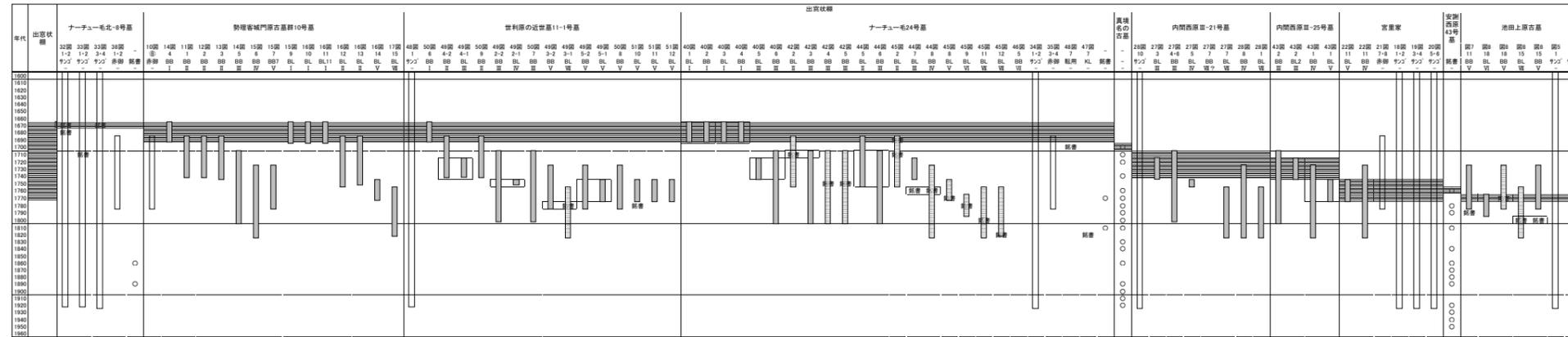
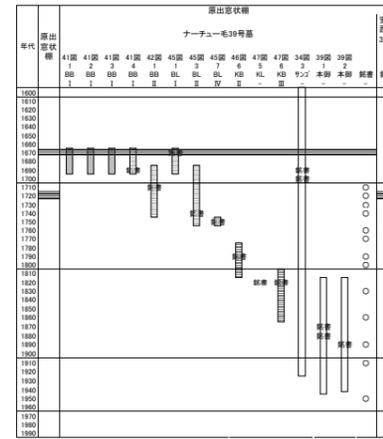
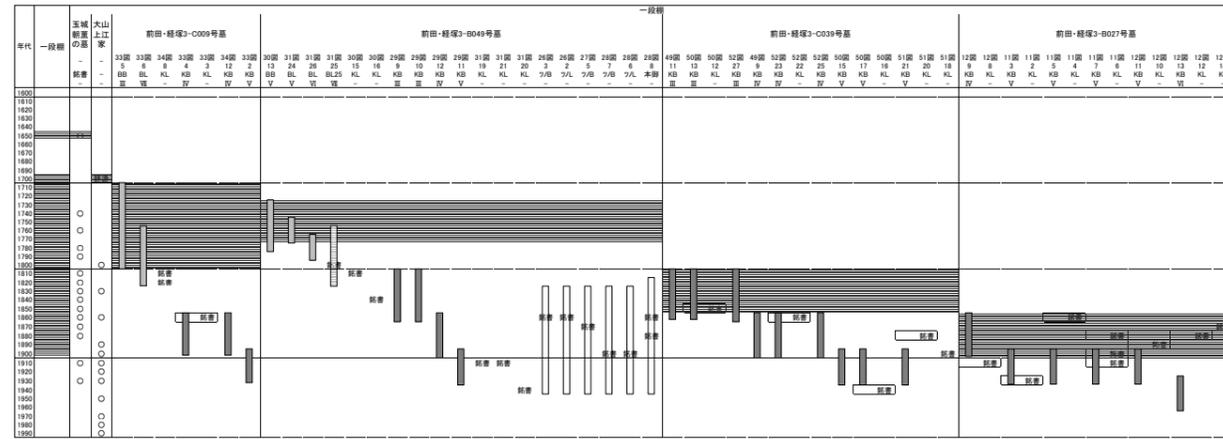
第1表 内間西原近世墓群Ⅲ-24号墓
出土厨子消長表



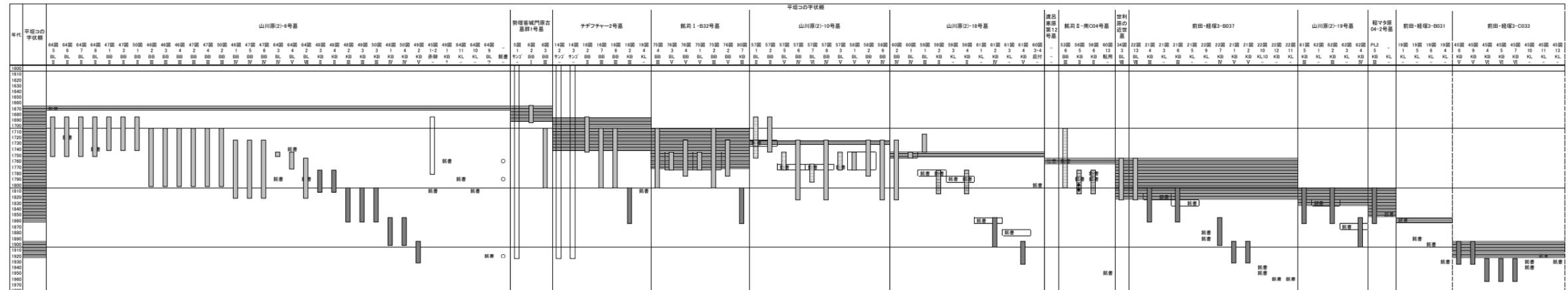
第4表 墓室構造変遷表



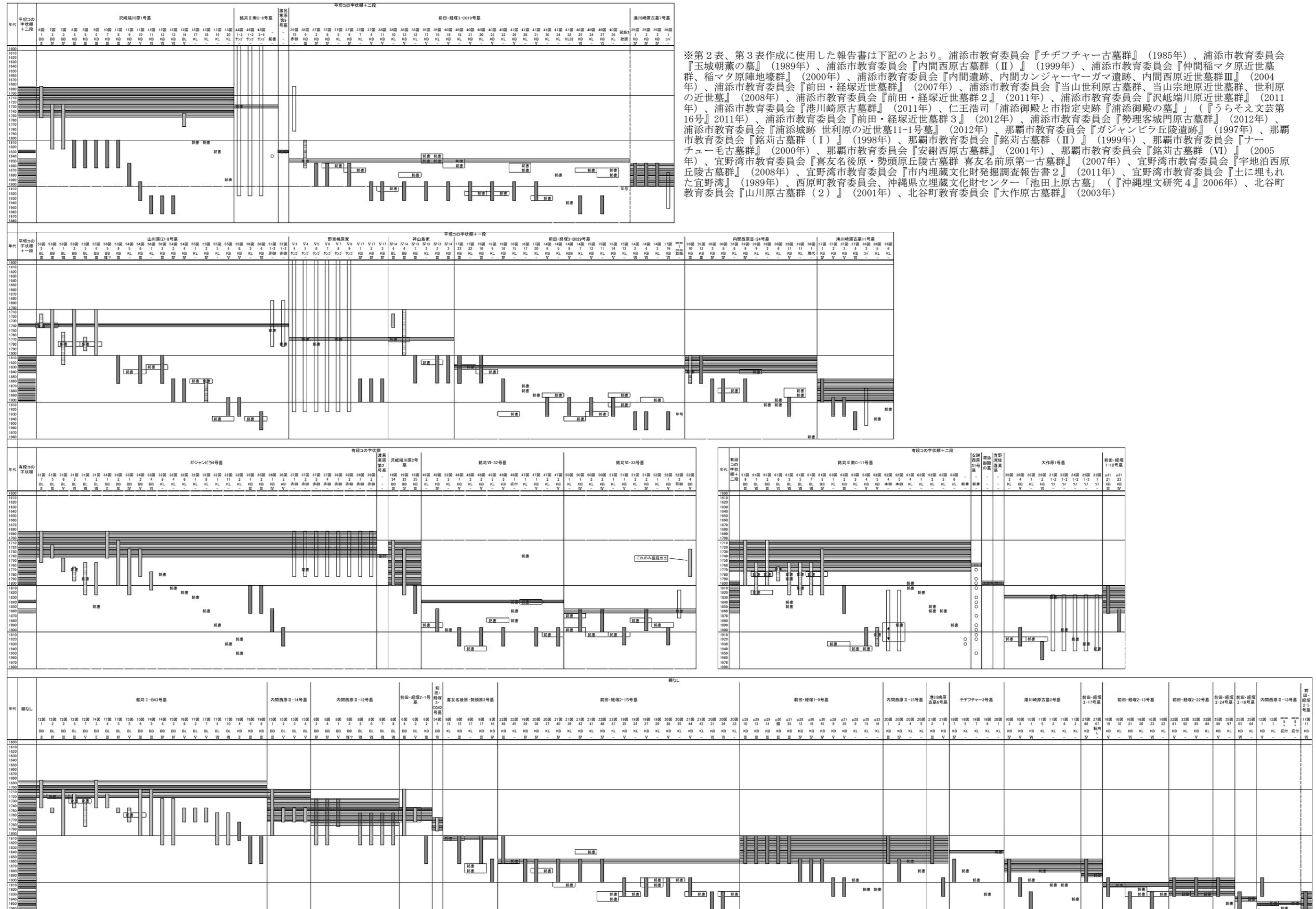
第2表



- 〈凡例〉
- ・BB：ボージャー厨子身、BL：ボージャー厨子蓋、KB：マンガン甕型厨子身、KL：マンガン甕型厨子蓋、石灰岩：石灰岩製石厨子
 - ・サンゴ：サンゴ石製石厨子、赤御：赤焼御殿型厨子、底付：底付甕型厨子、荒御：荒焼御殿型厨子、ツノ：上焼ツノ型厨子
 - ・本御：上焼本御殿型厨子、コバ：上焼コバルト掛け厨子、転用：転用厨子
 - ・銘書：死亡年あるいは洗骨年の銘書。銘書の判読が困難で推定される年代に幅を持つものは矢印で示した。
 - ・太い四角：身と蓋がセットになったもの。
 - ・○：銘書等で特定の年代が確認できるもの。
 - ・仕立or建造：記録上で確認できる墓を造った年代。
 - ・網掛：厨子の年代等を比較した結果推定される、対象となる墓で確認できる最古期の年代幅。
 - ・表の左端は厨子の年代等から推定される当該類型の存続期間。



第3表



極楽寺創建場所の考察 —極楽寺と山岳信仰— (下)

武部 拓磨・長濱 健起
(浦添市教育委員会文化課・宜野湾市教育委員会文化課)

本論 (上) のあらすじ

現在確認できる浦添グスクの縄張内には、南東側と北西側に自然丘陵の頂部が存在する。筆者は、「極楽寺創建場所の考察 (上)」(武部・長濱、2013)において、創建当初の極楽寺は、浦添グスクの北西側丘陵一帯(極楽山)を寺域としていたと想定した(図10)。その根拠として、①北西側丘陵を巡る城壁は1368年以降の構築であり¹、極楽寺が創建された13世紀後半、北西側丘陵は浦添グスクの縄張外であったと考えられること、②浦添ようどれを含むグスク時代の支配者階級の墓は聖なる山の頂部直下に造営されたと考えられることから(武部、2012)、頂部が浦添ようどれ直上に位置する浦添グスク北西側丘陵は山岳信仰の聖山であったと想定されること、③浦添ようどれの造営場所である「極楽山」は北西側丘陵一帯であると考えられることなどを挙げた。つまり、極楽寺は、浦添グスク城壁に取り込まれる以前の北西側丘陵に創建されたと考えたのである。

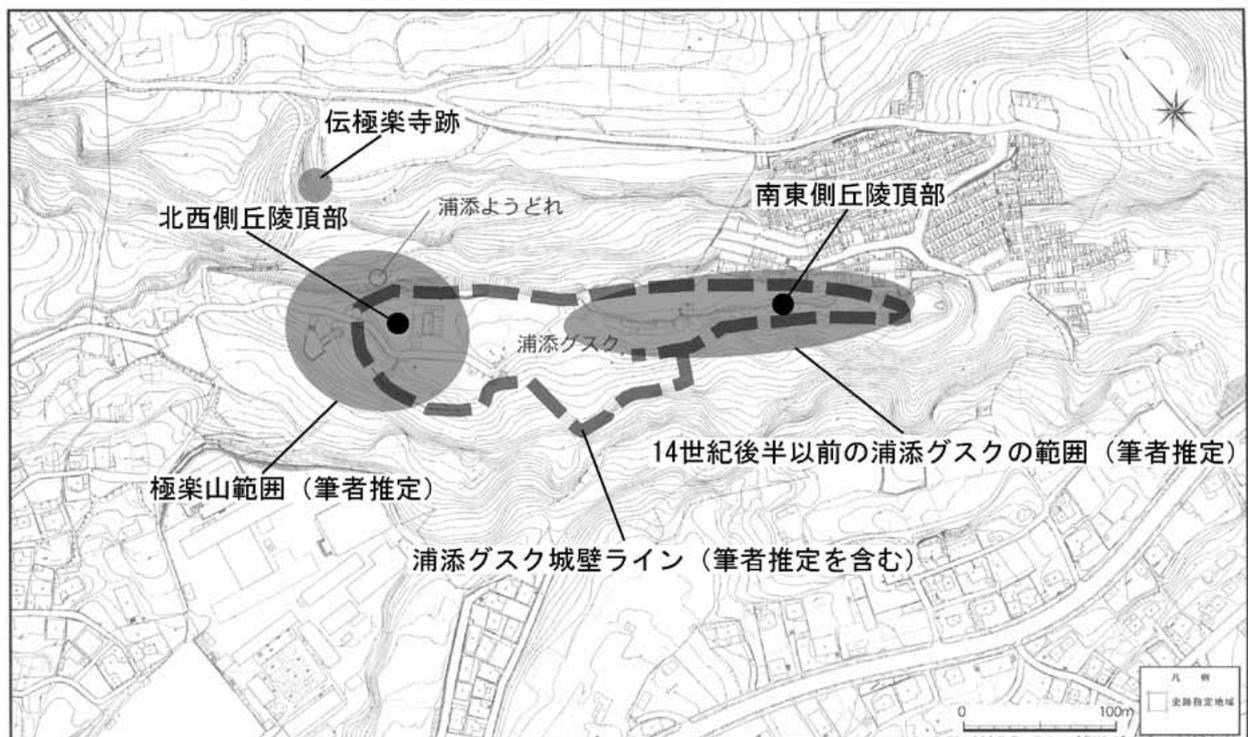


図10 極楽山と浦添グスクの推定範囲
(浦添市教育委員会、2001に加筆)

4 極楽寺の堂宇建立場所

三つの建立想定場所

浦添グスク北西側丘陵（極楽山）が極楽寺の寺域であったとして、その堂宇は山中のどこに建立されたであろうか。繰り返し述べるように、初期の極楽寺に関しては文献にわずかな記録が残るのみで、発掘調査等で新たな資料が出てこない限りその実態を把握することは困難である。ここでは、今後の調査に資することを期待して、想定される極楽寺堂宇の建立場所をいくつか提示したい。

まず最初に挙げられるのは、極楽山の麓に堂宇が建立された可能性である。極楽山の北側の麓には、戦前まで、極楽寺跡と伝わる敷地があったことが聞き取り調査で明らかになっている（図 10、浦添市教育委員会、1996・2000）。これが事実であれば、極楽寺堂宇は極楽山の麓に建立されていたことになる²。

次に挙げられるのは、極楽山中腹の浦添ようどれ墓室に建立された瓦葺礎石立ち建造物そのものが極楽寺堂宇であった可能性である。安里進は、「浦添ようどれ（極楽山）と極楽寺は、初期には一体化して」いたと推定し、「二つの洞に瓦葺礎石建物が建てられていたと考えられるが、これらは浦添ようどれ（極楽山）と極楽寺だったのかも知れない」としている（安里、2008、p.213）。浦添ようどれと極楽寺が一体化しているとする点は、極楽寺の寺域である極楽山に浦添ようどれが造営されたとする拙論と類似する。二つの洞で墓と寺院の使い分けがあったか否かは定かでないが、浦添ようどれの敷地内に極楽寺堂宇が建立された、あるいは、墓そのものが極楽寺堂宇のひとつとしてみなされていた可能性も考えられるだろう。

もうひとつの可能性として、極楽山の頂部に堂宇が建立されていたことが挙げられる。比叡山延暦寺など、山岳信仰の神体山の頂部に堂宇が建立される例は全国各地に認められる。聖山であった浦添グスク北西側丘陵に極楽寺が創建されたと考えるなら、その頂部に堂宇が建立された可能性は十分に考えられよう。浦添市教育委員会による浦添グスク北西側丘陵頂部の発掘で、城壁構築以前の層から 11～13 世紀の遺物包含層が確認されている（浦添市教育委員会、2009）。13 世紀末に創建された極楽寺と時代的に重なるため、これらの遺物が極楽寺に関連するものである可能性もある。自然の岩盤が荒々しく露出する浦添グスク北西側丘陵頂部の状況は、文献（本論（上）表 1 参照）が伝える「岩石岬岬」という極楽寺創建場所の描写にもよく当てはまる。

以上、麓・中腹・頂部、三つの堂宇建立場所を想定したが、一所に限らず、麓から山頂まですべての場所で何かしらの堂宇が建立されていてもおかしくはない。今後の発掘調査で、極楽寺に関連する遺構・遺物が発見されることを期待したい。

5 尚巴志による浦添グスク北西側丘陵の大改造

尚巴志による三つの事業

極楽寺の遷座に関して、諸史料は尚巴志によって行われたと記している。もっとも極楽寺の情報を載せた最古の史料『琉球国由来記』が編纂された 1713 年にはすでに正確な遷座時期は分からなくなっていたようで、編者は、龍福寺に祀られる歴代王の神主が舜天にはじまり尚巴志に終わることなどを根拠として、遷座を尚巴志によるものと想定している。

この情報を信じるならば、尚巴志によって、三つの事業が浦添グスク北西側丘陵で同時期に行われた可能性が出てくる。

まず一つ目は、北西側丘陵北崖中腹に造営された浦添ようどれの改修事業である。浦添ようどれは、「ようどれのひもん」（極楽山之碑文）から尚寧王代の1620年に改修されたことが知られているが、浦添市教育委員会の発掘により、14世紀後半から15世紀前半にかけても大規模な改修があったことが明らかになった（浦添市教育委員会、2001）。この際、浦添ようどれは、洞内に建立された瓦葺礎石立ち建造物に木製厨子を納める形から、洞内に輝緑岩製の石厨子を安置し石積みで塞ぎ、墓全体を石牆で囲う構造に変化している。そして、この改修を行ったのが尚巴志であると考えられる³。

二つ目は、極楽寺の遷座である。遷座を行ったのが尚巴志と考えられていることは上述したが、極楽寺の創建場所が筆者の想定通り北西側丘陵一帯であったならば、遷座もまた尚巴志による北西側丘陵の事業であったと言える。元来、極楽寺と極楽山（浦添ようどれ）は関連の強い施設と考えられ、両者の改修・遷座が同時に行われた蓋然性は高いであろう⁴。

三つ目の事業は、浦添グスクの縄張拡張である。先述したように、浦添グスク北西側丘陵上に城壁が巡らされるのは1368年以降である（浦添市教育委員会、2009）。しかし、筆者が想定するように北西側丘陵が極楽寺の寺域であったとすれば、城壁の構築は尚巴志による極楽寺遷座まで待たなければならない。すなわち、浦添グスクの縄張拡張の時間的上限は尚巴志が中山王権を奪取した1406年ということになる。また、城壁内面を埋めて城内の平坦化を図った層に15世紀前半の青磁を中心とした遺物包含層があるが、この層は城壁構築後、一定期間を置いて造成された可能性が指摘されている（浦添市教育委員会、2009、p.66）。とすれば、城壁の構築は15世紀半ば頃までには行われていたことになり、それが縄張拡張の時間的下限となるであろう。すなわち、浦添グスク北西側丘陵上に城壁が巡らされたのは第一尚氏王権が成立した1406年から15世紀半ば頃の間と考えられ、尚巴志による事業であった蓋然性は高い⁵。

以上、浦添ようどれの改修・極楽寺の遷座・浦添グスクの縄張拡張、これら三つの事業がすべて尚巴志によって行われたとすれば、それは、浦添グスク北西側丘陵一帯が同時期に大改造されたことを意味する。その動機については想像するしかないが、浦添グスクを軍事的拠点として充実させると共に⁶、英祖に関連する浦添ようどれ・極楽寺・浦添グスクを整備・補強することで自らの王権の正当化を企図したのではないだろうか⁷。

6 極楽寺の遷座場所

文献の方位観

ここまで主に極楽寺の創建場所に関連して議論を進めてきたが、次に遷座場所について考察してみたい。

上述したように、浦添グスクの西に創建された極楽寺は、尚巴志の時代に遷座したと文献には記されている。その場所に関して、『琉球国由来記』（1713年）は「寺前の谷の上」、『琉球国旧記』（1731年）は「前の谷」、『球陽』（1745年）は「浦添城の南」と伝えているが、創建場所同様、具体的な位置は判然としない。

史料の乏しさ故、遷座場所について言及した研究者は数少ないが⁸、その一人である安里は、浦添ようどれの御墓番の子孫が伝承する伝極楽寺跡を「寺前の谷」に比定した（安里、2008）。安里は、初期の極楽寺は浦添グスク北西側丘陵の北崖中腹に浦添ようどれと一体化して創建され、尚巴志時代に浦添ようどれの北崖下の伝極楽寺跡に遷座したと考えたのである（図11）。

しかしながら、安里の想定は一部の文献情報と矛盾する。伝極楽寺跡の位置が『球陽』に記された「浦

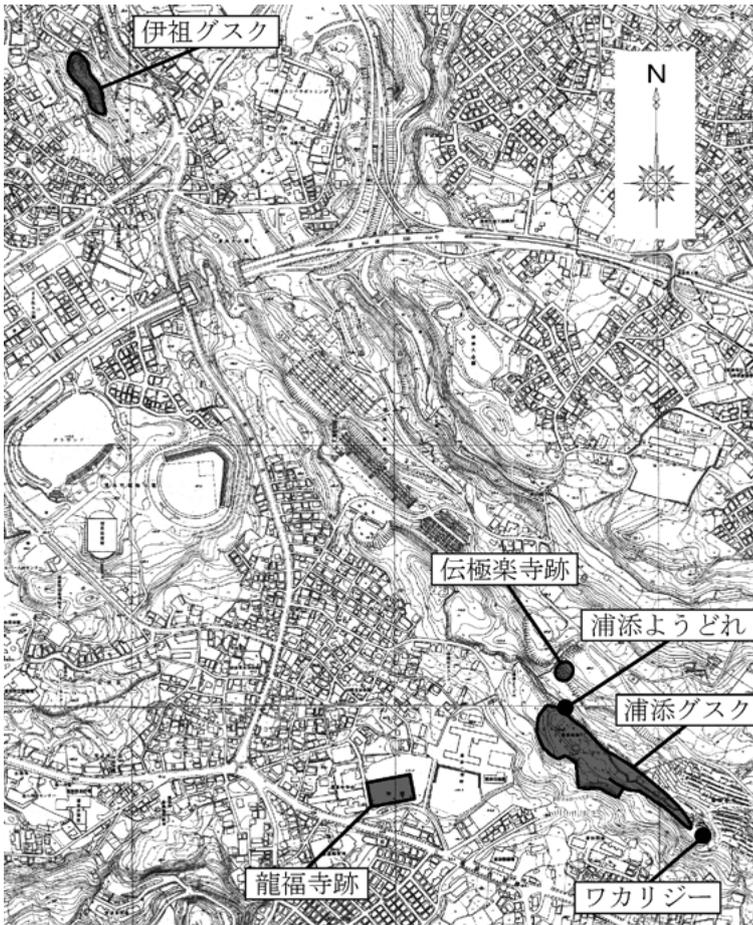


図 11 浦添グスクと周辺遺跡位置図
(沖縄県『浦添地形図』に加筆)

グスクの“西”に位置する¹⁰ (図 11)。それにも関わらず、『琉球国由来記』・『琉球国旧記』における龍福寺の建立場所は、浦添グスクの「南」と表記されているのである(本論(上)表1参照)。文献が正確な方位に基づいて記述されている訳ではないことは明らかである。

では、『琉球国由来記』・『琉球国旧記』の方位観をどのように捉えればよいであろうか。重要なのは、文献上、極楽寺や龍福寺の位置を示す基準となっている浦添グスクにおける方位的感覚である。浦添グスクは、南東—北西を軸として長く延びている。しかし、実際に浦添グスクに足を運ぶと、その軸は東—西に沿っているかのような錯覚を抱いてしまうのである。

実際、近代に浦添グスクを訪れた複数の人物が浦添グスクを東西軸で認識している。1906年(明治39年)に浦添グスクに立ち寄った菊池幽芳は、グスク南東端を「東端」、断崖を形成するグスクの南東面および北東面を「東北の二面」と認識している(菊池、1906)。また、比嘉南水は、「浦添の名所古跡」を紹介する文の中で、浦添グスクの南東端に屹立するワカリジー(為朝岩)を「浦添城の東方」とし、浦添グスクから北西方向にある伊祖グスクを「浦添城の西約半里」としている(比嘉、1911)。両者の認識は浦添グスクの長辺が東西軸と見なされている点で共通している。特に、比嘉の伊祖グスクを「西」とする認識などは、「浦添グスク長辺」＝「東西軸」という方位観が浦添グスクの外部に対してまで反映されている点で非常に注目される¹¹ (図 11)。阪谷良之進が描いた浦添ようどれ平面図において、実際には東北に面する浦添ようどれ墓室が北面して描かれているのも(浦添市教育委員会、2000、IV章 p.44)、「浦添グスク長辺」＝「東西軸」の方位観と無関係ではなかろう。

また、この方位観は現代においても見られる。浦添市教育委員会が発行した刊行物にも、伊祖グ

添城の南」にそぐわないのである⁹。

それでは、浦添グスクの南にあるという寺前の谷とはいったいどこであろうか。筆者は、浦添グスクの“西”にその場所を求めなければならないと考えている。

「浦添城の南」と記載された遷座場所を浦添グスクの“西”とするのには当然理由がある。なぜなら、文献の方位観は実際の東西南北から大きく外れ、本来の西を南と認識していると考えられるからだ。

その根拠となるのは龍福寺の位置である。本論(上)で確認したように、極楽寺は2度の遷座を経て寺名を龍福寺と改めている。龍福寺の建立場所は、1913年に糸満市兼城に遷座するまで現浦添中学校のグラウンドの位置にあったことが戦前の地図などから明らかであるが(浦添市教育委員会、2002)、その場所は実際の方位に照らし合わせてみると、浦添

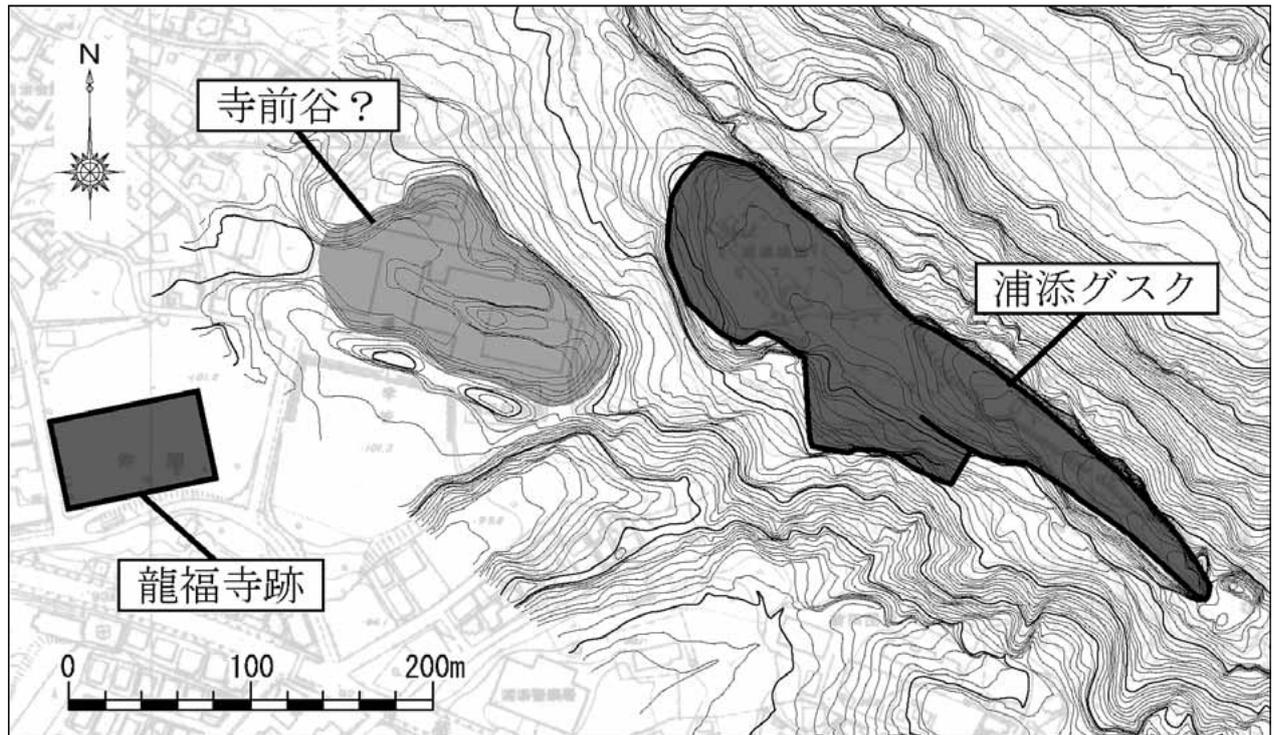


図 12 「寺前谷」比定図
 (浦添市教育委員会『昭和 20 年地形図』と沖縄県『浦添地形図』の重ね図に加筆)

スクを「浦添城跡から西約 1.6km」・「浦添城跡から西約 2km」とする記述が見られる（浦添市教育委員会、1990、p.107・205）。さらに、2013 年度の浦添城跡発掘調査に携わった現場作業員 8 人に、浦添グスク北西側丘陵において、真西がどちらかを個別に確認したところ、1 人が北、3 人が北北西、4 人が北西を指さした。浦添グスクには、人の方位観を狂わせる地形的特質がある蓋然性が高い。

『琉球国由来記』・『琉球国旧記』の記述も上述の方位観に基づいていたと考えれば、浦添グスクの西に位置する龍福寺を「南」とすることも理解できる。厳密には、「浦添グスク長辺」＝「東西軸」としても龍福寺は真南には当たらないが、東西軸である浦添グスクから南方の首里に向かって伸びる道沿いに建立されていたので、便宜上「南」と表現したのかも知れない¹²。

ところで、『球陽』において龍福寺の位置は「浦添村」とあるだけで方角に関する記述はなく、龍福寺の情報だけでは『琉球国由来記』・『琉球国旧記』と『球陽』の方位観が同じであるかは言及できない。しかし、三文献が一様に極楽寺創建場所を浦添グスクの「西」としていることを踏まえると、三者の方位観は一致するものと考えることができよう。すなわち、「寺前の谷」・「前の谷」は「浦添城の南」であり、それは、浦添グスクの“西”に求めるべきなのである。

寺前の谷の位置

上述の方位観を念頭に、極楽寺の遷座場所を検討していきたい。

改めて確認するが、遷座場所に関する文献情報は、「寺前の谷の上」（『琉球国由来記』）、「前の谷」（『琉球国旧記』）、「浦添城の南」（『球陽』）である。

『琉球国由来記』の「寺」＝「創建極楽寺」であれば、浦添グスク北西側丘陵一帯が「寺」の位置であり、「(寺) 前の谷」は北西側丘陵の西（文献上の「南」）に求める必要がある。北西側丘陵を西に下った

場所には、尾根と首里に延びる道によって挟まれた谷状の地形が存在し、ここが遷座場所の候補地と言えよう（図 12）。かつてはその谷状地形の中に東西に長い独立丘陵があり、「寺前の谷の“上”」と呼ぶに相応しい地形のようにも思われる。残念ながらこの丘陵は米軍によって削り取られてしまったため（浦添市教育委員会、1996、IV p.35）、調査を行うことは叶わない。今後、周辺を発掘調査することで、なんらかの痕跡が見つかることを期待したい。

7 極楽寺の場所に関する考古学的課題

本論の考古学的課題

本論ではこれまで極楽寺の創建場所について論じてきたが、考古学的側面から遺構や遺物を用いた見解を示してこなかった。極楽寺に直結する遺構や遺物などが確認されない現状では、考古学の実証からの賛同は得られるものではない。仮に極楽寺に関わる考古学的資料などが得られれば、本論のテーマである創建場所あるいは遷座場所について、さらに踏み込んだ検証が可能になるものと思われる。そこで、ここでは本論で取り上げた極楽寺の創建・遷座場所と想定できる地点について考古学的に検討するために、発掘調査の成果と課題について見ていくことにする。

北西側丘陵の考古学的状況

本論では、浦添グスクの北西側丘陵一帯、すなわち、その頂部に当たる現在の浦添グスク域内から中腹の浦添ようどれも含めたやや広い範囲を極楽寺創建時の寺域と想定したわけであるが、当該地における考古学的状況はどのようなものであろうか。

浦添ようどれや浦添グスクから出土する古瓦などを用いて、極楽寺の考古学的な検討を試みた研究者もいた（真喜志、1986）が、近年では古瓦以外の考古資料を積極的に用いた検討もされるようになってきている。瀬戸哲也は浦添ようどれや浦添グスクから出土した陶磁器等から、ようどれの築造を 14 世紀後半、グスクの瓦葺建物の年代を 14～15 世紀代が妥当であるとの見解を示し、「極楽寺があったとしても創建時期を 13 世紀後半に求めることは難しくなる」としている（瀬戸、2011）。しかし、北西側丘陵においては、城壁の根石を据えるために一部で削平された層より 11 世紀～13 世紀の遺物であるカムイヤキ、劃花文青磁、多くのグスク土器が得られており（図 13・浦添市教育委員会、2009）、浦添ようどれで検出した炭化物の放射性炭素年代測定でも 13～14 世紀初頭の結論が出されている（浦添市教育委員会、2005a・2005b）。さらに、瀬戸が検討資料に用いた高麗系瓦の年代も一致した見解が見られず¹³、その年代観も確定しない現状では、極楽寺またはその関連施設が 13 世紀後半まで遡るとする見解を完全には否定し得るものではない。

また、当該地では極楽寺が遷座したとされるのと近い時期（15 世紀前半）に、浦添ようどれの改修と北西側丘陵における城壁の構築が行われたことが考えられる。浦添市教育委員会は、浦添ようどれの石積みの目地が直線的に通る布積みであること、二番庭石積みの構築と同時期であると考えられている新しい時期の金属工房跡より得られた木炭の放射性炭素年代などから、浦添ようどれが 14 世紀後半～15 世紀初期頃に改修されたとしている（浦添市教育委員会、2001）。また、北西側丘陵上の城壁は、城壁構築時あるいはそれ以前の層から 1368 年初鑄の洪武通寶が得られていることなどから、14 世紀後半以降の構築で¹⁴、遺物の出土量が最も多く認められた 15 世紀前半～中ごろには、丘陵上が浦添グスクの拡張後にあつて郭内に含まれていたことを示す状況も把握されている（浦添市教育委員会、2009）。

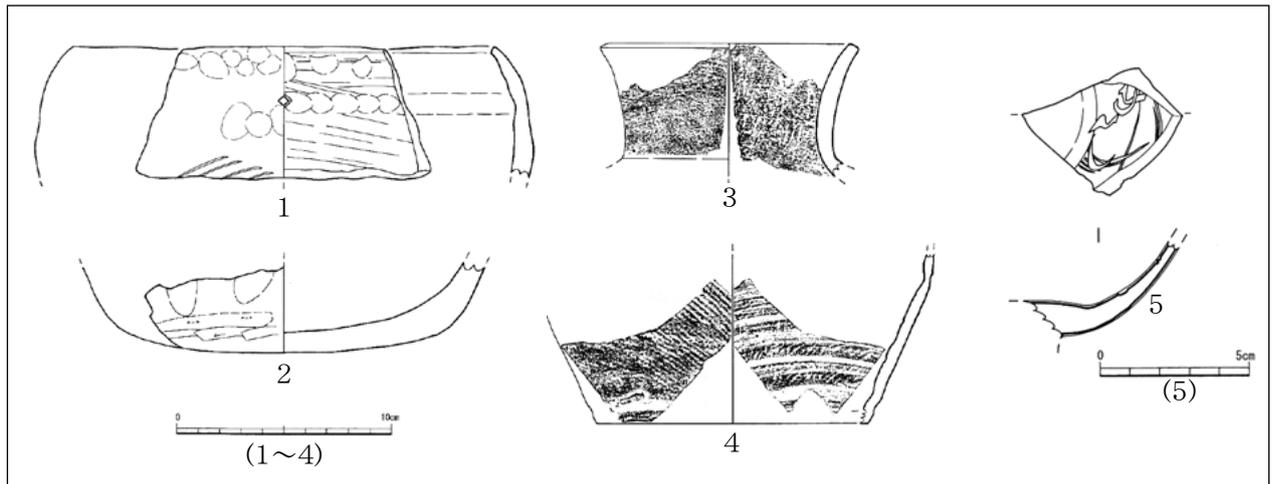


図 13 浦添城跡 内郭西地区出土 11～13 世紀代の遺物
(1・2 グスク土器、3・4 カムイヤキ、5 劃花文青磁)

すなわち、北西側丘陵一帯は 14 世紀前半以前にグスクの郭外にあつて何らかの人為的活動が行われていたが、14 世紀後半以降には浦添ようどれにおいて石積みがなされ、丘陵頂部が城壁に囲われたことが調査の成果から窺うことができる。ただし、極楽寺創建時、遷座時期において何らかの人為的な痕跡が認められているとはいえ、極楽寺に直接繋がる状況が確認されているわけではない。

伝極楽寺跡の考古学的状況

次に極楽寺が建立されていたとされる浦添ようどれ北側の「伝極楽寺跡」についてであるが、当該地は古老への聞き取り調査などから極楽寺が建立された場所としての可能性が指摘されている（浦添市教育委員会、1996）。しかし、沖縄戦中や戦後に著しく地形が改変されてしまったことなどにより、発掘調査での検証が困難となっている（浦添市教育委員会、2012）。また、当該地点が極楽寺建立の場所であったとしても創建当初の堂宇なのか遷座後の堂宇なのかは断言し得るものではない。

極楽寺の遷座場所における現状

極楽寺の 1 回目の遷座場所として、筆者らは現在の浦添小学校校舎が建てられている場所一帯を想定している。前章でも述べたように、この地点には戦前まで袋状の谷地に小高い丘陵が舌状に形成されていたようで、史料にみられる「寺前谷（上）」にも大きな齟齬がないものと考えられる。ただ、筆者らの見解は当該地点検出の考古資料をもとにした検証を充分に行っておらず推測の域を出るものではない。したがって、当該地一帯の発掘調査が望まれるが、現在は著しく土地改変がなされ、当時の面影は残っていない。今後、一帯の発掘調査において極楽寺に関する痕跡を見出せるか注意を要する。

今後の考古学的課題

以上、極楽寺の創建・遷座場所における考古学的状況などを確認したが、当該地の発掘調査は緒に就いたばかりである。今後の発掘調査において様々な遺構や遺物などの確認が期待されるが、中でも仏教寺院に関わることが想定される資料として、古瓦や仏像などはもとより仏前具などに用いられる瓶、香炉、燭台、人形、玉類などといった出土品を挙げることができる¹⁵。これらが明確な

遺構や遺物包含層に伴って得られれば、その地点一帯が極楽寺に深く関わる場所として、琉球仏教史のさらなる解明の足掛かりになるものと思われる。

8 おわりに

まとめ

本論では、(上)(下)に稿を分け、極楽寺の創建場所および遷座場所について考察した。

沖縄には古くから山岳信仰が存在したこと、浦添ようどれの造営場所が「極楽山」と称されたことなどから、創建時の極楽寺は、浦添ようどれを包含する浦添グスク北西側丘陵一帯を寺域として成立した可能性を指摘した。その際、堂宇が建立された場所は山頂から麓まで幅広く考えられ、今後、当該地域の発掘調査が待たれる。

極楽寺を遷座したと考えられる尚巴志は、浦添ようどれの改修および浦添グスクの拡張も行った可能性があり、北西側丘陵において三つの事業（極楽寺遷座・浦添ようどれ改修・浦添グスク拡張）が同時期に実施されたことが想定される。

また、極楽寺の遷座場所は浦添グスクの「南」にある「寺前谷上（前谷）」とされるが、文献上の「南」は実際の方位の“西”に相当することを指摘した。この方位観のずれが何故生じるかは判然としないが、近代から現代においても複数の人々が同様の誤った方位観を示しており、浦添グスクには人の方位観に一定の狂いを生じさせる普遍性が存在すると考えられる。浦添グスクの“西”に「前谷」を求めた場合、地形上、該当する場所は限られており、本論では、北西側丘陵の西に近接する現浦添小学校の敷地内を遷座場所に比定した。

今後の展望

極楽寺に関する史資料は非常に限られており、もとより実証的な研究に耐え得る状況にはない。それ故、本論で導いた極楽寺に関する想定はあくまで仮説に過ぎないことは言うまでもなからう。しかしながら、現時点で考え得る極楽寺像を提示しておくことは、今後、発掘調査等に資することにもなる。浦添グスク北西側丘陵やその周辺の調査が行われる際には、本論の極楽寺像を多少なりとも考慮していただければ幸いである。

謝辞

本論の執筆に当たって、浦添市教育委員会には未報告資料の掲載許可をはじめ、多くの御高配を賜った。特に佐伯信之氏には貴重な資料、多くのご助言を頂いた。記して謝意を表します。

-
- 1 浦添市教育委員会によって行われた2007年度の浦添グスクの発掘調査において、城壁内面側の根石の下層から洪武通寶（初鑄1368年）が出土したことが報告されている（浦添市教育委員会、2009）。
 - 2 伝極楽寺跡は、創建当初の極楽寺ではなく「寺前の谷」に遷座した極楽寺であるとする考えもあるが（安里、2008、p.213）、これに関する筆者の考えは後述する。
 - 3 安里らは、浦添ようどれ二番庭の石積技法、その下層からの出土遺物や炭化物の放射性炭素年代測定値などの諸

- 情報を総合し、浦添ようどれの第一次改修の年代は尚巴志王代(1422～1439年)の可能性が高いと指摘した(安里ほか、2005)。また知名は、浦添ようどれの1～4号石厨子の仏像彫刻を分析し、その製作時期を「第一尚氏王家時代、それも尚巴志王時代の製作ではなかったか」と推測している(知名、2005)。
- 4 安里は、浦添ようどれの発掘成果と尚巴志による遷座という文献情報を結びつけ、「浦添ようどれとセットで造営された寺院」である極楽寺の遷座は「浦添ようどれの第一次改修(15世紀前半)と関係していると考えられる」と言及している(安里、2008、p.201)。
 - 5 浦添ようどれ二番庭の石積と浦添グスク北西側丘陵に築かれた城壁の石積は双方とも縦目地の通る布積みであり、石積技法も積まれた石の規模も類似している(浦添市教育委員会、2001・2009)。当真嗣一によれば、このような石積技法は14世紀中葉～15世紀前半頃に成立したとされ(当真、1988・1990)、浦添ようどれの改修と北西側丘陵への城壁幅が尚巴志によって行われたとする本論の年代観と矛盾しない。
 - 6 遅くとも尚巴志の治世には王都が浦添グスクから首里グスクに遷されたと考えられ、遷都後、間もなく浦添グスクは荒廃したとする説もある。その根拠となっているのは『呉姓家譜 我那覇家』で、尚真王代(1477～1526)に浦添グスクが荒廃していた様子を伝えている(那覇市企画部市史編集室、1983、p.175)。しかしながら、浦添グスクが荒廃したのが遷都後すぐであったかどうかは判然とせず、尚巴志時代に、逆に整備・補強された可能性は否定できない。
 - 7 系図上、第一尚氏が英祖の末裔とされていることも示唆的である。
 - 8 西原栄正は極楽寺の遷座場所に関して、「現在字仲間の公民館横に寺小(ティランガマ)という地が残っているのが一寸疑問になるところである」(括弧内引用者)としているが(西原、1982)、地形的にも方位的にも文献情報にそぐわない。
 - 9 『琉球国由来記』には遷座された極楽寺の「遺址今なお存す」と記載されている。『琉球国旧記』もまた「遺跡亦存す」としている。この記述は、両文献が記された時点で極楽寺の遷座場所が明確に知られていたことを示す。『球陽』の「浦添城の南」という情報は前者2文献と異なる説明ではあるが、『琉球国旧記』のわずか14年後に書かれた『球陽』の頃に遷座場所が判然としなくなったとは考え難く、「寺前谷上(前谷)」は「浦添城の南」に求めるべきであろう。
 - 10 浦添グスクのどこにいて周辺施設の見える方角に多少の誤差が出るのは当然のことであるが、龍福寺の位置は、浦添グスク内のどこから見ても正確な方位観で南とは言い難い(図11)。
 - 11 比嘉は2年後にも伊祖グスクの位置を「浦添城の西約半里隔つる」所と紹介している(比嘉、1913)。「西」は誤字ではなく、比嘉本人の認識であったと言えよう。
 - 12 極楽寺の創建は浦添グスクの「西」とする文献に対し、筆者の想定する創建場所は正確には北西であるが、「浦添グスク長辺」＝「東西軸」で考えると、その位置は西に当たる。
 - 13 浦添ようどれや浦添グスクなどから出土する「癸酉年高麗瓦匠造」の銘のある高麗系瓦の年代については1153、1273、1333、1393年などが提示されており、現在では1273年説を推す意見(安里、2010)と1333年説を支持する見解(清水、1998・上原、2000・山崎、2000)などが活発に議論されている。また、池田栄史は歴史的観点も踏まえ、1273年と1393年の両年代の説を再評価している(池田、1998・1999)。
 - 14 北西側丘陵の城壁は布積みで目地が直線的に通る技法で構築されており(浦添市教育委員会、2009)、浦添ようどれの金属工房跡や瓦溜り遺構の上部に築かれた二番庭の石積みと共通性が見られる。
 - 15 1997年度に行われた浦添ようどれの発掘調査において、表面採集ではあるものの「明珠」と銘(陰刻)が入り、ナデ調整がなされた球状の土製品が浦添市教育委員会により確認されている(写真14)。しかし、この遺物が極楽寺に直接関連するものなのか、または浦添ようどれのどの時期に関わるものなのかは不明である。ただ、「明珠」という言葉は禅語などにも見られる用語であり、資料が仏教関連の遺物である可能性や、この資料が確認された浦添ようどれが仏教関連施設である可能性を考えることができる。本資料と同種の遺物は、現段階において県内で見受けられないため、遺構などに伴う状況での出土例が確認されれば、資料の用途なども把握しやすくなるものと思われる。



写真14 「明珠」銘の土製品
(浦添ようどれ表採)

【参考文献】

- 安里 進『琉球の王権とグスク』山川出版社 2006年
「英祖王陵浦添ようどれの造営と改修の年代」『第11回琉中歴史関係国際学術会議論文集』琉球中国関係国際学術会議 2008年
「王のグスクと王陵」『沖縄県史 各論編第三巻 古琉球』沖縄県教育委員会 2010年
- 安里 進・宮里信勇・木下秋海「浦添ようどれ石厨子と遺骨の調査成果の検討」浦添市教育委員会『浦添ようどれの石厨子と遺骨－調査の中間報告－』2005年
- 池田栄史「物質文化研究からみた韓国済州島と琉球列島－高麗時代を中心として－」『琉大アジア研究』第2号 1998年
「陶器生産技術からみた済州と琉球」『耽羅文化』第20号 済州大学校耽羅文化研究所 1999年
- 上原 静「沖縄諸島出土の古瓦と造瓦技術の伝播」『アジアの中の沖縄』第9回アジア史学会研究大会 2000年
- 浦添市教育委員会『浦添市文化財悉皆調査報告書』1990年
『史跡浦添城跡整備基本計画書』1996年
『浦添ようどれ復元基本調査報告書』2000年
『浦添ようどれⅠ 石積遺構編』2001年
『浦添原遺跡・龍福寺跡・浦添番所跡』2002年
『浦添ようどれの石厨子と遺骨－調査の中間報告－』2005年 a
『浦添ようどれⅡ 瓦溜り遺構編』2005年 b
『浦添城跡 内郭西地区 西側城壁 一史跡浦添城跡復元整備事業に伴う発掘調査報告書一』2009年
『浦添城跡 御墓番地区・外郭南地区』2012年
- 沖縄県『浦添地形図』1995年
- 菊池幽芳『琉球と為朝』文禄堂 1906年
- 清水信行「韓国論山郡開泰寺出土銘文瓦についての一考察」『日本考古学』第5号 日本考古学協会 1998年
- 瀬戸哲也「中世後期の琉球における仏教事情－考古資料からの検討－」『博多研究会誌』20周年記念特別号 博多研究会 2011年
- 武部拓磨「グスク時代における支配者の墓の考察」浦添市教育委員会『よのつち 浦添市文化財部紀要』第8号 2012年
- 武部拓磨・長濱健起「極楽寺創建場所の考察 一極楽寺と山岳信仰一（上）」浦添市教育委員会『よのつち 浦添市文化財部紀要』第9号 2013年
- 知名定寛「浦添ようどれの石厨子と仏像彫刻」浦添市教育委員会『浦添ようどれの石厨子と遺骨－調査の中間報告－』2005年
- 当真嗣一「グスクの石積について（上）」沖縄県教育委員会文化課『文化課紀要』第5号 1988年
「グスクの石積について（下）」沖縄県教育委員会文化課『文化課紀要』第6号 1990年
- 那覇市企画部市史編集室『那覇市史 資料編 第1巻8』1983年
- 西原栄正「極楽寺の変遷（龍福寺考）」浦添市教育委員会『うらそえの文化財 一第2集一』1982年
- 比嘉南水「浦添の名所古跡」沖縄教育会事務所『沖縄教育』第67号 1911年（『復刻版 沖縄教育』第4巻 不二出版 2009年）
「第二十章 名所旧蹟」中頭郡教育会『中頭郡誌』1913年（『日本郡誌史料集成 九州地方 中頭郡誌』明治文献 1973年）
- 真喜志瑤子「琉球極楽寺と円覚寺の建立について（一）－本土との交流の二つのかたち－」『南島史学』第27号 1985年
- 山崎信二「沖縄における瓦生産」『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊 2000年

歴史的な漆工芸品の科学分析

—浦添市美術館所蔵の「朱漆楼閣山水箔絵盆」について—

山府木碧¹・本多貴之¹・宮里正子²・岡本亜紀²
下山進³・下山裕子⁴・宮腰哲雄¹

(明治大学理工学部¹・浦添市美術館²・吉備国際大学文化財総合研究センター³・
デンマテリアル株式会社素材化学研究所⁴)

本研究で対象とした漆器は朱漆楼閣山水箔絵盆で、18-19世紀の琉球漆器または中国漆器と考えられる。表面は朱漆塗りで箔絵が描かれている。直径約24.3cmの円盆で、見込みには楼閣山水図が描かれ罫縁には覆輪が付けられている。これまでにこの漆器をクロスセクション、X線分析および熱分解-GC/MS法などで分析してきたが、この度さらにSr同位体比分析、X線CT写真などの科学分析を行い、漆、顔料、金属箔などの材料を調査した。そしてそれらが漆塗りの中でどのように使用されたのかも調査して新しい知見が得られたので報告する。

1. 琉球の箔絵について

箔絵とは、漆で文様を描き、上から金箔を貼って文様を表す技法である。漆が乾いた後に綿などで拭き取ると、漆によって接着した文様部分にだけ金箔が残る。細部は針のような細いもので引っかいたり、黒漆で上から描いて表現する。

琉球の漆工芸には、螺鈿や沈金、堆錦など文様を付ける様々な加飾技法があり、箔絵もその一つである。しかし首里王府の漆器製作を司った貝摺奉行所の現存する古文書や、それらを明治期にまとめた『琉球漆器考』などには、箔絵作品はほとんど掲載されていない。

わずかに、貝摺奉行所関係文書の中で『琉球漆器圖解』に記載されている1742年(乾隆7)製作の「唐台朱塗二鬼面箔押花台朱塗」¹で箔押が出てくる程度である。『琉球漆器考』でも、技法の中で取り上げている中には箔絵はなく、箔絵の上から透漆を塗る白檀塗を「箔覧塗」として紹介しているだけである²。

現存する中で時代の推察できる琉球の箔絵では、1600年(萬曆28)に首里王府より徳之島の手手の神女に与えられた免許状を収めていたと伝えられる「朱漆山水人物七宝繫箔絵丸櫃」が古い作例とされる。徳川義宣は、この徳之島の丸櫃に類似した伊是名・伊禮家「黒漆山水人物椿箔絵丸櫃」が15世紀末から16世紀中頃の、現存最古の琉球箔絵作品であろうと考えている³。

製作年代のわかる箔絵の作品として、他に1671年(寛文11)に琉球国王より尾張徳川家に贈られた「黒漆梅七宝繫沈金箔絵三足丸膳」や、箱書きに「琉球箔絵茶盆」と「安永三甲午年五月十九日」(1774年)の文字のある「朱漆山水楼閣人物箔絵楕円盆」などが知られている。

特に楕円盆は、空間をすっきりととった山水図で、楼閣の中に人物が配されている。この作品が、箔絵の皿や盆、東道盆、湯庫など18世紀から19世紀に盛んに製作された琉球の箔絵作品であると

類推できる基準資料となっている。この時期に製作された箔絵の盆や東道盆、湯庫などは、主に琉球国内の士族層が使用したものである。

そうした盆のなかで特筆されるのが縁が籐編みされた盆類で、これらは古文書に「藤盆」として出てくるものだと考えられている。本体を中国から輸入したことが古文書に記載されており、箔絵の加飾を琉球で行ったと考えられている。

貝摺奉行所関係文書には記録が出ていないものの、別の文書でこの「藤盆」が薩摩の在番奉行へ贈られたり、殿様御用として注文を受けていたことがわかっている⁴。貝摺奉行所関係文書に箔絵作品が載っていないことから、日本向けに製作された漆器にはあまり箔絵技法は用いられなかったのではないと思われるが、全く贈られなかったわけではなく、なんらかの進上品のランクのようなものがあつたのかもしれない。

2. 「朱漆楼閣山水箔絵盆」について

今回分析を行った「朱漆楼閣山水箔絵盆」(写真1)は、製作年代・来歴不詳の作品である。詳しい構造は次章を参照してもらいたい。直径約24.3cmの盆で、表面朱漆塗、裏は鍔朱漆塗・高台内黒漆塗である。文様は全て箔絵技法で、見込みに楼閣山水図を表し、2つある楼閣内に人が1人、舟の上にも人が2人いるようである。鍔には窓枠を4つ設け、枠の中には山水楼閣図が描かれ、枠外には麻葉繫文が施されている。盆裏には文様は無い。

この作品の最大の特徴は、鍔縁に覆輪が付けられ、さらにその上から朱漆が塗られていること



写真1 朱漆楼閣山水箔絵盆

である(写真2)。一般的に覆輪のある作品はそのまま覆輪が表に出ており、上から漆が塗られることは無い。かつて覆輪が表に出た状態の盆であったものが、何らかの理由で手が加えられ現在の形になったと考えられる。現在の塗り及び加飾はさほど新しいものではなく、有る程度時代がたっていることから、本体の素地構造はだいぶ古いものではないかと思われる。

今回X線調査によって、鍔の立ち上がりの素地は椀胎であることが判明している。琉球の箔絵や密陀絵の盆にもいくつも椀胎の素地構造をもつ盆があることがわかっており、盆が琉球製の可能性は有る。一方中国の盆の素地構造の調査は進んでおらず、椀胎が中国に無いかどうかはいまのところ不明である。また金属資源に乏しい琉球では、覆輪を伴う漆器はほとんど作られなかったのではないかと思われることから、この作品の本体は中国あたりで製作された可能性もおおいに有る。

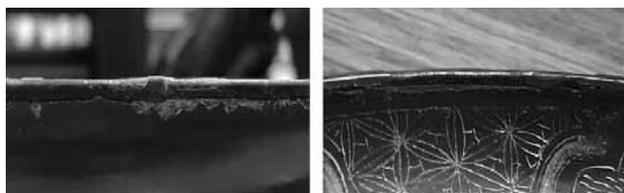


写真2 「箔絵盆」の覆輪部分
(左:覆輪の接合部、右:覆輪をカバーした塗膜部)

では現在残っている箔絵は中国なのか、琉球で作り直され施されたものなのだろうか。結論から言うと、いまのところどちらとも断定できないというのが現状である。

本作品に施された箔絵は、全体に細いやや粘り気のある線で楼閣山水図が描かれ、岩が尖った角

を持ち、箔が面状に貼られているのは岩の部分や人物などで、細い線での表現が中心である。箔絵の線で輪郭をとり、隙間を空けて箔が貼られる表現になっている。細部を引っかいたり黒漆で描くなどの表現方法は行われていない。また、見込み全体に文様が描きこまれた感じで、全体的に凹凸の無い平面的な表現である。

16～18世紀の琉球箔絵とされる作品をみると、「朱漆鳥獣草花箔絵面盆」（浦添市美術館蔵）は個々の葉や動物など文様が箔の面で表現され、「黒漆葡萄栗鼠箔絵八角食籠」（浦添市美術館蔵）も主文様である栗鼠は大きく箔の面のみで表現し、引っかきで細部を表現している（写真3）。一方18～19世紀の琉球箔絵に見られる表現は、空間を取った絵画的な画面で、ポイントとなる岩や楼閣の屋根、人物全体を多く箔の面で表現し、輪郭や細部を黒漆の線で表現する。岩は丸みを帯びた形が多い。さらに岩の箔下を盛り上げて凹凸の有る表現にした作品も作られている（写真4）。こうした点から、本作品は代表的な琉球箔絵とは明らかに表現方法が違っている。

ただし、本作品のように文様をほとんど線で表現する方法が無かったわけではなく、前章で書いた伊是名の「黒漆山水人物椿箔絵丸櫃」がその例である（しかし文様を比較した場合、伊是名の丸櫃と本作品とでは絵や線が全く違っており、同時代の作品とは断定できない）。また18～19世紀の典型的な山水図の箔絵作品の中にも、ほとんど箔線で表現した盆などもいくつか見られ、線中心の箔絵は主流ではないものの作られ続けてきたことが考えられる。本作品が琉球だとすれば、そうした線表現の流れを汲み、箔絵が18世紀の様式に固まる以前の作品かと思われる。

一方本作品の文様構成を見ると、鏝の窓枠の楼閣山水図、枠外の麻葉繫文というのは、当館所蔵の「朱漆楼閣人物箔絵稜花形食籠」など、いくつかの稜花形食籠に見られる文様構成である。文様も器物全体に施され、空間を取った表現というよりは、文様がみっちり描かれている感じである。

この食籠と同様の文様構成を持つ作品「朱漆山水楼閣人物箔絵六稜花形食籠」が、京都の相国寺に伝わっている。箔の貼紙と安永頃の什物帳に「古琉球製」とあるとのことで、安永年間（1772～1780年）を下限とした琉球作品とされている⁵。残念ながら未見で、写真で見える限り、線ではなく面的な箔の表現作品だが、“窓枠の楼閣山水図、枠外の麻葉繫文”という文様構成が盛んになった時期があり、盆もその流れで製作された可能性も考えられる。もちろん中国で盛んになり、琉球で真似して同じ形や図柄が作られたことも考えられるので、この文様構成＝琉球製とは限らないことは留意しないとイケない。

もう一つ琉球箔絵の特徴として、多くヒ素系黄色顔料の入った下付漆が使用されていることがこれまでの分析調査からわかっている。本作品も、石黄と思われる顔料が箔下から検出されていることから、技法的な共通性が指摘できる。ただ逆に、中国箔絵の箔下漆の分析がされておらず、今後の課題である。

以上のことから、本作品が琉球の箔絵か中国か、いずれの可能性もあり現在のところ断定するのは難しい。しかし今後中国の盆の素地構造や箔の下付漆の素材などを分析、比較する研究などによって、製作地を特定していくことも出来るのではないだろうか。



写真3 黒漆葡萄栗鼠箔絵八角食籠（部分・浦添市美術館蔵）

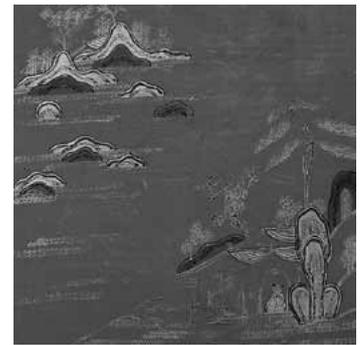


写真4 朱漆山水楼閣人物箔絵盆（部分・浦添市美術館蔵）

3. 漆の科学分析

漆は古くから塗料や接着剤として使用されてきた天然高分子材料のひとつである。縄文時代にはすでに塗料として使用されており、縄文時代の遺跡から漆塗りの器物が出土している。

漆器を科学分析するには幾つかの方法があるが、大きく非破壊分析と破壊分析に分けることが出来る。それぞれ文字通り器物を破壊せずに分析する方法と、極一部を採取（破壊）して分析する方法である。勿論歴史的な漆器を調査・分析するには非破壊分析のみで行うことが望ましいが、それらで得られる情報には限りがある。現在分析に使用される機器は試料量が極少量（1mg程度）でも十分な結果を得ることが出来るものも多く、また修復技術者と協力して調査を行うことによって、採取に適切な個所の選択・調査後の修復を見据えた採取が可能になる。

分析の結果の前に漆というものについて少し触れておきたいと思う。既に述べた通り漆は古くから塗料や接着剤として使用されてきた。漆は日本だけではなくアジアにおいて広く使用されている。塗料や接着剤として使用される漆液が採取できる樹種は主に3種類あり、日本・中国に生育している「ウルシ *Toxicodendron vernicifluum*」、ベトナム・台湾に生育している「ハゼノキ *Toxicodendron succedanea*」、タイ・ミャンマーに生育している「ブラックツリー *Gluta usitata*」である。それぞれの主成分となる脂質成分は得られるウルシ属の種類によって異なっている。ウルシの脂質はウルシオールで、3-ペンタデセニルカテコール類である。ハゼノキ（またはアンナンウルシ）の脂質はラッコールで、3-ヘプタデセニルカテコール類、ブラックツリーの脂質はチチオールで、4-ヘプタデセニルカテコール類や、3-置換および4-置換 ω -フェニルアルキルレゾルシノール類の混合物である。

これら3種類の漆は塗料として器物に塗られて塗膜を形成するとその外見から見分けることは難しい。しかし熱分解-ガスクロマトグラフィー/質量分析法（Py-GC/MS法）という手法で分析するとその分別が可能である。

4. 分析試料と分析方法

今回調査した「朱漆楼閣山水箔絵盆」は所有者である浦添市美術館からご許可を頂き、破損している部分を中心に複数箇所からサンプリングを行った。その破片を使用して非破壊分析と破壊分析を併せてトータルな分析、つまり一つの漆器に対して可能な限りの分析を行うことが出来た。

採取した箇所は①見込み端部、立ち上がりとの境目の亀裂部分から②鏝内側の欠損部から③覆輪上の3箇所である。

これらの破片に対して以下の様な分析を行った。

・熱分解-ガスクロマトグラフィー/質量分析法（PY-GC/MS法）

成膜された漆は非常に硬く科学的にも非常に安定した性質を持ち、いかなる溶媒にも溶けることはなくなる。その性質は分析する際には大きな障害になるが、Py-GC/MS法は漆を高温で加熱してガスに変化させてから分析を行うために漆を溶媒に溶かす必要がなく、塗膜の状態のまま分析を行うことが出来る。

分析装置はフロンティア・ラボ社製ダブルショットパイロライザー Py-2020iD、ガスクロマトグラフは HP 社製ガスクロマトグラフ HP6890、質量分析装置は HP G5972A、データ処理装置は

HP G 1701AJ、キャピラリー分離カラムは Ultra Alloy PY1 (100% methylsilicone)、30m、直径 0.25mm φ。膜厚は 0.25 μm を用いた。

分析条件は熱分解温度 500°C、イオン化電圧は 70eV、ガスクロマトグラムカラム温度:40 – 320°C (rate;12°C /min)、カラム流量:ヘリウム,1.0ml/min で測定を行った。

・クロスセクション分析

クロスセクションとは断面・断面図の意味で、漆器の分析では漆塗装の構造の把握などに使用される方法である。採取した塗膜片をエポキシ樹脂で固め、その断面を削りだして薄片を制作する。その薄片を顕微鏡下で透過光・反射光・偏光を用いて観察することによって塗膜断面図（主に層数や各層の成分の外観）を得ることが出来る。

・蛍光 X 線元素分析法

試料に X 線を照射すると試料中の電子が高いエネルギー状態になり、これらの電子が元に戻る際に蛍光を発生させる。この蛍光のエネルギーが元素ごとに異なるため、元素の種類を判別できる。

・顕微赤外分光分析 (FT-IR)

物質に赤外線を当て、得られた赤外吸収スペクトルから原子団や官能基を特定することができる。試料が微量でも赤外分光分析を行うことが可能。

・ストロンチウム (Sr) 同位体比分析

日本産漆と中国産漆は主成分を同じくするために、Py-GC/MS 法ではその産地を識別することはできない。そこで Sr という元素を利用した Sr 同位体比分析を用いて産地の同定を試みた。

Sr には 4 つの安定同位体、⁸⁴Sr (存在度;0.56%)、⁸⁶Sr (9.86%)、⁸⁷Sr (7.00%)、⁸⁸Sr (82.58%) が存在し、⁸⁷Sr は ⁸⁷Rb (半減期 488 億年) の β⁻ 壊変で時間とともにわずかずつ増加する。Sr の同位体組成を比べる指標として放射壊変で増加する ⁸⁷Sr と変動しない ⁸⁶Sr の同位体の個数の比である (⁸⁷Sr/⁸⁶Sr) を用いる。この同位体比は Rb/Sr の濃度の比と時間によって変化する。古い時代にマントルから分化した大陸地殻と最近マントルから分化した大陸地殻を比べると古い大陸地殻がより高い (⁸⁷Sr/⁸⁶Sr) を持つ。日本列島はいろいろな起源や年代を持つ岩石がモザイクのように複雑に混ざっているが、平均すると中国大陸の岩石より若い年代を持つ。そのため日本列島と中国大陸と比べると、より古い時代にマントルから分化した岩石が多い中国大陸の岩石は一般に高い (⁸⁷Sr/⁸⁶Sr) を持つ。

Sr は Ca と同族元素であるため Ca とよく似た性質を持っている。植物中の Sr は Ca と同じように土壌から吸収され植物組織に運ばれる。そのため植物中の (⁸⁷Sr/⁸⁶Sr) を調べることによって、その植物が生育したのが中国大陸か日本列島かを判別することができる。

・赤外線写真

赤外線写真とは近赤外線 (波長がおおよそ 0.7-2.5 μm の電磁波で赤色の可視光線に近い波長をもつ。性質も可視光線に近い特性を持つため「見えない光」として応用される。) を撮影した写真で、顔料などに反応して紫外線を吸収し、その個所を黒く写す。

・X線CT写真

X線CT (Computed Tomography) は器物の断層撮影の一種で、360度から撮影したX線撮影画像データを3次元の立体画像に再構成する技術である。X線写真と異なり、任意の方向からの断面観察が可能になり、内部の複雑な木胎構造を知ることができる。

・年代測定法

放射性炭素年代は加速器質量分析法 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS (Accelerator Mass Spectrometry) 法、アメリカ NEC 製 1.5DH) で測定した。得られた ^{14}C 濃度は同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 時代、暦年代を算出した。試料の前処理は超音波洗浄、酸、アルカリ、酸洗浄 (塩酸: 1.2N、水酸化ナトリウム: 1.0N、塩酸: 1.2N) を順次行い測定した。

5. 結果と考察

・Py-GC/MS 法

「朱漆楼閣山水箔絵盆」から塗膜を微量採取して Py-GC/MS 分析を行い、TIC (トータルイオンクロマトグラフ・ガス化、分離化した結果をすべて一つの図の中に収めたもの) から漆の主成分分析の際に利用されるアルキルフェノール ($m/z108$) のイオンクロマトグラフを抽出して漆の種類を推定した (図1)。その結果、ウルシオール (ウルシ) の重合物が熱分解して得られる 3-ペンタデシルフェノール (P15) と 3-ヘプチルフェノール (P7) が確認された。このことからこの漆器に使用された漆は主成分がウルシオールである日本・中国産の漆であることが推察出来る。

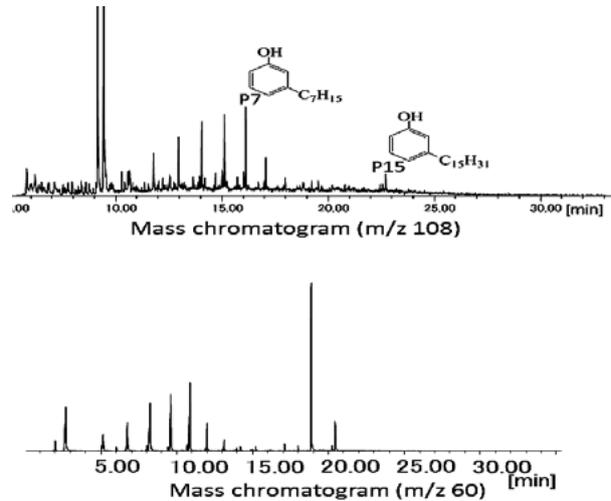


図1 「箔絵盆」塗膜の Py-Gc/MS 分析の結果

カルボン酸 ($m/z60$) のイオンクロマトグラフを抽出すると、パルミチン酸やステアリン酸などの脂肪酸類が含まれていることが分かった。このことから塗膜に乾性油を混ぜていることが示唆された。沖縄では高温多湿の気候から漆の乾きが比較的早い。乾燥をコントロールするために油を入れたり、漆塗膜の艶をよりよくするために油を入れたものと推察される。

また硫化水銀の分子量 ($m/z202$) では特徴的なスペクトルパターン (水銀の7つの安定同位体) が確認でき、朱色顔料として辰砂 (水銀朱 HgS) が使用されていることが示唆された。

・クロスセクション分析

「朱漆楼閣山水箔絵盆」の複数の箇所から塗膜を微量採取し、漆塗装の構造の確認と個所によっての構造の差の有無などを観察した。それらのクロスセクションが写真5と6である。

A. 見込み端部

写真5の左上と左下の写真が見込み端部から採取した塗膜片のクロスセクションである。左上の透過光下の写真を見ると白色の下地を含めて3層の構造になっていることがわかる。下地の上に赤色顔料が混和された漆層が2層塗られているがその顔料は異なっており、下層はベンガラ (酸化鉄 Fe_2O_3)、上層は辰砂 (水銀朱 HgS) である。偏光下 (写真5左下) で観察を行うと赤色の違いがよ

くわかる。また下地は白色の光が多く見えていることから、細かい鉱物が多く使用されているということもわかる。辰砂が使用されているという結果は Py-GC/MS の分析結果とも一致する。

下地とベンガラ層が大きな段差を生じているのは、見込みの端部で立ち上がりとの接合部分からの採取であったためであると考えられる(写真右側が立ち上がり方向)。下地付けの段階ではまだ凹凸があり、ベンガラ漆を塗る段階で凹凸を調整していたと推察される。

B. 鏝上部・覆輪付近

写真6の上段の写真が覆輪付近から採取した塗膜片のクロスセクションである。こちらも見込み端部の塗膜片と同じく白色の下地に2層の赤色漆層が塗られている。しかしこの塗膜片にはもう1層密度の濃い赤色層(ベンガラ)が存在する。透過光下の写真(写真6左上)からわかるように、上から1層目のベンガラ層と3層目のベンガラ層とでは混和されている顔料の量が明らかに異なっている。偏光下写真(写真6右上)からも密度の違いが分かる。これは顔料の配合が異なる漆が塗られていることが明らかで、上1層は下2層とは異なる時期や場所で塗られた可能性が高いと推察される。

C. 覆輪上

写真5の右上と右下の写真は覆輪上から採取した塗膜片のクロスセクションである。これまでの2つのクロスセクションとは異なり、黄褐色の厚い下地が1層あり、その上に薄い赤色漆が1層塗られている(写真5右上)。この赤色漆は覆輪付近の塗膜の最上部に塗られていたものによく似ており、こちらの顔料もベンガラであった。黄褐色の下地は偏光下写真(写真5右下)を見ると鉱物主体の下地であることが分かる。下地全体に黄褐色を呈していることから漆が多く含まれていると推察される。

これらの結果から器は全体に下地+朱漆(ベンガラ)+朱漆(辰砂)の構造で塗装がされており、覆輪の部分には当初は漆は塗られていなかったと考えられる。しかし後の修理か何かで覆輪部分にも朱漆が塗られ、その際に覆輪部分からはみ出した朱漆が付近の塗膜にも塗られてしまったため、覆輪近くの塗膜にも1層ベンガラ層が存在すると推察できる。

・蛍光 X 線元素分析法

まず採取した破片の状態での X 線分析をしたところ、Hg が多く検出された。これは赤色顔料に辰砂を使用しているためと考えられ、Py-GC/MS やクロスセクションの結果とも一致する。

また覆輪上の塗膜からは Fe の他、Zn や Cu、Pb が多く検出された。この Fe は赤色顔料にベン

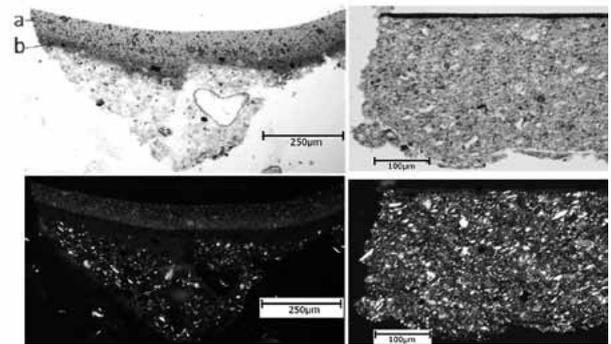


写真5 試料のクロスセクション1
 上段左：見込み端部の塗膜の透過光写真
 上段右：覆輪上の塗膜の透過光写真
 下段左：見込み端部の塗膜の偏光写真
 下段右：覆輪上の塗膜の偏光写真

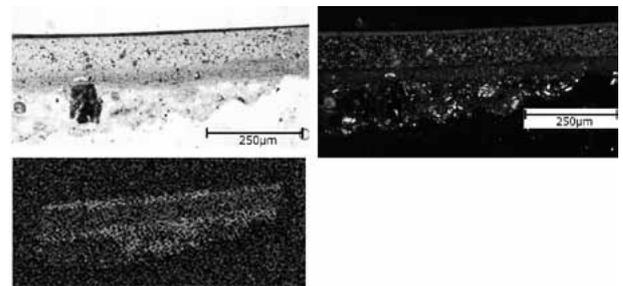


写真6 試料のクロスセクション2
 上段左：縁付近の塗膜の透過光写真
 上段右：縁付近の塗膜の偏光写真
 下段左：蛍光 X 線元素分析マッピング分析 (G:Fe, R:Hg)
 下段右：蛍光 X 線元素分析マッピング分析 (G:Fe, R:Hg)

ガラスを使用しているためと考えられる。Zn や Cu、Pb は顔料由来のものではなく、覆輪由来のものであると推察される。このことから覆輪の素材は真鍮か、丹銅であると考えられる（図2）。

このほかに覆輪上から採取した塗膜片のクロスセクションにマッピング分析を行ったところ、下地にも多く Fe が含まれており、Hg 層、Fe 層が順に塗られていることがはっきりとわかった（写真6 下段）。

・顕微赤外分光分析

見込み端部の塗膜のクロスセクション（写真5 上段右）の2層（a層とb層）についてそれぞれATR-FT/IRを測定した分析結果を図3に示した。その比較のために中国産漆塗膜のATR-FT/IRも測定したので、それらの測定結果を併せて図3に示した。見込み端部の塗膜のクロスセクションの2層（a層とb層）と標品として用いた中国産漆塗膜のATR-FT/IRスペクトルは同様なスペクトルが得られたことからクロスセクションの2層（a層とb層）に使われた漆はウルシオールを主とする漆液が使われていると考える。

・Sr 同位体比分析^{6~8}

Py-GC/MS法によって使用されていた漆はウルシオールが主成分の漆であることがわかった。

同位体比分析では列島の漆は $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}=0.710$ 以下を示し、それに対して大陸の漆は $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}=0.712$ 以上を示すことが報告されている。

本試料から塗膜片を約30mg採取して東京大学地震研究所のマルチコネクタ型誘導結合プラズマ質量分析計（MC-ICP-MS）を用いて試料を測定したところ、この試料に使用されている漆は $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}=0.7137$ を示し、中国大陸産の漆であることがわかった。

・赤外線写真による分析

この「朱漆楼閣山水箔絵盆」は見込み全体と鏝の内側に箔絵が描かれている。肉眼観察ではこれといった違いは見られないが、赤外線写真を見ると鏝の部分の絵は色が濃く写り、見込みの部分の絵はほとんど写真には映らないという結果になった（写真7・巻頭カラーを参照）。これは一見同じように見える箔絵の部分に個所によって異なる技法が使われていることが推測できる。この結果をもとに鏝の破損した部分で箔絵が描かれた個所から破片を微量採取しクロスセクションとX線分析を行った。その結果辰砂層と金箔の間に一層顔料層があることがわかった。顕微鏡偏光下観察と蛍光X線元素分析によりその顔料はAsであることがわかった。

このAsは石黄（ As_2S_3 ）であると考えられる。石黄は中世まで黄色顔料として使用されていたが、現在は毒性を有することから顔料として使用されることはない。

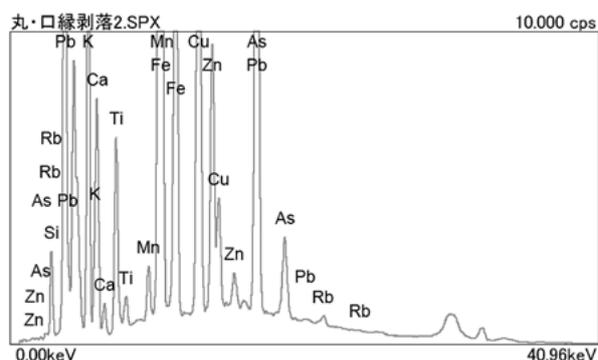


図2 覆輪上の塗膜の蛍光X線分析の結果

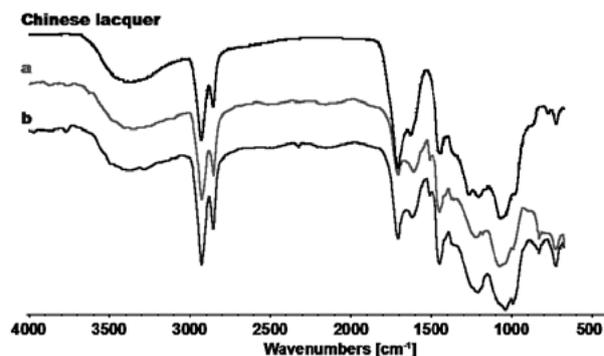


図3 見込み端部の塗膜の顕微IRスペクトル

箔を貼るためには先ず漆で絵を描く必要がある。その際、地と同じ色では塗った個所がわからなくなってしまうために黄色漆を使用したと考えられる。黒漆ではないのは金箔の下に黒色を置くと箔の色が暗く鈍く見えてしまうのに対して、黄色は明るく発色をよく見せる効果があると期待されたと考えられる。

このことから金箔の下に As が置かれている個所が赤外線写真で色が濃く写り、As が無い個所は色が濃くなることはなかったと推察できる。しかし見込みの部分にも漆で絵を描いたことは間違いはないので、他の色の漆を使用したか、石黄の量が鏝部分に比べて少ない漆を使用した可能性がある。

・ X 線 CT 写真による観察

X 線 CT 写真を撮影した結果（写真 1 右）底板は一枚板ではなく 5 枚の板を継ぎ合わせているということ、そして立ち上がりの部分は巻胎技法（木を薄くテープ上にしたものを輪状にして重ねている）で作られていることがわかった。この他に全体的に非常に厚く錆漆が塗られており、高台は削り高台ではなく錆上げによるものだということが判明した。

・ 年代測定

「朱漆に箔絵技法の漆器」は古くは 16 世紀頃まで遡るが、最盛期は 18 世紀から 19 世紀である。本研究対象の「朱漆楼閣山水箔絵盆」はその代表的な一つであるとみられていた。しかしその塗膜を炭素 14 年代測定法で分析したところ 1521 年～1591 年（59.4%）と 1623 年～1654 年（36.0%）の結果が得られ、その制作年代は 15 世紀中頃から 17 世紀中頃の間を遡ることがわかった（図 4）。

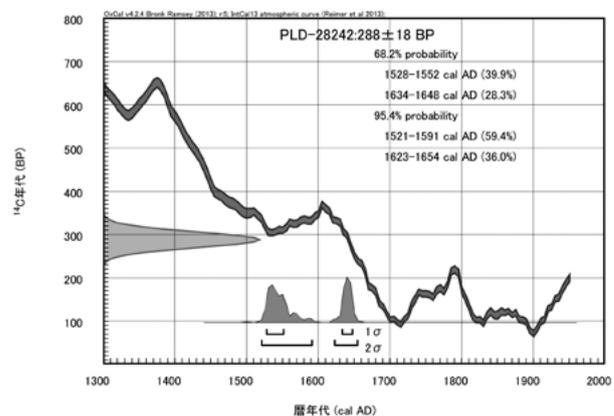


図 4 「朱漆楼閣山水箔絵盆」の暦年校正・年代測定の結果

本箔絵盆を各種理化学的材料評価法で分析したところ中国のコウヨウサンで木胎が作られ、中国産の漆液が使われ、琉球にない覆輪構造を有する盆であることが分かった。このことから本箔絵盆は中国で作られ、それが琉球に渡り、加飾されたと考えられる。これまで、このような朱漆箔絵盆は 18 世紀から 19 世紀の琉球漆器と思われていたが、本箔絵盆の制作年代を測定したところ 15 世紀中頃から 17 世紀中頃の間を遡ることがわかった。この年代の違いは何を意味しているのかを今後詳しく検討する必要がある。それを考えるには、18 世紀中ごろは紅型が成立し顔料が利用され始めた時代であること、17 世紀はその後壺屋に統合される湧田窯に朝鮮系技術や大陸の工芸技術などが盛んに導入される時期であり、工芸の技術集団の渡来史も考慮する必要がある。また、「朱漆の箔絵盆」が発展する前の時期にどのような基盤作りがあったのか、その漆芸伝来の時期や技術の発展期を考えることが重要になってきた。更に琉球のもの作りの技術史、文献史学および琉球漆芸研究で「朱漆に箔絵盆」の技術発達期を研究する必要があると考える。

6. まとめ

以上の分析からこの朱漆楼閣山水箔絵盆は①主成分はウルシオールで、日本・中国・韓国に生育している「ウルシ *Toxicodendron vernicifluum*」の漆液が使用されており、② Sr 同位体比分析の結果、

その漆は中国産のものであることがわかった。また③下地+赤色層 2 層の層構造で全体にわたって塗られているが、④覆輪の部分のみ、下地+赤色層 1 層の構造である。また覆輪付近の塗膜にもその赤色層が塗られている。これは覆輪に漆を塗った際に境目を分からなくするために塗ったと考えられる。⑤顔料はベンガラと辰砂が使われており、ベンガラ、辰砂の順で塗られている。⑥下地には鉄分が多く含まれていることもわかった。⑦立ち上がり部分は巻胎技法が使われており、⑧底板は 5 枚の板をつなぎあわせて作っている。また⑨樹種は、スギかコウヨウザンであることが樹種同定によりわかった。

琉球漆器には覆輪を伴う作は見られないことから、この箔絵盆は中国の作、もしくは中国で素地などが作られ琉球で加工され加飾された可能性もある。

今後も出来る限りの種々の科学分析を行い、材料や技法などを明らかにすることを目的に研究を続ける。

謝辞

Sr 同位体比分析の測定では東京大学の吉田邦夫先生、中井俊一先生に、X 線 CT 写真の撮影では九州国立博物館の川畑憲子先生に、樹種同定では(独)森林総合研究所の能城修一先生に大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本研究の一部は、平成 24 年度科学研究費補助金基盤 (B) (研究代表者：宮腰哲雄) と平成 25 年度漆の戦略的研究基盤形成事業 (研究代表者：宮腰哲雄) の助成を受けたものである。ここに記して感謝申し上げます。

【引用参考文献】

- 1 仲北聡子「資料紹介 『琉球漆器圖解』」(浦添市美術館『浦添市美術館紀要第 10 号』2001 年)
- 2 「貝摺奉行所関係」(那覇市企画部文化振興課編『那覇市史資料編第 1 巻 10 琉球資料(上)』所収 1989 年、石澤兵吾『琉球漆器考』(1889 年)
貝摺奉行所関係文書は王府の製作した品の図案や寸法、材料、経費等を記した文書で、王国時代の漆器製作を研究するには欠かせない文書だが、ほとんど現存しておらず、『琉球漆器圖解』の記録と 1827 年・29 年・70 年の 3 年分が残っているだけである。
- 3 徳川義宣「沖縄縣 伊是名傳存の丸櫃について」(徳川黎明会『金鯨叢書 第 19 輯』1992 年)
- 4 岡本亜紀「那覇士族の仕事と漆器—福地家文書 御物城と御仮屋守の日記より—」(浦添市教育委員会文化部『よのつぎ第 3 号』2007 年)
- 5 荒川浩和・徳川義宣『琉球漆工藝』166 頁(日本経済新聞社 1977 年)
- 6 吉田邦夫編「Archæometria」東京大学総合研究博物館、2012
- 7 武藤龍一ら、第 18 回高分子分析討論会要旨集、p79-80、2013
- 8 T. Honda, R. Lu, M. Yamabuki, D. Ando, M. Miyazato, K. Yoshida, T. Miyakoshi,, Investigation of Ryukyu lacquerwarers by pyrolysis gas-chromatography / mass spectrometry, *Journal of Analytical and Applied Pyrolysis*, (2015) in press.

伊是名村伝世の丸櫃の科学分析及び漆芸文化

—伊平屋神女職家に伝世する丸櫃について—

本多貴之¹・伊郷宗一郎²・神谷嘉美³・宮里正子⁴・岡本亜紀⁴・宮腰哲雄¹
(明治大学理工学部¹, 明治大学大学院理工学研究科²
東京都産業技術研究センター³, 浦添市美術館⁴)

はじめに

漆の文化は東アジア・東南アジアを中心として根付いてきた文化であり、その起源は縄文時代初頭まで遡ることが出来る。日本では約 9,000 年前、中国では約 8,000 年前の遺跡での発見例が報告されており、その文化がそれぞれの国々の風土に合わせて発展してきたことは紛れもない事実である。このような背景の中で、琉球における漆文化は複雑な経緯をたどっている。すなわち、原材料や漆芸技術者集団は、中国や日本、東南アジアなどにまたがり幾重にも絡まり合いながら発展してきた様子がうかがえる。

明治大学理工学部の宮腰・本多及び浦添市美術館の宮里・岡本らは、琉球漆芸を科学的に解明することを目的に、夫々専門領域の視点から共通作品を検証している。

琉球漆芸には、王国の公的神女やノロ（祝女）の祭祀具の伝承を伴う円筒形の合子、いわゆる丸櫃が存在する。丸櫃は久米島・君南風の伝承丸櫃は「千代の真首玉容れ」、奄美大島・大和家のオヤノロ伝承丸櫃は「タマザシ・玉座敷」、大島浦上神女の伝承丸櫃は「玉ちぶる」、と呼ばれている。

古来より沖縄では女性には強い霊力（セジ）があり、家族やとりわけ兄弟や夫、恋人などの男性を守る力があると信じられてきた。姉妹はウナイ（オナリ）とよばれ、その強い守護力を信仰する「オナリ神信仰」は沖縄各地に定着していた。オナリ神は、祝女（ノロ）や根神（ネガミ）とよばれ、地域信仰を司る神女としてとして大きな存在であった。そのため、琉球王国第二尚氏第3代尚真王（在位 1477 - 1526）代に、王国の基盤安定を目的に神女組織制度を確立させた。

国家組織として、国王に近い女性を頂点に備え地方の神女をピラミッド状に配して、地方民衆の支配をより盤石なものとした。公的神女たちには、国王からの辞令書で任命され、土地や祭祀具（簪、曲玉、衣裳）などが下賜された。丸櫃は、祭祀具を納めた容器として、祭祀具同様の格式の高い特別な漆器として伝世してきた。沖縄県の伊是名村や久米島町、鹿児島県の奄美市・瀬戸内町などには、現在も祭祀行事とともに継承されている丸櫃も存在する一方で、博物館や美術館などの施設で美術工芸・民俗資料として収蔵され、保存や展示に活用されている例品も相当数確認できる。

丸櫃は、王国内で用いられた確実な漆器として琉球の漆文化を解明していく上での、第一級の基準資料といえる。

本稿では、伊是名村に伝世する丸櫃の化学分析についても併せて報告する。

1. 伊是名村と四殿内

伊是名村は、本島北部に位置し周辺の小島とあわせて5島からなる。王国時代は、伊是名島と北方の伊平屋島及び周辺の小島は、伊平屋が転じた「いひゃじま」や「ゑひや」と呼ばれた。第二尚氏の始祖の地として王府の直轄地となり、特別な扱いを受けた。

昭和14年に伊平屋村と伊是名村に行政区が分かれ今日にいたる。

琉球王国第二尚氏（1492-1879）の初代尚円王は金丸として伊是名島の農民として生まれるが、追われる形で本島に逃れた。その後首里に上り、第一尚氏に仕え出世した。そして、クーデターにより滅んだ第一尚氏の世子として明の冊封を受け代二尚氏を成立させた。伊是名島は、その後400年余続く琉球王国の始祖の地として、王国の正史にも位置づけられ、金丸の臍の緒を埋めた「御臍所」や「逆田」はじめ尚円王の父母の墓とされる「伊是名玉陵」など第二尚氏にまつわる史跡が今も祀られている。

四殿内（ユドゥンチ）は、尚円王すなわち金丸縁の4家系で地元ではミケル、フェーヌタハタ、ニシヌタハタ、アンジャナシと呼ばれてきた。

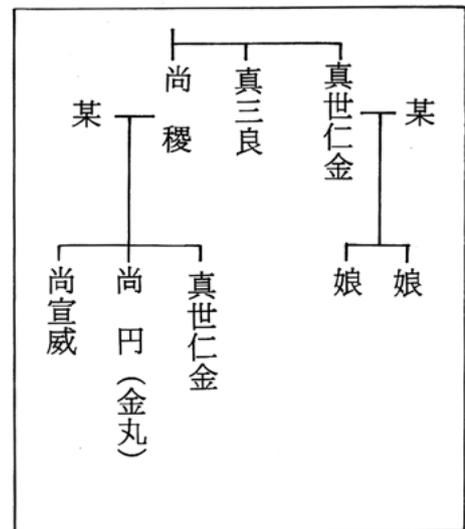


図1 初代尚円王に関わる人物の相関図

金丸の叔父の真三良は、本島銘苺の領主「銘苺大屋子」の地位に就き、帰島後も特別職の「銘苺大屋子（ミケル）」として代々世襲した。叔母の真世仁金には、「二かや田の阿母」の高位の神女職を与え世襲制とした。真世仁金の死後は、その娘二人が神女を継いだ。「南風の二カヤ田の阿母（フェーヌタハタ）」は玉城家が、「北の二カヤ田の阿母（ニシヌタハダ）」は伊禮家に継承され今日に至る。姉の真世仁金には、二カヤ田の阿母より上職の「伊平屋の阿母加那志（アンジャナシー）」職を与えられ、1903年生の19代まで継承された。神女職は母系で継承され、母から娘への継承が基本とされる。

四殿内には、国王から下賜された「御賜御道具類」として、簪、玉がわら（曲玉）、漆器類をはじめ金・銀器染織品などが伊是名村指定文化財（1977年）として登録されている。

2. 伊是名村・四殿内に伝世する丸櫃について

①潤塗山水楼閣人物箔絵丸櫃（内懸子入）（*朱漆山水樹下人物七宝繫箔絵丸櫃）

名嘉家所蔵 伊是名村指定文化財（有形文化財） 16~17世紀

総高：23.1 蓋高：4.8 立上高：1.1 径：25.5 底径 25.5 懸子高：3.2 懸子径：23.5

<来歴>

金丸（後の尚円王）の姉・真世仁金に与えられた「伊平屋の阿母加那志（イヒャヌアンジャナシ）」家である名嘉家に伝世する。雍正4（1726）に編さんされた『伊平屋島旧記』櫃は、祭祀具の簪や「玉かわら」を納めた容器と考えられる。「玉かわら」と呼ばれた「曲玉」3連を伴う。

現在、名嘉家では正月飾りとして、丸櫃の蓋を開けて懸子に「曲玉」を置き、「御玉貫」や「銀製盃台・流し台」、「花米」等とともに配置して供えている。

<形態>

円筒形の印籠蓋造りで懸子を伴う。身は曲物造り。蓋甲・合口・底周辺に玉縁を廻らし上から金箔を押す。

<下地・塗り・文様>

肌色味の地の粉下地に、撚りの無くなった粗織の麻の布着せがある。

外面は、朱漆に箔粉を蒔いた箔粉梨地（琉球梨地）である。懸子内側だけ朱漆塗りで、内面と身裏、懸子側面・裏は潤みがかかった朱漆塗りである。

文様は全て箔絵で表し箔下は透漆を用いる。顔や衣裳に黒漆でアクセントを入れる。

蓋甲は磨耗が激しく文様が殆ど残っていないが、二重界線で稜花形に設けた窓枠内に山水人物らしき図が、枠外に七宝繫文が確認できる。身は、太細の二重界線で四稜形の窓枠を4カ所設け、枠内に山水樹下人物図を、枠外を七宝繫文で表す。蓋鬘から身側面にかけて文様は繋がるように描かれている。柳葉の細かいタッチや岩や山々の暈し表現、斜格子に深く重なった丸文の花入り七宝繫ぎの箔絵技法は、初期琉球箔絵の特色かと考える。朱漆の上に黒ずんだ透漆を塗り重ね、箔粉を置き、さらに黒ずんだ透漆を塗ったため潤色を呈したとの考えもある。

②黒漆鳥花紋点斜格子沈金丸櫃（*緑漆花鳥点斜格子沈金丸櫃）

玉城家所蔵 伊是名村指定文化財（有形文化財）16世紀～17世紀

総高：17.1 蓋高：3.6 甲盛高 0.8 立上高：1.0 径：18.0 底径 18.0 懸子高：2.9 懸子径：17.0

<来歴>

「南風のニカヤ田の阿母（フェースタハタ）」を継承した玉城家に伝世する丸櫃である。

「簪」と「曲玉」1連を伴っており、玉城家では元日、旧暦8月10日に蓋を開けた丸櫃の懸子に「かわら玉」を載せ供えている。

<形態>

円筒形の印籠蓋造りやや甲盛りがある。懸子を伴う。身は曲物造りで、蓋甲と底部、懸子は板材。蓋甲、合口、底周辺に玉縁を廻らし上から金箔を押す。緒金具は銅製円形の座金が1個だけ残る。

<下地・塗り・文様>

灰色と肌色の下地に、粗い織目の撚りの無くなった麻の布着せがある。表面は漆の縮みによる、細かな亀裂の損傷が甚だしく、顔料を混入し緑漆である可能性が高い。蓋裏、身の内側、懸子は黒味がかかった朱漆で、蓋裏と懸子は剥落が多い。

文様は全て沈金で表す。深い撥ねのない丸みのある沈金の刀技である。蓋表は縁周辺は、二重廻線を廻らし中に縦横線を配する。蓋蔓は上下に二重廻線を廻らし、内側に素朴で大らかな刀技で花唐草文を配する。身は二重廻線で四稜花形窓枠を3カ所設け、中に花木や鳥らしき姿があるが、損傷がひどく種類の特定は困難である。枠外は点斜格子で埋める。身上部は二重廻線を、下部には二重廻線と縦横線文を廻らす。蓋甲・合口・底周辺に玉縁を廻らし上から金箔を押す。

蓋蔓に窓枠はなく、身側面に窓枠があることから、17世紀以降の窓枠を配する様式が主流となる過度期の漆器と考える。

③黒漆山水人物箔絵丸櫃（内懸子入）

伊禮家所蔵 伊是名村指定文化財（有形文化財）16～17世紀

総高：18.9 蓋高：3.6 甲盛高 1.3 立上高：1.0 径：20.5 底径 19.8 懸子高：2.9 懸子径：18.8

伊禮家の丸櫃について

<来歴>

「北のニカヤ田の阿母（ニシヌタハタ）」を継承した伊禮家に伝世する丸櫃である。

「簪」と「曲玉」1連を伴っており、伊禮家では元日、旧暦8月10日に蓋を開けた丸櫃の懸子に「かわら玉」を載せ供えている。

<形態>

円筒形の印籠蓋造りやや甲盛りがある。懸子を伴う。身は曲物造りで、蓋甲と底部、懸子は板材。蓋甲と底周辺に二重玉縁、合口に玉縁を廻らす。

<下地・塗り・文様>

撚りの無くなった粗い織目の殆どない麻の上から、さらに蓋や底周辺に重ねて粗い織目布を着せる。下地に胡粉様の白い粉がある。表側は黒漆で、内側は暗い朱漆。懸子は内が朱漆、底裏と側面は黒漆。

文様は、全て箔絵で表す。蓋表は、磨耗が著しく文様の確認ができない。蓋蔓は鶴を3カ所に配し、その間に雲を配した「雲鶴文様」の日本的な趣があり、箔下には赤色が認められる。身は天地に1本廻線を廻らせ、3カ所に二重界線で四稜花形の窓枠を設ける。窓枠内の文様は、手前に唐子や女性など動きのある人物図が、中央に島と湖の「山水人物図」を描く。衣裳の箔下には緑漆が認められる。枠外は2枝の椿樹を描く。箔絵を面ではなく、線描きで表現されておりあまり例のない箔絵技法である。丸櫃は朱漆に箔絵や沈金の例が多く、黒漆や緑漆には沈金が用いられている。本品のように黒漆に箔絵の例は類例がなく、さらに箔絵は面ではなく線で表現している点が沈金を意識した表現とも捉えられる。

*丸櫃の技法や文様など美術工芸的視点は、1991年12月19日に徳川義宣氏の調査に同道した際のメモ及び徳川氏からのご教示を基に、平成22年10月14日に実施した『沖縄のガラス・玉等製品関係資料調査』（沖縄県教育委員会）の調査、平成24年明治大学理工学部宮腰研究室の試料採取に同道の際の熟覧からの考察を加えた。

3. 分析試料について

四殿内は沖縄県伊是名島における名家であり、同島諸見村出身の金丸（1415~1476年）が琉球王国後期の第二尚氏王統の初代尚（しょう）円（えん）王に即位した際（1470年）、特別な地位を与えられた親族の4つの家系である。今回は、尚円王より名嘉家・玉城家・伊禮家に贈られた丸櫃より採取した微量片を分析に供した（図2）。



図2 分析に供した3つの丸櫃（カラー写真は巻頭カラーを参照）

4. 分析に用いた分析手法について

<クロスセクション分析>

分析試料をエポキシ樹脂に包埋し、研磨紙を用いて数 μm の厚さまで薄く研磨する。薄く研磨した試料は顕微鏡を用いて反射光および透過光を用いて観察を行い、主に層の数と各層の成分について外観から推察を行う。また、光源に紫外光を利用すると特定の波長に対する蛍光や吸光を観測することが可能になる。

<EDX分析>（蛍光X線分析法）

X線を試料にあてると、試料中の電子が励起（高いエネルギー状態になること）し、これらの電子が元の位置に戻る際に余ったエネルギーによる蛍光を発生させる。この蛍光のエネルギーが元素ごとに異なるため、試料にどのような元素が含まれているのかを分析することが可能である。重元素（金属元素等）に対して特に高精度・高感度で分析できるため広く用いられている。

この分析はクロスセクションを行った試料に対しても行う事が可能であり、各層における金属元素の分布を識別することが可能である。

<ATR-FT/IR分析>（全反射-赤外分光法）

様々な分子を構成する化学結合は常に伸縮や振動を繰り返しており、それぞれの反復運動が特有の周波数を持っている。この周波数を測定することで、どのような結合があるのかを判断するのが赤外分光法（FT/IR）である。このFT/IRに反射を組み合わせた測定方法であり、クロスセクション試料に対して顕微鏡範囲（2 μm 四方～100 μm 四方）で測定を行う事が可能である。この測定を用いると、断面から見たごく一部のIRスペクトルを測定することが可能であり、ある程度の構造類推を行う事が可能になる。

<Py-GC/MS分析>（熱分解-ガスクロマトグラフィー質量分析法）

種々の塗装や下地についてヘリウム気流下で加熱を行い、熱により成分を分解することで制作に利用された有機物の分析を行う。漆を対象にする場合には500 $^{\circ}\text{C}$ で熱分解を行うが、漆以外の材料

であっても過去にデータベース化した物であれば、その材料の分析が可能である。

< TMAH/Py-GC/MS > (反応熱分解-ガスクロマトグラフィー質量分析法)

Py-GC/MS の分析では、感度が減少しやすい分析の際に TMAH (水酸化テトラメチルアンモニウム) を添加し分析することで、その感度を 10 倍程度上昇させることが出来る分析方法。この分析方法でより分析しやすくなる成分としにくくなる成分があるため、Py-GC/MS と併用することで、よりの確な分析を行うことが可能である。

5. 結果と考察

5.1. クロスセクション分析・EDX 分析

断面分析の結果から、今回分析に供した試料は 3 点とも異なる層構造を有していることがはっきりと分かる (図 3)。また、EDX 分析の結果 (図 4, 5) から、以下の様な事が見て取れる。

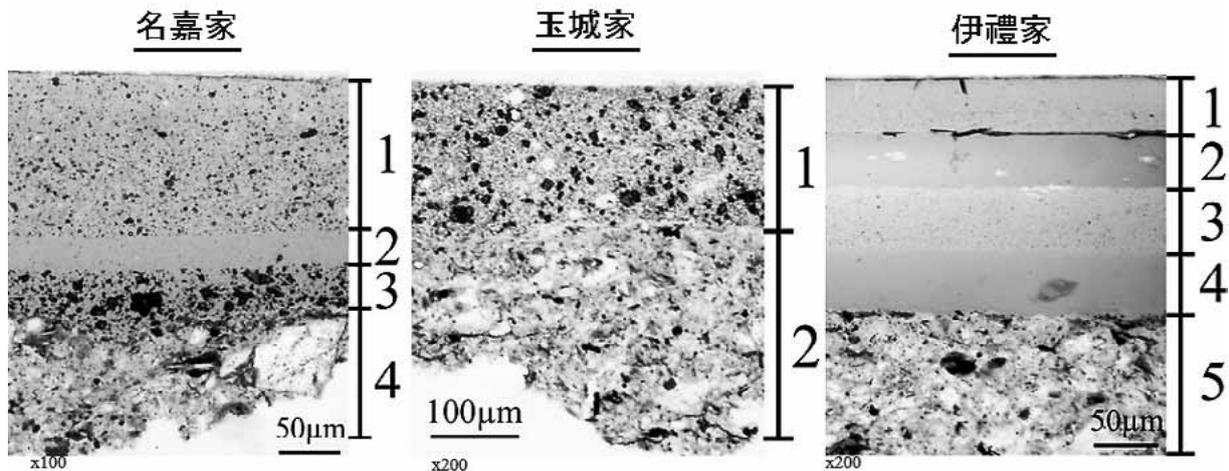


図 3 分析試料のクロスセクション画像 (カラー写真は巻頭カラーを参照)

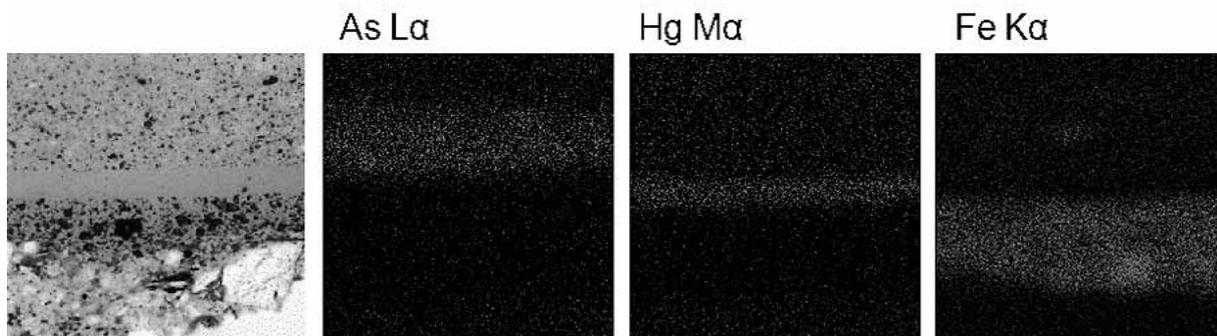


図 4 名嘉家の試料の EDX 分析結果 (カラー写真は巻頭カラーを参照)

まず、名嘉家は下地を入れて 4 層構造であり、上から 3 層目までが褐色の漆層、最下層は鉄が多く検出される下地であった。さらに、1 層目はヒ素 (As) が、3 層目には水銀 (Hg) が多く含まれていた (図 4)。このことは 1 層目が雄黄に代表される黄色漆、3 層目が水銀朱に代表される赤色漆

を利用する意図があったことを示している。これは水銀朱の色よりもより明るめの色に仕上げたいという意図を作者が持っていたためだと考えることが出来る。

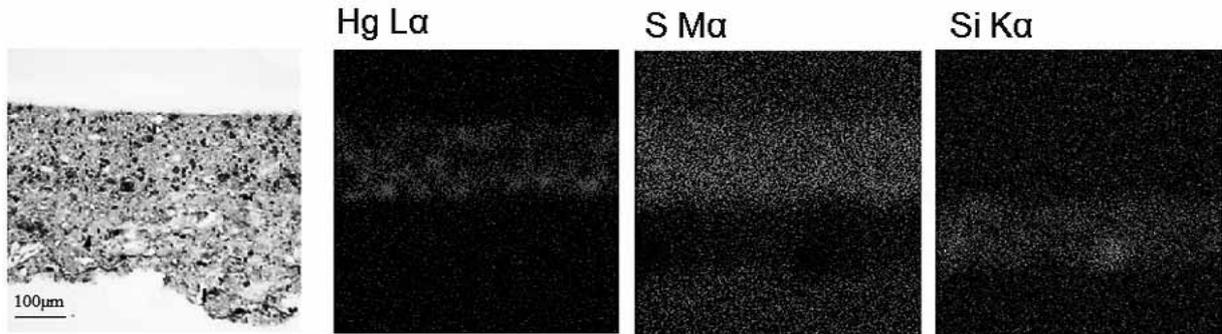


図5 玉城家の試料のEDX分析結果（カラー写真は巻頭カラーを参照）

次の玉城家の試料は2層構造であり、上層は白地に赤のまだら模様が確認できる。この部分からはEDXにより水銀と硫黄の存在が確認された。下層からはケイ素が確認でき、下地には砥の粉などの鉱石由来のものが利用された可能性が高く、名嘉家とは異なり鉄は検出されなかった。その一方で漆に由来する褐色の層は確認できないことから、漆単独の塗りは存在していないことが明らかになった。

伊禮家の試料は下地部分以外に特異な金属元素は見られず、漆の4層重ね塗りと下地層の全5層構造である事が分かった。また、最上層と2つめの層の間には黒い炭の層が見えることから、掃墨などを施してより黒味を出す技法を用いていたことも明らかとなった。下地部分に関しては鉄、カルシウム、ケイ素などが確認された。これらの元素構成は他の漆器と同様であるため、下地部分については名嘉家と似たものが利用されたことがうかがい知れる。

5.2. ATR-FT/IR 分析

クロスセクション試料の塗膜層に対してATR-FT/IR分析を行った(図6)。比較試料として、日本・中国で“漆”と呼ばれる“*Toxicodendron vernicifluum*”の樹液を塗膜としたものを利用した。

測定の結果から、いずれの層からも漆が検出された。3つの試料の間で顕著に違いが生じた部分は 1710 cm^{-1} の部分であるが、この部分は劣化にともない増加傾向になるカルボニル基(C=O結合)であることが知られており、名嘉家の試料が他の2つよりも劣化が進行していたことを示しているものと思われる。

また、カルボニル基が形成される際に減少する 1450 cm^{-1} , $2925\sim 2855\text{ cm}^{-1}$ の部分も同じ傾向を示していることから、これらの試料に用いられている成分は劣化の程度は異なるもののほぼ同じ成分から構成されていることが推察できる。

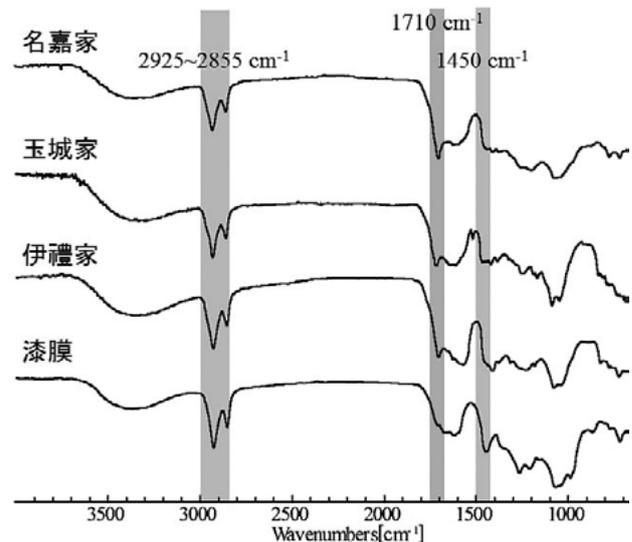


図6 3つの試料のATR-FT/IR測定結果

5.3. Py-GC/MS 分析・THM-GC/MS 分析

まず初めに、東アジア各地で利用されている漆種の樹液について Py-GC/MS の測定結果の比較を行った。漆の識別において、Py-GC/MS では m/z 108 および m/z 91 を利用することが多いので、これらのイオンクロマトグラムを図 7 に示した。

上段が日本や中国に生育している “*Toxicodendron vernicifluum*”、中段がベトナムや台湾に生育している “*Toxicodendron succedaneum*”、下段がタイやミャンマーに生育している “*Gluta ushitata*” のスペクトルである。 m/z 108 において 20 分以降に日本・中国の試料は P 15 のみが検出されるのに対して、ベトナムや台湾は P17 が、タイやミャンマーは P'1 と P'2 が検出されることが見て分かる。また、 m/z 91 においては日本や中国、ベトナムや台湾の試料は右下がりなのにに対して、タイやミャンマーは右上がりである点が大きな特徴である。

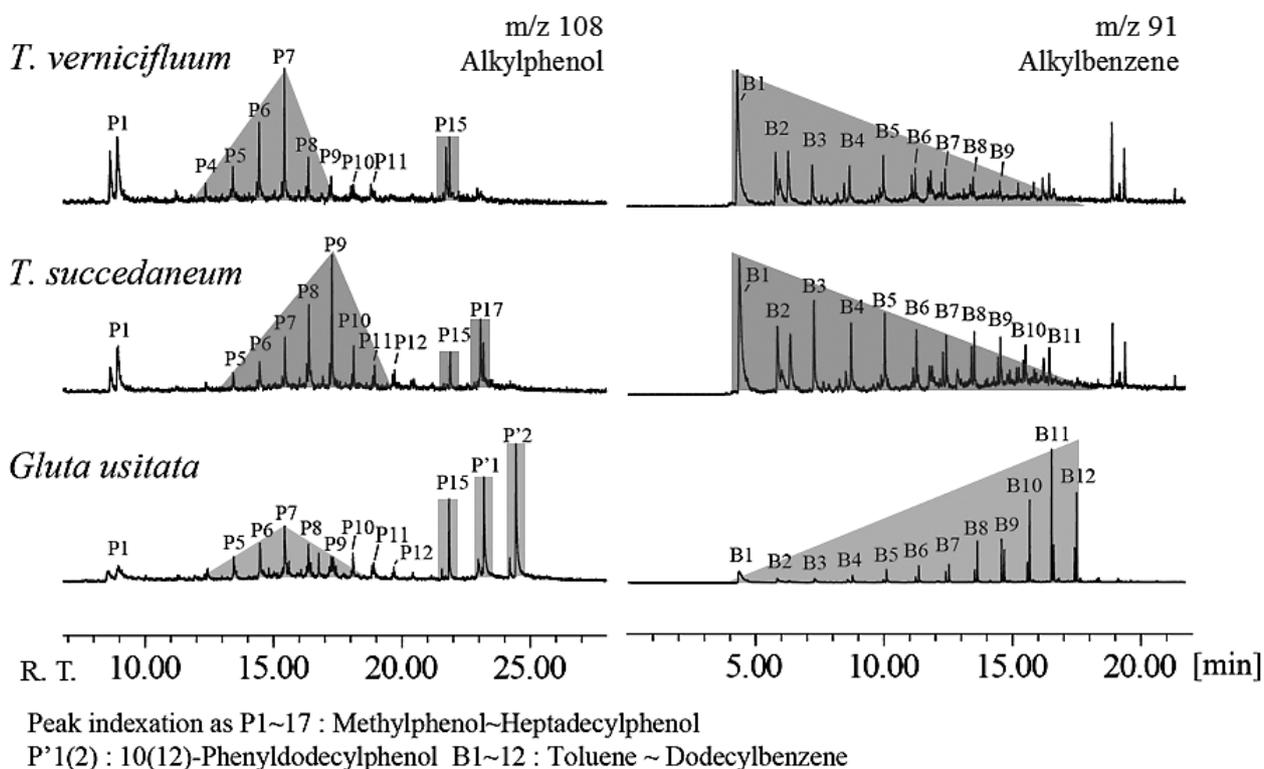


図 7 標準的な漆膜試料の Py-GC/MS 測定結果

これらの結果を元に今回は試料量の少ない伊禮家を除いた 2 つの分析試料について検討をおこなった。分析結果を図 8 に示す。これらの結果から、タイやミャンマーに生育している “*Gluta ushitata*” 以外の樹種である事は確認できたが、劣化が進んでいるためか P15 と P17 のピークは確認できなかった。この様な結果は、これまでの分析事例からもよく知られている現象であるため、これを補うために THM-GC/MS を用いた分析を行った。

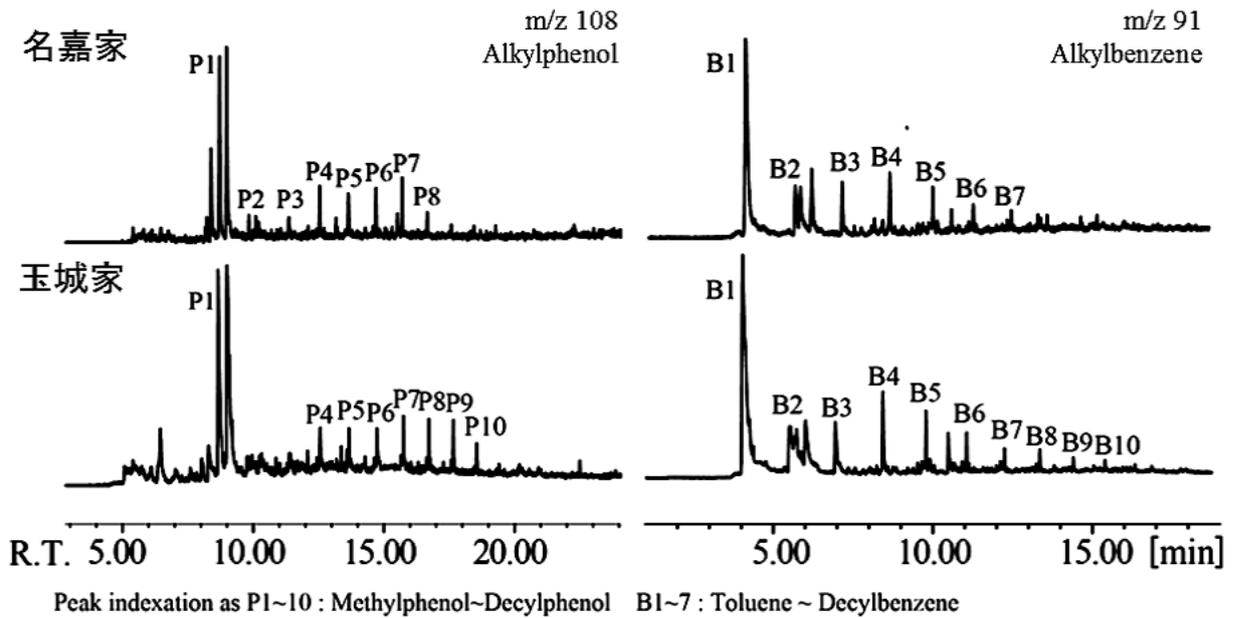


図 8 今回の試料の Py-GC/MS 測定結果 (左 : m/z 108, 右 : m/z 91)

玉城家の試料の THM-GC/MS 測定結果を図 9 に示す。分析結果から、P17 と同じ成分由来の成分が検出された。この結果から玉城家試料はベトナムや台湾に生育している “*Toxicodendron succedaneum*” が用いられていることがわかった。また、名嘉家からも同様の成分が検出されており、いずれの櫃にも “*Toxicodendron succedaneum*” の使用が認められた。一般に “*Toxicodendron succedaneum*” の漆膜は色味が薄いため、顔料を添加するとより顔料の色がはっきりとした漆膜になる。このような特徴を利用し、より色の映える櫃を作っていたということが、本結果から見て取ることが出来た。

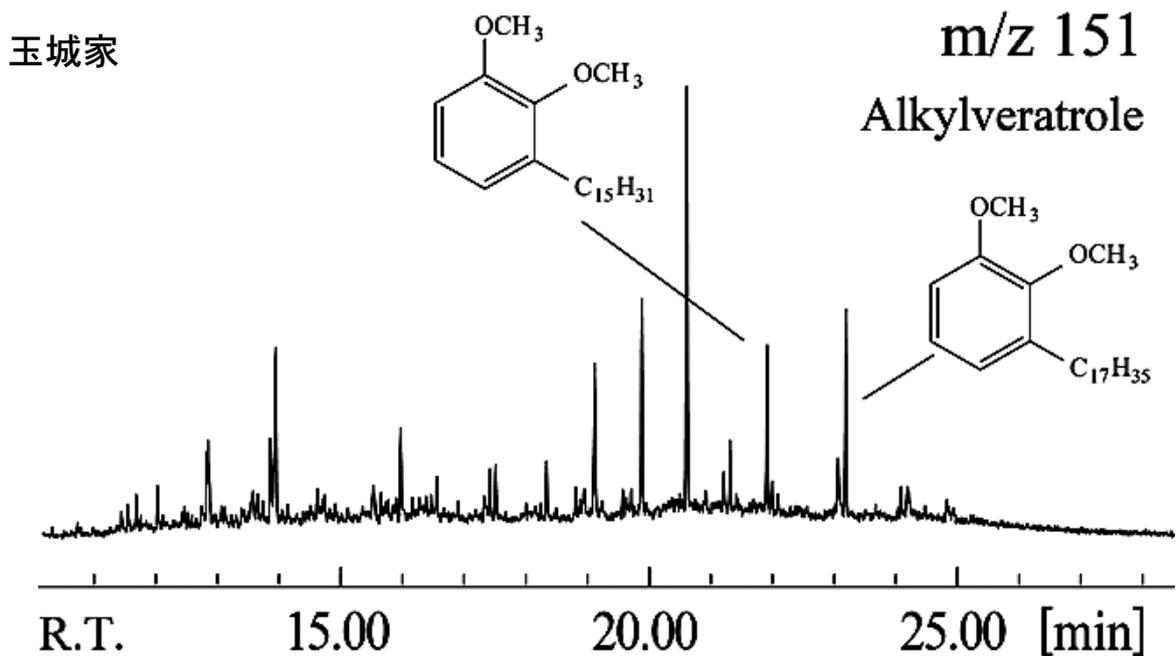


図 9 玉城家試料の THM-GC/MS 測定結果

6. まとめ

今回の分析結果から、あらためて琉球王国の作っていた漆器類に用いられた技術の奥深さが垣間見える結果となった。当時、琉球王国に輸入されていたと思われる漆の特性を理解し、日本・中国の漆よりも色の薄いベトナム・台湾の漆を利用することで、よりコントラストの強い彩漆作成に活用していたことがよく分かった。

謝辞

名嘉家、玉城家、伊禮家には貴重な祭祀具の調査にご理解とご協力いただき心より感謝申し上げます。また、伊是名村教育委員会には特段のご配慮のもと、各家々と仲介の労をとっていただいた職員の方々に感謝申し上げます。

なお、本研究は JSPS 科研費 25282076, 26282070 の助成を受けたものです。

【主な参考文献】

- ・ 徳川義宣「伊是名島傳存の丸櫃について」『金鯪叢書』第十九輯 1992 年（財）徳川黎明會
- ・ 『伊是名村史』（上・中・下）平成 1 年・伊是名村
- ・ 『伊是名村銘刈家の旧蔵品および史料の解説書－公事清明祭をめぐる公文書とご拝領の品々－』平成 19 年 1 月伊是名村教育委員会
- ・ 『伊是名村名嘉家の旧蔵品の解説書－伊平屋の阿母加那志の衣装・書道具』平成 22 年 3 月伊是名村教育委員会
- ・ 上江州均「久米のきみはゑ」特別展図録『久米のきみはゑ五百年～祭祀用具にみる神女の世界』2001 年久米島自然文化センター
- ・ 『沖縄のガラス・玉等製品関係資料調査報告書』2011 年 3 月沖縄県教育委員会
- ・ 仲田栄二, 高良倉吉 他「伊是名村史 上巻（島のあゆみ）」伊是名村史編集委員会（1989）
- ・ 高良倉吉 他「伊是名村銘刈家の旧蔵品および史料の解説書」伊是名村教育委員会（2007）

浦添市美術館所蔵漆器にみる漆器図様への画譜利用について

當 山 綾 乃
(浦添市美術館)

1 はじめに

中国明代以降、画譜の出版が隆盛を極めた。時を待たずして日本にももたらされ、手本として大いに活用された¹。また絵画だけでなく、磁器などの工芸品にも利用された²。こうした画譜の利用は中国や日本にとどまらず、琉球でも行われてきた³。

琉球漆器では、美ら島財団所蔵《黒漆山水樓閣人物螺鈿硯屏》⁴に画譜同様の図及び唐詩が表されている⁵ほか、『芥子園画伝』から採った画題を文様とした硯屏（浦添市美術館所蔵《黒漆ビードロ入り山水樓閣螺鈿硯屏》）（図16）の存在が知られている。

筆者は、浦添市美術館所蔵漆器の中に、画譜との関連が確認できる作例がほかにもあるのではないかと考え、改めて照らし合わせた。その結果、上記作例以外にも、以前より把握していた作例⁶を含め5点の作例に画譜との関連性が浮かび上がってきた。

そこで本稿では、その5点及び《黒漆ビードロ入り山水樓閣螺鈿硯屏》、合わせて6点の作例と画譜とを比較検討し、漆器図様へどのように画譜が利用されているのか若干の考察を試みたい。

2 画譜とその利用

画譜とは、絵画を類集した冊子、また、画論などをのせたもののことである⁷。ここでは、本論に入る前に画譜とその利用について、ごくわずかではあるが概説したい。

木版印刷が発明された地である中国では、明代になると版画が急速な発展と展開を遂げた。なかでも画譜についていえば、古い時代では南宋刊行とされる『梅花喜神譜』が知られており、後の明代万暦年間（1573-1620）から清代康熙年間（1662-1722）にかけて名品が続々と刊行された⁸。その主たるものとして、中国歴代絵画の集大成を目指した『顧氏画譜』（別名歴代名公画譜）、画学書としての内容を備える『図絵宗彝』、『梅竹蘭菊譜』・『草本花詩譜』・『木本花鳥譜』・『古今画譜』・『名公扇譜』・『唐詩五言画譜』『唐詩七言画譜』『唐詩六言画譜』を合わせた『八種（集雅齋）画譜』、多色重ね刷りや空刷りによる挿絵を収めた『十竹斎書画譜』、山水画論と諸モチーフの描写法を図解しベストセラーとなった『芥子園画伝』などが挙げられる^{8,9}。特に『芥子園画伝』は人気を博し、重版が繰り返し行われた¹⁰。

明清代に刊行された画譜類は、日本にも入り翻刻、重刻され、近世日本絵画に大きな影響を及ぼした¹。また、中国画譜の翻刻だけでなく、和製画譜も作られるようになった。さらに工芸品においては、肥前磁器に『八種画譜』のうち『唐詩五言画譜』を手本とした作例があることが知られている²。

3 作例と画譜との比較

浦添市美術館所蔵の琉球漆器《黒漆ビードロ入り山水樓閣螺鈿硯屏》に『芥子園画伝』の図が用いられていることは、同館出版物¹¹及び常設展示の解説キャプション等にてかねてより紹介されている。筆者が改めてその他同館所蔵の琉球漆器を確認したところ、《黒漆蘭亭図螺鈿文庫》《黒漆花鳥螺鈿漆絵箔絵棚》《朱漆樓閣人物螺鈿硯箱》《朱漆鳥人物箔絵皿》の4点、また琉球漆器ではないが中国清代の漆器《朱漆山水人物密陀絵軸盆》に画譜を利用した図様が確認できた。そのため前述5点及び《黒漆ビードロ入り山水樓閣螺鈿硯屏》、計6点について、作例と画譜とを比較し、その関連性について検証したい。なお、作品情報は同館台帳を参考にし、名称（収蔵番号）、製作地、製作年代、法量の順で記す。

(1) 《黒漆蘭亭図螺鈿文庫》(漆 37) 琉球 17～18世紀 高 10.7cm×縦 38.9cm×横 31.2cm

合口造りの箱。総体黒漆塗りに螺鈿技法で文様を施す。蓋表には界線を設け、その内側に曲水の宴を楽しむ高士らを表し、外側は菱七宝繫で埋める。身側面は窓枠を設け書画や山行を楽しむ高士を描き、枠外を編地文で埋める。そして蓋裏には竹と二羽の鳥を表す。

本作例蓋裏の図様(図2)と類似する図(図3)が『図絵宗彝』¹²の中にある。竹の枝葉や鳥の位置、向きなどほぼそのまま写している。ただ本作例は空間に余裕があるためか、『図絵宗彝』に描かれていない竹の枝先や竹の生える地面まで加えている。また、鳥については羽や尾、頭部は一枚の貝に毛彫りで細部を表現し、背や側面は細く加工した貝片を並べて鳥毛の雰囲気を出し、その他部分を七宝繫ぎで埋め華やかさを出すなど、工夫がなされている。

(2) 《朱漆鳥人物箔絵皿》(漆 291) 琉球 18～19世紀 高 2.4cm×径 16cm

低い高台を持つ皿。表面は朱漆塗りに箔絵技法で文様を施す。裏面高台内側は黒漆、高台外側から縁にかけて緑色系の漆を施す。文様は縁内側には花唐草文を配す。見込みには二重界線で枠付けし、その内側に鳥人物図を配す。鳥人物図は、水辺に生える樹木のふもとで腰を下ろし佇む高士と供を中心とし、高士の視線の先には飛び立つ鳥が三羽と上方を見上げて立つ一羽を表す。

本作例見込みの図様(図4)と類似する図が『八種画譜』のうち『唐詩六言画譜』¹³(図5)にある。対比してみると、高士と供の構図はほぼ共通する。高士を見守る供の視線や鳥を追う高士の視線も同様に表している。ただ『唐詩六言画譜』では高士の着物が無地であるのに対し、本作例には柄がある(図6、7)。また供の携える布包に『唐詩六言画譜』では柄があるのに対し、本作例は無地であるといった点が異なる。

『唐詩六言画譜』図中の鳥は、図に添えられる唐詩が張謂の「白鷺」であることから¹⁴、白鷺であろう。人物右上方、空に舞う三羽の白鷺は、図と同様本作例にも描かれるが、その位置は画面の大きさの都合上か距離を縮めて表している。また、人物右下方の水辺で佇む白鷺は、図が四羽であるのに対し、本作品では一羽のみである。

加えて本作例と『唐詩六言画譜』は、ともに人物左側に異なる種類の大小の樹木を配す。ただ、本作例では大きい方の樹木の左側枝は同様に表すが、右側上方については枝を伸縮させ作品形状に沿うかたちで収める。『唐詩六言画譜』に見られる遠景の山々は、画面の大きさの都合上か、本作例では省いている。

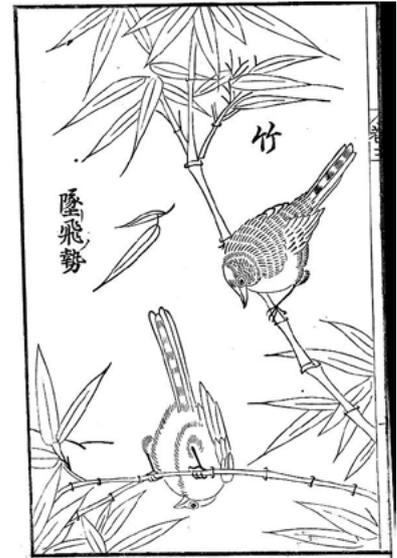
以上のところから、本作例は『唐詩六言画譜』の人物周辺と白鷺を一部写し、遠景や水面、岩といっ



(図1)
《黒漆蘭亭図螺鈿文庫》
浦添市美術館蔵



(図2) 《黒漆蘭亭図螺鈿文庫》蓋裏



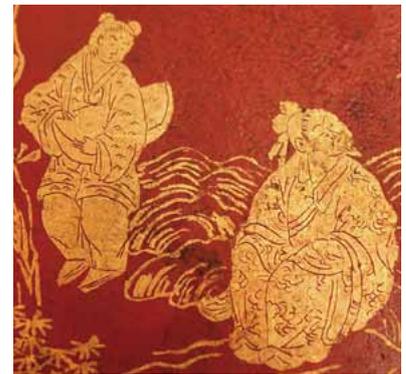
(図3) 『図絵宗彝』
東京藝術大学附属図書館蔵



(図4) 《朱漆鳥人物箔絵皿》
浦添市美術館蔵



(図5) 『唐詩六言画譜』
東京藝術大学附属図書館蔵



(図6) 人物部分拡大



(図7) 人物部分拡大

た部分を省き、着衣など人物を詳細に表した図であることが分かる。

(3) 《朱漆楼閣人物螺鈿硯箱》(漆 200) 琉球 18～19世紀 高8cm×縦27cm×横27cm

印籠蓋造り、花剝された足を持つ硯箱。底裏黒漆塗りにその他は朱漆塗、螺鈿技法で文様を施す。蓋側面と身側面には団扇・瓢箪・宝巻などの八吉祥文を配す。蓋表は二重界線で枠付けし、その内側に楼閣人物図を表す。その楼閣人物図は、屋外を眺めて佇む女性らを表す。

本作例蓋表の図様（図 8）と類似する図が前項と同様『唐詩六言画譜』（図 9）にある。画譜中図に添えられる唐詩は柳宗元の「遣懷」である。『唐詩六言画譜』には楼閣の欄にもたれ木枝に止まる鳥を眺める女性と、その横で控える女性らを表す。詩と照らし合わせると¹⁴、鶯が鳴き蝶が舞う春の情景の中で佇む様子が読み取れる。

さて、本作例と『唐詩六言画譜』を比較すると、本作例は『唐詩六言画譜』の建物や人物、木枝の部分を全体に反転させ、塀を省いた構図であることに気づく。人物の配置だけでなく、建物から横に伸びる花枝と柳、欄の構図が同様であり、屋根や戸、帳のような布などにも類似性が見いだせる。

また本作例では女性の着衣の図柄が『唐詩六言画譜』より細かになり、頭部も髪分け目や髪飾りまで細やかに表している¹⁵異なるのは、本作例では鶯を省いており、左下方では蝶を蜂に置き換え草花とともに大きく配している点と、欄にもたれる女性の視線が鶯ではなく左下方草虫に向かっている点、左上部に月もしくは太陽、雲が加わった点である。

以上のことから、本作例は『唐詩六言画譜』のおおまかな構図を反転させ用いた図であることが分かる。さらにモチーフを加除筆したことで、鶯を眺めるさまから草虫を眺めるさまに主題が変化していることが見てとれる。

(4) 《黒漆花鳥螺鈿漆絵箔絵棚》（漆 69）

琉球 18～19 世紀 高 50.1cm×縦 29cm×横 32.5cm

網代の付いた観音開きの扉を持つ細い足の棚。総体黒漆塗りに螺鈿・漆絵・箔絵で文様を施す。天板には蘭、側面には梅樹、地板には椿と鳥が表わされる。

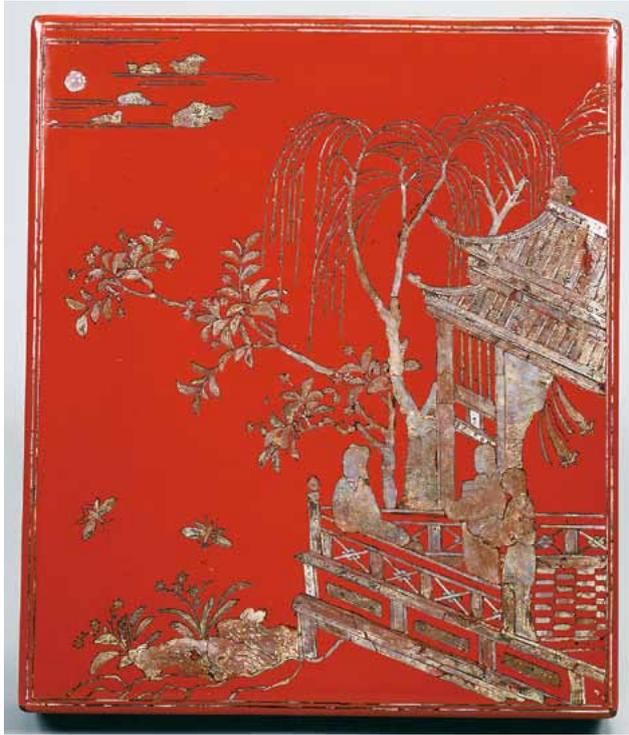
本作例地板の図様（図 11）と類似する図が『古今畫藪 後篇 二』¹⁶（図 12）にある。本作例を反転させると同じ構図となる。葉や花の細部は多少異なるが、椿の細枝に止まり斜め上を見上げる鳥の様子や枝の角度などは同様である。また図にはない蜂 2 匹を加えており、その内一匹は鳥の視線の先に配す。このことから、本作例は図を反転させ蜂を加えた図であることが分かる。

なお、ここで特筆すべきは『古今畫藪 後篇 二』が日本で作られた画譜であるということである。日本の画譜が利用されている点からは、琉球で日本の画譜を利用したことも考えられるが、本作例が日本で製作されたものである可能性も否定できない。また、『古今畫藪 後篇 二』の作者・宋紫石が南蘋派であることから、さらに基となる中国の画譜等が存在するという点も考えられる。この点については今後さらなる検討が必要である。

(5) 《朱漆山水人物密陀絵軸盆》（漆 506） 中国 清時代

長方形、立ち上がりに反りが入った軸盆。底裏のみ黒漆とし、その他朱漆塗りに見込みと立ち上がりに密陀絵と箔絵で文様を表す。立ち上がりには窓枠を設け、枠内に水仙や椿の花枝を表し、枠外は七宝繫文で埋める。見込みは、馬から下り水辺に生える柳の下で腰を下ろして休む高士と、その傍らで馬とともに待つ供を表す。

本作例見込みの図様（図 13）と類似する図が『唐詩五言画譜』（図 14）にある。本作例は『唐詩五言画譜』下方に描かれた人物を中心に縦長の画面に合わせ高士と供の距離を縮めて表している。人物や馬、柳や岩はある程度忠実に写している。人物の着衣や馬の大滑に関しては『唐詩五言画譜』が無文であるのに対し、本作例は細密に文様を描いている（図 15）。また『唐詩五言画譜』では高士の胸部は斜格子文だが、本作例では青海波文（図 15）となるなど違いも見られる。さらに『唐詩五言画譜』では馬の手綱を左手に携えているが、本作品では右手に携えている点や人物の背後に樹



(图8) 《朱漆楼閣人物螺鈿硯箱》
浦添市美術館蔵



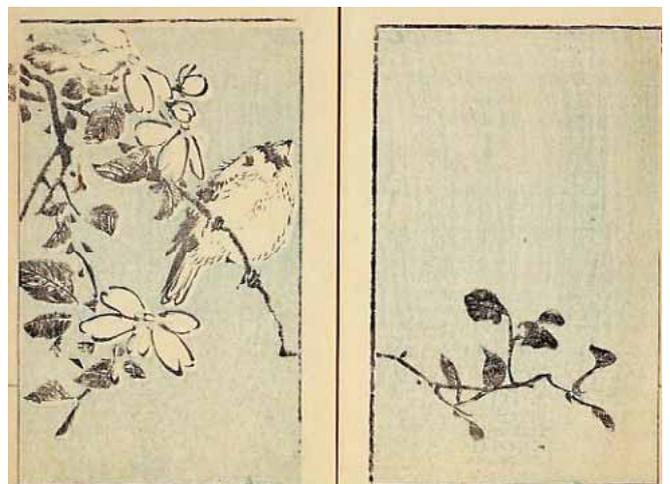
(图9) 『唐詩六言画譜』
東京藝術大学附属図書館蔵



(图10)
《黒漆花鳥螺鈿漆絵箔絵棚》
浦添市美術館蔵



(图11) 《黒漆花鳥螺鈿漆絵箔絵棚》地板部分



(图12) 『古今畫藪 後篇 二』
東京藝術大学附属図書館蔵

木が加えられているなどの相違も見られる。そして画面上方、柳付近に二羽の鳥が加えられている点が際立った相違である。

以上のことから、本作例は『唐詩五言画譜』図中の人物を中心に器物の形状に合わせて配置し、二羽の鳥を加え、着衣などの細部を詳細に表した図であることが分かる。

(6) 《黒漆ビードロ入り山水樓閣螺鈿硯屏》(漆 506) 琉球 18～19世紀

方形の硯屏。数色のガラス棒や板ガラスを嵌め、板ガラスには緞子が貼るなど他に例を見ない特徴を持つ漆器である。支柱飾の縁や脚部縁など一部朱漆塗りだが、その他は黒漆塗りに螺鈿で文様を施す。

本作例の画題が『芥子園画伝』¹⁷によるものであることは以前から知られている。表面板ガラスの周囲には山水樓閣図を配す。外枠や飾板はそれぞれ窓枠を設け、枠内には『芥子園画伝』から採った図を表し、枠外は菱七宝繫文で埋め尽くす¹⁸。

『芥子園画伝』は、琉球の王家である尚家の蔵書の中にもあり、それについては、現在は那覇市歴史博物館が所蔵している。今回はその那覇市歴史博物館所蔵本『芥子園画伝』と本作例(図16)を比較した。まずガラス板周辺の山水樓閣図は、『芥子園画伝』五巻に掲載される米友仁の法で描いた図(図17)をもとに表す。ただし図は円形の枠内に描いているが、作例画面は横長である。そのため図の山々や樓閣を作品画面右側に配し、画面中央から左側にかけては遠景の山々、水面と船、近景の岩や樹木を加えている。文字は、そのまま作例画面に用いるが、落款部分は異なる。

次に外枠右上(図18)は、同じく五巻の李公麟の図¹⁸をもとに表す。円形の枠内に描いた図を横長の画面に納めるため、図下方の斜めに走る橋と岩々のみ用いている。そのため図の主となるモチーフの樓閣は省くこととなり、図には無い松を中央に大きく配す。

また外枠右側(図21)には文字と樹木を配す。これは『芥子園画伝』二巻諸家雜樹法のうち盛子昭と劉松年の雜樹の画法¹⁸から採ったものである。いずれも文字は一致するが、樹木については、『芥子園画伝』では数本の樹木が描かれているのに対し、作例では一～二本しか表されていない。文字が無ければ分からないほどに木の形状も一致し難い。同様に外枠左側も文字と樹木が配される。これも二巻諸家雜樹法のうち雲林の樹法¹⁸から採ったものである。文字は一致するが樹木は数本に省かれ形状もさほど類似するわけではない。

裏面板ガラス周辺に描かれた樹木(図19)は、畫小竹法、畫蓄蒂法の項(図20)から樹を採っている。文字は省かれているが、竹や藪の枝葉に関しては、表面及び裏面外枠部分より画譜の雰囲気に近いものがある。

裏面外枠左右(図21)にはそれぞれ文字と樹木が配される。右側は刑浩、左側は郭熙の雜樹の画法から採ったものであるが、これも図では樹木が数本描かれるが作品画面では一～二本のみ表し、形状もさほど類似するわけではない。

このことから、本作例は文字内容に関しては『芥子園画伝』からそのまま写しているが、図は雰囲気だけ残し、配置する空間に合わせてかなりアレンジされていることが分かる。

4 比較から見えてきたこと

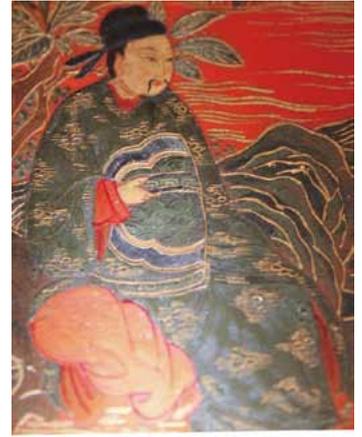
以上、6作例について画譜との比較を行ったところ、やはり両者に関連性があることが確認できた。そして共通点、あるいは相違点が浮かび上がってきた。いずれの作品も画譜を利用しているも



(図 13)
《朱漆山水人物密陀絵軸盆》
浦添市美術館蔵



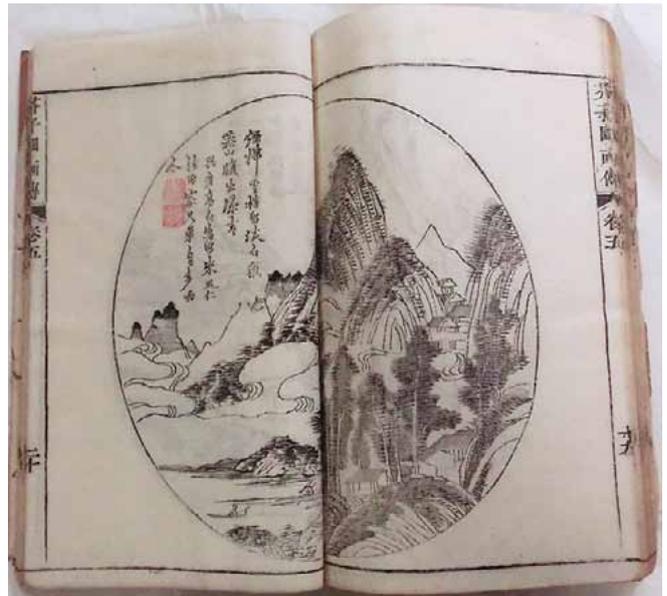
(図 14) 『唐詩五言画譜』
東京藝術大学附属図書館蔵



(図 15)
《朱漆山水人物密陀絵軸盆》
高士部分



(図 16) 《黒漆ビードロ入り山水樓閣螺鈿硯屏》
表面 浦添市美術館蔵



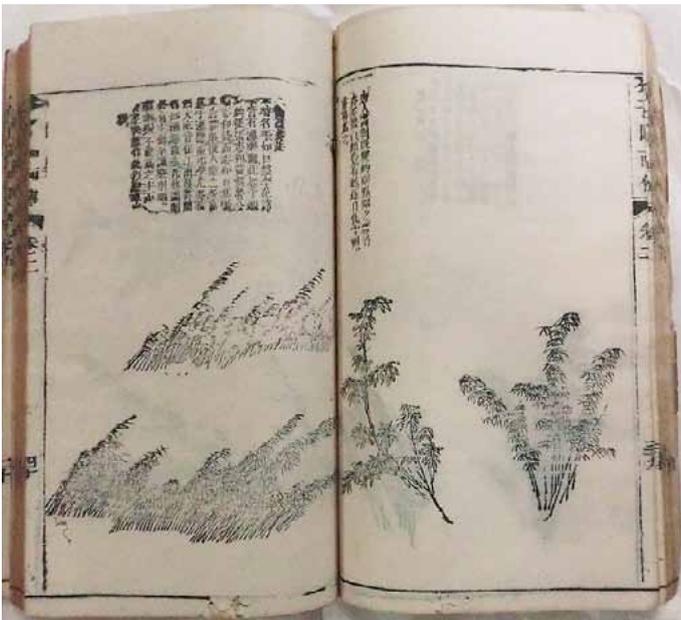
(図 17) 『芥子園画伝』那覇市歴史博物館蔵



(图 19) 《黒漆ビードロ入り山水楼閣螺鈿硯屏》
裏面 浦添市美術館蔵



(图 21) 右より表面外枠右側、同左側、
裏面外枠右側、同左側



(图 20) 『芥子園画伝』 那覇市歴史博物館蔵



(图 18) 表面 外枠右上部分

のそのまま写しているわけではなく、程度の差異はあるが図に加除筆、アレンジを加えている。特に作例(2)《朱漆鳥人物箔絵皿》、(3)《朱漆楼閣人物螺鈿硯箱》、(5)《朱漆山水人物密陀絵軸盆》の人物を主題とするものは、画譜から人物周辺を抜き出して漆器に利用している様子が窺える。反対に、竹雀や花鳥など、その他の主題の作例(1)《黒漆蘭亭図螺鈿文庫》、(4)《黒漆花鳥螺鈿漆絵箔絵棚》はわりとそのまま写しているといえる。作例(6)《黒漆ビードロ入り山水楼閣螺鈿硯屏》に関しては他作例と異なり、配置する空間にあわせてかなり大きく変化させている。また、作例(5)のみが中国清代の作例であったが、画譜利用の仕方については琉球漆器と同様であった。

5 おわりに

本稿では、浦添市美術館所蔵漆器《黒漆蘭亭図螺鈿文庫》《黒漆花鳥螺鈿漆絵箔絵棚》《朱漆楼閣人物螺鈿硯箱》《朱漆鳥人物箔絵皿》《朱漆山水人物密陀絵軸盆》《黒漆ビードロ入り山水楼閣螺鈿硯屏》以上6作例と画譜との比較検討を行い、以下のことを明らかにした。

前項のくり返しになるが、作例図様と画譜との間に関連性を確認でき、画譜を利用した漆器製作が行われていたことが分かった。そして、人物主題の作例は画譜の人物周辺を抜き出して利用しており、その他作例はある程度そのまま画譜を写していた。ただし《黒漆ビードロ入り山水楼閣螺鈿硯屏》については前述5作例と異なり、空間に合わせてかなりのアレンジがなされていることを確認できた。

今回は作例と画譜との比較作業が主となり、そこから浮かび上がってきたことに対して詳しく言及するには至らなかった。さらに、本稿執筆にあたり浦添市美術館所蔵作品と画譜との照らし合わせ作業を行った後にも、多くの漆器が同館に受け入れられている上、筆者の見落としも少なからずあるだろうと認識しており、今後は再度作例と画譜を照らし合わせる作業を引き続き行っていく必要がある。本稿では多くの課題が残ったが、引き続き取り組んでいきたい。

最後となったが、作品熟覧等でご協力くださった那覇市歴史博物館外間政明氏、画像を提供くださった東京藝術大学附属図書館、その他関係各位に記して御礼申し上げます。

-
- 1 画譜と近世日本絵画との関係を確認できる事例は『近世日本絵画と画譜・絵手本展—名画を生んだ版画—』（町田市立国際版画美術館、1990）にて多数紹介されている。
 - 2 肥前磁器に『八種画譜』を利用した図があり、その関連性については、齊藤菊太郎「古九谷山水図と八種画譜(1)」日本陶磁協会『陶説186』1968、齊藤菊太郎「古九谷山水図と八種画譜(2)」(日本陶磁協会『陶説187』1968)、荒川正明「古九谷様式の装飾意匠の特質について」(東京国立博物館『MUSEUM』)、荒川正明「肥前磁器と『八種画譜』—九谷様式における人物意匠の背景—」(出光美術館『出光美術館研究紀要第五号』1999)に詳しい。
 - 3 平川信幸「殷元良画「雪景山水図」に見られる技法の伝承について」(沖縄県立博物館・美術館『博物館紀要』3、2010、p15)にて、『芥子園画伝』をもととした図が琉球の絵師・殷元良の作例にあることが指摘されている。
 - 4 首里城公園管理センター編『琉球王朝の華—美・技・芸—』、2002、p17
 - 5 拙論「琉球漆器に描かれた山水図に関する一考察」京都造形芸術大学芸術学研究室『芸術学研究5』、2014
 - 6 前掲書、p136
 - 7 新村出編『広辞苑』岩波書店、1988、p486
 - 8 佐々木剛三「中国画譜と日本南宋画」、町田市立国際版画美術館『中国古代版画展』、1988、pp.32-33
 - 9 小林宏光「中国画譜の舶載、翻刻と和製画譜の誕生」、町田市立国際版画美術館『近世日本絵画と画譜・絵手本展(Ⅱ)』、1990、pp106-109

- 10 古原宏信『『芥子園画伝初集』 解題』『中国画論の研究』2003、では初版本その他重版本を紹介し、その異同を示している。
- 11 『館蔵 琉球漆芸』（浦添市美術館、1995、p141）にて図版とともに解説が掲載されるほか、『琉球の漆芸と文字』（浦添市美術館、1997、p29）では文字部分の拡大写真が掲載される。
- 12 『図絵宗彝』とは1607年中国刊行の画譜で、山水、梅花、翎毛花卉、竹描法、蘭、獸畜虫魚、長彦遠・郭熙の7項目からなり、日本でも翻刻されている。なお本稿掲載図版は、『図絵宗彝』卷三 毛花卉（草虫附）P12（東京藝術大学附属図書館蔵）で、1702年京都・唐本屋吉左衛門による明版（1607）の復刻初版本である。
- 13 『八種画譜』とは『唐詩五言画譜』『唐詩七言画譜』『唐詩六言画譜』『梅竹蘭菊譜』『草本花詩譜』『木本花鳥譜』『古今画譜』『名公扇譜』を明末にまとめたもので、日本でも翻刻された。そのうち『唐詩画譜』三編は、挿絵と詩がセットとなる詩画譜の形式をとる。なお本稿掲載図版は『八種画譜』[版] 第一 唐詩五言 P13、第二 唐詩六言 P14・22（東京藝術大学附属図書館蔵）で、1672（寛文12）年江戸・唐本屋太兵衛から出版されたものである。
- 14 （図5）に添えられた唐詩「白鷺」は以下の内容である。曠野悠々新水 遠山望々晴雲 湖北湖南白鷺 三々兩々成羣 また（図9）に添えられた唐詩「遺懷」は以下の内容である。小苑流鶯啼晝 長門浪蝶翻春 烟鎖顰眉慵飾 倚欄無限傷心 なお、唐詩は「新鐫六言唐詩畫譜」（『和刻本書画集成』6巻、汲古書院、p147、p162）で確認できる。
- 15 掲載図版が小さく確認しづらいが、作例3写真は『館蔵 琉球漆芸』（浦添市美術館、1995）p147にて掲載される。ちなみに作例1は同書p65、作例2は同書p148、に掲載される。
- 16 『古今畫藪 後篇 二』は南蘋派・宋紫石による画譜。本稿掲載図版は、『古今畫藪（古今画藪）』後篇 二[刊] P12（東京藝術大学附属図書館蔵）で、1771年（明和8）須原屋宗兵衛より出版されたものである。
- 17 『芥子園画伝』とは1678年（康熙18）－1818年（嘉慶23）刊行の画譜で、日本でも翻刻された。本稿掲載の那覇市歴史博物館所蔵本は「乾隆壬寅仲春」（1782）年版であることが平川信幸氏によって示されている（註3前掲書p19）。
- 18 紙面の都合上、本稿内で部分拡大図版及び画譜図版掲載は一部にとどまったが、作例写真は（註11）前掲書にて確認できる。また、『芥子園画伝』はアトリエ出版、芸艸堂等から出版されている復刻版でもある程度確認できる。

Okinawa Reversion to Japan and its Effect on the Philippine Community

Nakachi Kiyoshi

(Appointed Professor of the Graduate School of Osaka University)

In the 1950s US forces needed to hire English-speaking workers since it had been decided to construct permanent bases in Okinawa. Thus US forces went to the Philippines to employ Filipino workers. However, these workers were laid off after 1972 when Okinawa reverted to Japan. At that time the US government presented the workers two options, either to obtain US citizenship or return to the Philippines. Some Filipinos chose to go to Guam, which had become a very attractive place for Japanese visitors. The tourism industry urgently needed persons who spoke both Japanese and English. The Okinawan spouses of recent Filipino immigrants and their children contributed to developing the tourism industry in Guam since they were able to handle both English and Japanese. Thus the reversion of Okinawa to Japan in 1972 brought about significant change for the Filipino community in Okinawa.

Key words: Okinawa Reversion, Okinawa Filipino Association, King School, Duty Free Shops.

Ten Years of Urasoe American Corner

Ura Rumi, Morita Makiko

(Urasoe City Library)

Urasoe American Corner on the 2nd floor of this Library was established on September 14, 2004 celebrating its 10th anniversary this year.

The history of its establishment and the atmosphere immediately after its opening are referred to in “Yonotsuji” No. 7, and perspectives on operation of the Corner and an outline on how related programs might be held are given. In this article, we will look back at how the corner has changed since its inception, together with the criteria for establishment, the number of program’s and the preparation of events to mark the 10th anniversary and the atmosphere surrounding the events of September 2014.

Sepulchers of Tombs in Okinawa

-Changes in Sepulcher Structures Observed in the Middle and Southern Part of the Main Island-

Nio Koji

(Cultural Affair Section, Urasoe City Board of Education)

As relates to the forms of tombs in Okinawa, as Iha Fuyu obtained and recorded long ago, it was understood that the tombs were first an open-air burial. Tombs were then transformed into configurations with the tomb entrance closed off by a wooden plank, thereafter, the plank was replaced by a stone which led finally to the development of the magnificent stone structures known as the turtleback tombs. However, as for the internal structure of the tomb, little attention was paid. This article addresses how the forms of sepulchers have changed over time based on findings of early-modern tomb excavations and the increased interest in the excavation of these relics. The findings revealed that the internal structures of sepulchers were quite varied and diversified around 1700. The diversification of internal structures of the sepulchers may suggest that ideas significantly changed in relation to bone washing (an Okinawan ritual in which remains are washed and preserved in miniature shrines and how to place zushi (a case where remains are preserved)).

A Study of the Construction Site of Gokurakuji Temple

— Gokurakuji Temple and Sangaku Shinko (Mountain Worship) — (Study 2)

Takebe Takuma, Nagahama Tatsuki

(Cultural Affair Section, Urasoe City Board of Education)

(Cultural Affair Section, Ginowan City Board of Education)

In “A Study of the Construction Site of Gokurakuji Temple (Study 1)” (“yonotsuji” No. 9), the authors presented the assumption that Gokurakuji Temple immediately after its erection was relocated northwest of Urasoe Gusuku (Gokuraku Mountain) as the new temple site. In this article (Study 2), we mainly consider the time and place of the relocation of Gokurakuji Temple to the new site.

With respect to the time of relocation to the new site, it is said that Sho Hashi relocated Gokurakuji Temple (“The Origin of the Ryukyu Nation” and this overlaps with the time of repair of Urasoe Yodore (tombs of kings) and fortification of the top of the hill in the northwest of Urasoe Gusuku (just above Urasoe Yodore). We refer to the possibility that these three projects carried out in close proximity were promoted at the same time by Sho Hashi.

The construction site of Gokurakuji Temple is stated as “above the valley in front of the temple” (“The Origin of the Ryukyu Nation”) or “in the south of Urasoe Castle” (“Kyuyo”), but as Ryufukuji Temple, which was thought to have been built in the “south” of Urasoe Gusuku according to these historical records, is actually located to the west of Urasoe Gusuku. We present the case that the “south” in the historical records is actually in the west direction and that it is necessary to consider “above the valley in front of the temple” as west of Urasoe Gusuku.

Scientific analysis and identification of historical lacquerware

~A lacquer tray made by the hakue technique belonging to the Urasoe Art Museum~

Yamabuki Midori, Honda Takayuki, Miyakoshi Tetsuo
(Department of Applied Chemistry, School of science and Technology, Meiji University)
Miyazato Masako, Okamoto Aki
(Urasoe Art Museum)
Shimoyama Susumu,
(Kibi International University)
Shimoyama Hiroko
(Color Material Research Laboratory, Den Material Co., LTD.)

The analytical samples obtained from a lacquer tray made by the hakue technique produced in the 18-19th century belonging to the Urasoe Art Museum were analyzed by pyrolysis-gas chromatography/mass spectrometry. The results were compared with the standard of natural lacquer films to determine the identity of the lacquer species. Urushiol, 3-heptylcatechol and 3-heptylphenol were detected as pyrolysis products of lacquer pieces of a lacquer tray was coated with lacquer sap tapped from a *Toxicodendron vernicifluum* lacquer tree. Moreover, cross-section and microscopy studies demonstrated that the lacquer have multi-layer structures. X-ray analytical microscopy and infrared-ray photography were carried out directly on the surface of a lacquer tray to determine the presence of different pigments.

"A science analysis" and "the culture of a lacquer ware" about the round chest brought to *Izena-mura*.

Honda Takayuki, Igo Soichiro
(Department of Applied Chemistry, School of science and Technology, Meiji University)
Kamiya Yoshimi
(Tokyo Metropolitan Industrial Technology Research Institute)
Miyazato Masako, Okamoto Aki, Miyakoshi Tetsuo
(Urasoe Museum)

Izena-mura is an island where the relation is very deep in Ryukyu Kingdom. This island is the body which is the island where Daini-Sho-shi (the Sho clan, the second) who led Ryukyu Kingdom to prosperity was born. People called Noro who governs this island have received the round chest from Ryukyu Kingdom. This was a proof of governing an island instead of a king.

This time, I conducted the chemical analysis about this round chest. I used Py-GC/MS, EDX, a crossreact section analysis, etc. for the analysis. As a result, the laccol which is a lacquer of Vietnam or Taiwan, and the urushiol which is a Japan or China lacquer were used for these chests. People in those days showed an odds of having used two or more Japanese lacquers properly by colored, a drying property, etc., and this was a result in which a glimpse of a high technique of those days is.

Use of Picture Books in the Patterns of Lacquerware, Seen in the Lacquerware Possessed by Urasoe Art Museum

Toyama Ayano
(Urasoe Art Museum)

Use of picture books in patterns of paintings and artifacts has been made not only in China and Japan but also in the Ryukyus. For Ryukyu lacquerware, similar patterns and poems as those in picture books are found in “Inkstone screen. KENBYOO. Black lacquered wood with RADEN (黒漆山水樓閣人物螺鈿硯屏)” possessed by Okinawa Churaumi Foundation and the existence of an inkstone screen which excerpted the motif of Jieziyuan Huazhuan (“Inkstone screen. KENBYOO. Black lacquered wood with RADEN Decorated with twisted glass (黒漆ビードロ入り山水樓閣螺鈿硯屏)” possessed by the Urasoe Art Museum) is known.

This time, looking again at Ryukyu lacquerware possessed by Urasoe Art Museum, four works “Book case. BUNKO. Black lacquered wood with RADEN (黒漆蘭亭図螺鈿文庫),” “Shelf. TANA. Black lacquered wood with RADEN, HAKUE and URUSHIE (黒漆花鳥螺鈿漆絵箔絵棚),” “Inkstone box. SUZURI-BAKO. Red lacquered wood with RADEN (朱漆樓閣人物螺鈿硯箱)” and “Dish. SARA. Red lacquered wood with HAKUE (朱漆鳥人物箔絵皿)” are presented and although it is not Ryukyu lacquerware, we confirmed a lacquerware of Qing, “Scroll tray. JIKU-BON. Red lacquered wood with MITSUDAE (朱漆山水人物密陀絵軸盆),” which used picture books. Therefore, we stated the overview of the five works above and similarities to picture books.

Based on these works, we found that there are not a few works using picture books in lacquerware which are now identified as being made in the Ryukyus. In order to clarify the reality of use of picture books, however, further study is required.

(Introduction of Materials) Tiered Caterer’s Boxes Made in the Ryukyus Possessed by Urasoe Art Museum

Kinjyo Satoko
(Urasoe Art Museum)

Urasoe Art Museum collected four tiered caterer’s boxes in 2014 and 2015. A tiered caterer’s box is an apparatus in which tiered food boxes are stored and carried by hand. Here, we confirm tiered caterer’s boxes shown from historical records related to the Ryukyus and introduce the following four works: “Caterer’s box. SAGEJUU. Black lacquered wood with RADEN (黒漆山水樓閣螺鈿提重),” “Caterer’s box. SAGEJUU. Red lacquered wood with CHINKIN (朱漆牡丹唐草沈金提重),” “Caterer’s box. SAGEJUU. Red lacquered wood with URUSHIE, MITSUDAE and CHINKIN (朱透漆樓閣山水人物漆絵密陀絵沈金提重)” and “Caterer’s box. SAGEJUU. Red lacquered wood with HAKUE (朱漆牡丹唐草七宝繫箔絵提重).”

Okinawan's Return from the Japanese Pacific Islands during the War-Time.

Kawashima Jun

(Special Researcher, Okinawa International University, Institute of Ryukyuan Culture)

Many people made the voyage to the Japanese Pacific Islands from Okinawa during the prewar period. People from Okinawa in the Japanese Pacific Islands participated in “National Policy” serving in the governance and administration of policies of Okinawa and the Japanese Pacific Islands of a modernized Japan. After the beginning of the Sino-Japanese War, people from Okinawa, who accounted for about 70% of the population of the Japanese Pacific Islands, were integrated into the war system as part of Japan's all-out war effort. Further, due to a worsening war situation for the Japanese Army, after buildup of the “Wartime Emergency System” in the Japanese Pacific Islands, based on the policies of the Japanese government and Army, some women from Okinawa returned to Okinawa via the sea which became a battlefield as a result of control of the seas by the U.S. Navy and the Japan's mainland, and the Philippines and Taiwan and involved in the Battle of Okinawa and some of whom stayed on Japan's mainland and returned to Okinawa after Japan's defeat. The diversity of war experiences of the people from Okinawa upon clarifying the war experiences of the people who returned to Okinawa prefecture during the War from the Japanese Pacific Islands will be addressed. The relationships between modern Japan and Okinawa, focusing on people who returned to Okinawa prefecture during the War will also form part of the discussion.

- では、戦時引揚や戦争体験、収容所生活、戦後引揚に関する実態が明確にされた。新垣安子は、パラオからフィリピン・台湾への引揚の実態を明確にした（那覇市総務部女性室・那覇女性史編集委員会編『なは・女のあしあと 那覇女性史（近代編）』ドメス出版、一九九八年、二四六頁〜二四九頁）。
- (6) 戦時引揚を戦後引揚の前史として捉えて、安仁屋は「戦後沖縄における海外引き揚げ」（『史料編集室紀要』第二一号、一九九六年）で、戦時引揚に関する実態分析を行った。今泉は「南洋群島引揚げ者の団体形成とその活動―日本の敗戦直後を中心として―」（『史料編集室紀要』第三五号、二〇〇五年）において、戦時・戦後の引揚者団体の活動に着目すると同時に、引揚者の抱える問題を明確にした。
- (7) 安仁屋「移民政策」（沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編『沖縄戦研究Ⅰ』沖縄県教育委員会、一九九八年）では、戦前沖縄より植民地に移住して戦後引き揚げられるまでの過程のなかで、戦時引揚の様相を明らかにした。
- (8) 前掲「戦時下南洋群島からの戦時引揚について」。
- (9) 前掲「南洋群島在住民疎開者接収事務報告書その他〔複写資料〕」。
- (10) 同右。
- (11) 上江洲松子の証言（具志川市史編さん委員会編『具志川市史 第四巻 移民・出稼ぎ証言編』具志川市教育委員会、二〇〇二年、六三九頁）。以下、上江洲松子の証言は、これによる。
- (12) 照屋秀「南洋から引揚げて沖縄戦に遭遇」（北谷町史編集事務局編『北谷町民の戦時体験記録集（第一集） 沖縄戦―語ていいかな何時ぬ世までいん』北谷町役場、一九八五年、八八頁）。以下、照屋秀の証言は、これによる。
- (13) 国場世範の証言（前掲『具志川市史 第四巻 移民・出稼ぎ証言編』六一三頁）。以下、国場世範の証言は、これによる。
- (14) 志慶真元仁の証言（前掲『具志川市史 第四巻 移民・出稼ぎ証言編』具志川市教育委員会、二〇〇二年、六七三頁）。以下、志慶真元仁の証言は、これによる。
- (15) 金城ハルヨの証言（前掲『具志川市史 第四巻 移民・出稼ぎ証言編』七三一頁）。以下、金城ハルヨの証言は、これによる。
- (16) 幸地ヤスの証言（前掲『具志川市史 第五巻 戦争編戦時体験Ⅰ』六一八頁〜六二二頁）。以下、幸地ヤスの証言は、これによる。
- (17) 池原松助の証言（前掲『具志川市史 第四巻 移民・出稼ぎ証言編』七九七頁）。以下、池原松助の証言は、これによる。
- (18) 山内キヨ「ヤップ引き揚げと沖縄戦」（糸満市史編集委員会編『糸満市史 資料編7 戦時資料下巻 ―戦災記録・体験談―』糸満市役所、一九九八年、三五九頁）。以下、山内キヨの証言は、これによる。
- (19) 仲本キクエの証言（前掲『具志川市史 第四巻 移民・出稼ぎ証言編』五五四頁）。以下、仲本キクエの証言は、これによる。
- (20) 前掲「南洋群島在住民疎開者接収事務報告書その他〔複写資料〕」。
- (21) 前掲「南洋群島在住民疎開者接収事務報告書その他〔複写資料〕」。
- (22) 前掲「南洋群島在住民疎開者接収事務報告書その他〔複写資料〕」。
- (23) 前掲「南洋群島在住民疎開者接収事務報告書その他〔複写資料〕」。
- (24) 前掲「南洋群島在住民疎開者接収事務報告書その他〔複写資料〕」。
- (25) 前掲「南洋群島在住民疎開者接収事務報告書その他〔複写資料〕」。
- (26) 前掲「南洋群島在住民疎開者接収事務報告書その他〔複写資料〕」。
- (27) 前掲「南洋群島在住民疎開者接収事務報告書その他〔複写資料〕」。
- (28) 喜友名トヨ「疎開先での娘の死」（北谷町史編集委員会編『北谷町史 附巻 移民・出稼ぎ編』北谷町教育委員会、二〇〇六年、六五五頁〜六五八頁）。以下、喜友名（花城）トヨの証言は、これによる。
- (29) 津波古貞子「命がけの疎開船」（玉城村史編集委員会編『玉城村史 第7巻 移民編』玉城村役場、二〇〇五年、五〇三頁〜五〇四頁）。以下、津波古の証言は、これによる。また、山里千賀子「母の半生記」（那覇市総務部女性室『なは女性史証言集』第3号、那覇女性センター、一九九七年）。このタイトルは「母の半生記」とあるが、戦時引揚に関して、山里千賀子自身の体験も示されている。以下、山里の証言は、これによる。
- (30) 川上信子「夫と次男と長女は戦病死」（『沖縄市史資料集・6 美里からの戦さ世証言』沖縄市役所、一九九八年、三二頁）。以下、川上の証言は、これによる。
- (31) 新城キヨ「ロタ島からヤップ島、そしてミンダナオ島へ」（前掲『沖縄市史 資料集・6 美里からの戦さ世証言』二〇頁）。以下、新城の証言は、これによる。

島マニラを経由して台湾に上陸して敗戦を迎える人々や、ミンダナオ島で敗戦を迎える人々の証言に基づいて、戦時引揚の様相について明らかにした。米軍が制海権を確保しつつある状況のなかで、戦時引揚者は、米軍の攻撃を受けるかもしれないという生命の危険を感じながら、セブ島からルソン島を経て台湾に移動した。実際にマニラから台湾に向かう途中で戦闘に巻き込まれた船舶もあり、戦時引揚者はカミギン島に漂着した後に、駆逐艦に乗船して台湾に上陸するものもいたのである。また、上陸したフィリピンや台湾の各地で、食糧不足による栄養失調で死亡するものや、マラリアなどの伝染病に罹って死亡するものもいた。このように、戦時引揚者は、生命の危険を感じつつ、出身地へ向けて移動したのである。

むすびにかえて

本論では、日本本土やフィリピン、台湾上陸後における移動や生活の諸相について明らかにした。最後に、本論をまとめながら、戦時引揚の特質の一端について考察することで、むすびにかえたい。

南洋群島からの戦時引揚に応じた沖縄出身者のなかには、生命の危険を感じながら、横浜に上陸した後に神戸・鹿児島を経由して戦時中に沖縄に帰還して沖縄戦に巻き込まれたものや、鹿児島などで沖縄に向かう船を待っていたものの、海上交通が途絶したため、沖縄に帰還することができずに、熊本などの九州各地に移動して敗戦後に沖縄に引き揚げるものもいた。このように、戦時引揚者は日本本土での流浪を余儀なくされた。他方、南洋群島からフィリピンを経由して台湾で敗戦を迎えるものもいた。米軍が制海権を確保しつつある状況のなかで、戦時引揚者は生命の危険を感じつつ、移動した。なかには、船団

を組んでマニラから台湾に向かう途中で米軍の攻撃を受けた船舶もあり、船団のなかの一隻がカミギン島に漂着した後、しばらくして駆逐艦で台湾に向かうことになった。また、フィリピンや台湾の各地では、食糧不足によって栄養失調で死亡するものや、マラリアなどの伝染病に罹って死亡するものもいた。この時期に、日本の船舶が欠乏するとともに、南西諸島から日本本土や台湾に疎開させる方針が決定されたからであろうが、戦時引揚者は、そのままフィリピンや台湾に滞留して敗戦を迎えることになった。

このように、上陸地が日本本土であれ、フィリピンや台湾であれ、戦時引揚者は、引揚船舶に対する米軍の攻撃や、食糧不足による栄養失調、マラリアなどの伝染病の感染などにより、生命の危険を感じながら、南洋群島から出身地を目指して移動したのである。こうした戦時引揚の実施は、南洋群島在住の沖縄出身南洋移民女性などにとって、まさに戦争体験の一形態であったのである。

【註】

- (1) 「南洋群島戦時非常措置要綱二関スル件ヲ定ム」(国立公文書館所蔵『公文類聚 第六十八編 昭和十九年 第七十卷 軍事四 国家総動員二』。ここでは、一九四四(昭和一九)年四月以降の南洋群島で構築された体制を「戦時非常体制」と表現している。
- (2) 川島淳「戦時下南洋群島からの戦時引揚について——ジェンダーの観点から——」(『南島文化』第三六号、二〇一四年)。
- (3) 「南洋群島在住民疎開者接収事務報告書その他」(『複写資料』(沖縄県立図書館所蔵)。
- (4) 川島淳「南洋群島からの戦時引揚の実態について——出港・航行に関する沖縄出身女性の証言を中心に——」(『南島文化』第三七号、二〇一五年)。
- (5) 安仁屋政昭「南洋移民の戦争体験」(『新沖縄文学』第八四号、一九九〇年)

の生活とは異なる状態であったことが判る。

その後、新城キヨは、フィリピン在住で同郷の人と出会った。「ミンダナオ島でお会いすることになり、不思議な感じでした」と述べ、「飛行場建設のためにダバオ島に来ていたようです。じつは主人のいことがダバオ島にいて、新城さんはそこで彼らから私たちの話を聞いて連れに来たというわけで」、「後日、新城さんは私たちを連れに收容所まで来てくれました」と証言している。そして、「新城さんの親戚だと紹介して預かってもらった」が、「当時預かるというのは、いくらでも働き使えるということを意味していたようで」、「私たちは美代子（長女）、貞男（長男）、義男（ウトの子ども）という働き手がいたので、鎌を使える者は草刈りに従事し、供出のときはトラックいっぱい青ネギを全部植えたり、田植えも手伝うなど懸命に家族の者が生きるために働きました。隣組の組長さんが「島袋さんはよかつたね、こんなにたくさんの人夫を預かって」と話したりしていました」との証言があるように、その労働力にならざるをえなくなったのである。

その後、隣組組長の発言によつて、新城キヨらの生活は変化した。ある日のこと、その組長さんが「あなた達が行きたいところについていいよ」といって、部落の人たちを集め「新城さんのところは、夫が戦争に行つて嫁さんと子どもと姑さんがここに來ているけど、何も無いから、みんながあげられる物は何でもあげて下さい」と話をしたのです。するとその翌日には、精米された米が一斗缶のいっぱい入れられて蓋をして持つてくるし、食べきれないほどの大ネギ、ダイブーカシガーという一番大きい南京袋のいっばいの落花生も持つてきてくれました。量も多いし、また落花生は食べ方がわからないので、フィリピン人のいる町に行つて物々交換してきました。初めのころは、マンテーカー（現地語、油のこと）

も塩も味噌も何もありませんから、これらと交換してきて使っていたんです。町に行くときには朝出て、日が暮れるころにしか家に戻つてこれなかつたですよ。その間、子どもたちはひもじい思いをしているわけです。

それからミンダナオ島では畑も耕し、稲も植えていました。稲を植えたのは、私たちを預かっている島袋さんが、「麻を切つて傍らに置いておけば、小祿のおじさんを頼んで犁を入れてもらうから、そこに稲を植えてもいい」といつてくれたんです。麻はたいへん長くて、男の人だと一気に切ることができませんが、私たちは少しづつしかできませんでした。根っこ部分の一番長いものは、義男に持たせ、その次は美代子や貞男という具合に年の順に持たせて運ばせたのです。そうして準備ができると、小祿のおじさんが二頭の牛を持つてきて、一頭が働いている間に他方が水たまりで休むという具合に交互に使つて犁を入れ田んぼを作りました。ところが稲を植えて穂が垂れ下がるころには米軍が上陸するといふことで、山へ逃げていったんです。他人が作った米は何度か食べましたが、自分たちで作った物はとうとう食べることもできませんでした。

この証言から、ミンダナオ島で新城キヨらは農業の人夫となつて働くこととなった。また、隣組の組長は、新城キヨの事情に理解を示し、周囲の人から支援を受けることとなった。このように、南洋群島から移動してミンダナオ島で生活することとなつたのである。その後、一九四五（昭和二〇）年三月に米軍がミンダナオ島に上陸して地上戦となった。新城キヨは山中に避難した。敗戦後にミンダナオ島から沖縄に帰還した。

以上において、パラオやヤップから、フィリピンのセブ島やルソン

に引き揚げた。他方、川上は仁武省保舍甲の南西寮で敗戦を迎え、その後台北・基隆を経て沖繩に引き揚げた。両者の証言をみよう。

潮州では食糧事情が悪く、栄養失調で死亡する子供もいた。山里によれば、「食事は一日二食で芋とご飯だった。そこで麻疹がはやり、三女と四女がかかった。やせかけて助かるとは思えなかった。栄養状態も悪く小さい子供が次々に亡くなっていった。昭和十九年の十二月に五女の末子が生まれるが、とても小さかった。母子ともに栄養状態が悪かったので未熟児のようだった。その子は、たった一か月ほどで亡くなってしまった。今でも当時の光景が昨日今日のことに思い出される」という。このように、戦時引揚の途中で妹が生まれたが、一カ月で亡くなったことから、山里の心の中に妹の最期の様子が深く刻み込まれたのであろう。

その後、山里は潮州から美濃に移動した。「収容者の住まいは茅葺きで、壁や床は竹を使ったバラック建ての宿舍で十二棟くらい並んでいたと思う」と証言する。また「美濃ではマラリアがはやった。多くの人がマラリアにかかって亡くなっていった。母も私もかかった。高熱を出し寒さや震えがきた。カマスで作られた粗末な寝具では、とても寒さに耐えられるものではなかった」のであり、「役所から黄色いキノネの葉が支給された。危うく命をとりとめた」という。このように、戦時引揚の途中で、マラリアに罹って死亡した人々や生死の境をさまよいながら生きられた人々もいた。また、山里は学校に通う一方で、母は農業の手伝いをした。すなわち、「コウゼン寺というお寺があった。お寺を学校にして、一時だが学校にも通った。疎開者だけの五十人くらいの子供がいた。時々授業中も空襲があった。一度は急いで防空壕へ逃げる途中で小学生の男の子が機銃掃射にあい、私たちの目の前で亡くなった。腹部をやられて内臓がとび出していた」と述べる。こ

のように、戦時引揚の途中で米軍の攻撃を受けて死亡する子供もいた。他方「元気になった母は宿舍の仲間と、農家の田んぼの草取りや、大根引きなどの手伝いに出かけた。堤防工事にも参加したが女にはきつい仕事で危険でもあり、短い期間しか働けなかった」と山里は証言する。そして、山里は美濃で敗戦を迎えたのである。

川上は、高雄から仁武省保舍甲の南西寮に移動した。南西寮は「疎開者のための家で、長屋みたいな建物が四棟造られていました。床にはカマジ（麻でできている米を入れる袋）が敷かれていて、ゴキブリやシラミがたくさんいた」と証言するように、衛生状態の悪い環境での生活を余儀なくされた。そのため、「約千人ほどの難民が収容されていましたが、ほとんどの人がマラリアにかかり、半数近い人が栄養失調とマラリアで亡くなり、なかには一家全滅した家族もあったそうで、川上の「長女の敏子（一〇歳）が悪性のマラリアにかかってしまったのですが、田舎で病院もありません。私は人力車を頼んで楠市にある診療所に三日間通って治療させたのですが、熱も高くすでに手遅れの状態で、やせ衰えて亡くなりました」と証言する。そして「一九四五年八月一五日の終戦は南西寮で知りました」という。このように、台湾で栄養失調やマラリアなどで死亡する人々もおり、川上は、生命の危険を感じながら、沖繩に向けてパラオからフィリピンを経由して台湾に上陸したが、その後息子と長女を亡くしてしまったのである。

4. フィリピンのミンダナオ島

新城キヨはパラオからフィリピンのミンダナオ島に上陸した。「映画館を利用した所に収容されていた私たちは少人数の家族ならまだしも、私たちは大家族で誰一人、引き取り手がなく、ずっと収容所にほうって置かれていました」と証言する。この証言から、先述したセブ島で

運良く命拾いした私たちは、島に二〇日間ぐらい滞在しました。でも台湾からの迎えの船は来ないし、私たちはこの島で死ぬんだと思ったこともありました。カミギン島に私たちが上陸していることがわかっていたんでしょう。敵から何度か攻撃を受けました。この証言から、戦場となった海域で戦時引揚が実施され、海戦に巻き込まれたがゆえに、フィリピンから台湾に向かう途中でも、生命の危険を感じるといふ極限状態であったことが看取できる。

その後川上は「ずっと山奥へ逃げていましたので、家もなく、ただ茅を敷いて座って隠れているだけです。また、雨が多い上に被るものもなく、ずいぶん苦労しました。そのうえ、食糧もほとんどないので、虫のついた米も食べざるを得ない状況になり、子どもたちはお腹をすかせて非常に痩せ細り、特に隆夫は歯グキがダメになり栄養不良になってしまいました」と証言する。この証言から、カミギン島での避難生活が過酷な状況であったことが判る。その後「私たちは駆逐艦四隻に分乗してカミギン島を出発し、敵潜水艦の出没するバシー海峡を通って台湾の高雄港に上陸しました」と述べる。このように、敵の攻撃や栄養不良などによる生命の危険を感じつつ、台湾に到着した。

3. 台湾の高雄上陸とその後

戦時引揚者のなかには、戦時中に台湾から沖縄に帰還できないものもいた。おそらく一九四四（昭和一九）年七月に、南西諸島から日本本土や台湾に疎開させる方針が決定されたからであろう。

津波古は、マニラから台湾に向かう船中のことについて「昭和十九年七月七、八日頃、別の船で台湾へとマニラ港を出発する。洋上でサイパン島玉砕の文字がデッキに書かれていて、サイパン島の玉砕を知るも、私達もいつ敵の襲撃に遭うか不安と恐怖で動揺し、命がけであつ

たので玉砕に対する反応はなかった。船は大事をとってか、左右に大きく弧を描くような運行で台湾到着まで二泊三日を要した」と証言する。また山里は「潜水艦や敵機にひやひやしなながらの航海だった」という。このように、米軍の攻撃を受けるかもしれないという恐怖心を抱きながら台湾に移動したことが判る。

その後、津波古と山里は台湾の高雄に到着した。津波古は、「七月十日頃無事高雄港に到着、みんな抱き合って喜ぶ。そこでウチナーンチュは下船させ、収容先のホテルへと案内され、台湾での疎開生活となる。同船は、残りの乗客を乗せ、日本本土へと出港したがその後のことはどうなったかわからない。台湾にいたこの頃に津波古新正（中略―引用者）と結婚した」と証言する。他方、山里は「高雄での宿舎は、軍に接收されたホテルであった。全員そこで共同生活を始めた。高雄でも頻繁に空襲があり安心して生活できる状態ではなかった。ここで母は身ごもっていることを知った。高雄で二か月位過ごして、収容者全員潮州に疎開する」と証言する。このように、津波古と山里は台湾の高雄に上陸してホテルに収容された。ただし、高雄でも空爆を受けたことから、生命の危険を感じるといふ緊迫状態のなかにいた。

また、川上はカミギン島から高雄に到着した後、「栄養不良になっている隆夫は、市内の高雄病院に約一週間入院させたのですが、亡くなってしまうました。四歳でしたが、非常にやせ細って可哀相でした。そのまま病院で火葬し、高雄市内のお寺に預け、娘たちが先に収容されている、高雄市から北へ約四キロほど離れた台湾仁武省保舍甲に建設された難民キャンプの南西寮へ行きました」と証言する。このように、食糧不足によって引揚の途中で死亡するものもいた。

高雄上陸後、戦時引揚者は台湾各地に移動した。山里は、高雄から潮州と旗山郡美濃に移動し、敗戦後に美濃から台北・基隆を経て沖縄

はほとんど使い果たしてしまった。それでも、マニラにいる沖縄県人から、衣類や食物の差し入れがあり、ずい分助けられた」と証言する。また津波古は「マニラでの収容は、日本人学校が充てられ、当地でも沖縄県人会からとのことで衣服が配られた。県人会の心温まるご厚意にみんな感謝した。そこでも約一カ月の滞在であった」と述べる。このように、マニラの収容所からの外出は許可されず、また食糧の配給だけでは足りなかったが、フィリピンの沖縄県人会の支援を受けるとともに、物売から食糧を調達せずにはいらなかった。

マニラから台湾への移動について、山里はマニラに「約一か月くらいの滞在の後、次は台湾に疎開と言われた。皆いやがったが、子持ちは強制的だった。単身者はマニラに残った。その人達が羨ましかった。二度も遭難を体験した私たちをまた台湾に追いやるのは、ひどいのではないかと思った。死を覚悟の乗船であった」と証言する。このように、死を覚悟しながら、マニラから台湾に向かった。しかし、山里は「マニラに残った人達は、米軍の上陸により戦闘にまきこまれ、ほとんどの人が亡くなった。そのことは後で知った。一緒に台湾に来ておれば助かったのに、人の運不運は全く分からないものだと思った」という。この証言から、生と死との境界線が何によって決定づけられるのかという命題が、戦後においても山里の心に深く刻まれたことが判る。

また、山里によれば、台湾で沖縄出身者が上陸する一方で、日本本土出身者はそのまま船で日本本土に向かったという。他方、川上は「マニラから台湾に疎開するとき、沖縄人は沖縄に、ナイチャー（本土の人）は日本本土に直行する予定で、大正時代に造られたような小さな古い木造船に、別々に乗船しました」と証言する。このように、戦時引揚者のなかには、向かう先の違いから沖縄に向かうものと日本本土に向かうものがそれぞれの船に分かれて乗った場合もあったことが判る。

2. フィリピンのカミギン島漂着

津波古と山里はマニラから台湾の高雄に直航できたが、川上の乗った船は戦闘によってカミギン島に漂着した。次の証言がある。

長男の幸雄がいうには、船がマニラから台湾に向かっているときに、リンガエン湾のあたりで、船内があまりにも暑いので甲板に上がっていると、敵潜水艦からの魚雷攻撃を受けて、いくつもの疎開船が撃沈されていくのを目のあたりにしたようです。その間、日本軍の巡洋艦や駆逐艦が一斉に応戦したようですが、先頭をいく船はやられ、私たちの船は速度が遅く攻撃しても余り効果がないと思ったのか、幸いにも助かったわけです。約一時間ぐらいで海戦は終わり、やがて硝煙が消えて目に入ってきたのは、マニラを出発した六隻のうち、無事だった三隻の船だけでした。そのような危険水域を私たちの船は、無事にぐり抜けることができました。

その後は護衛の駆逐艦もなく、三隻の船は船団を組まずに各々航海で、フィリピンのカミギン島に着きました。そこで一泊し、翌日、出発するため全員が乗船しましたが、危険だという情報が入ったのか、病人以外はカミギン島に上陸するよう、船長からの命令がありました。私たちはどうしようか迷いましたが、みんなが船から降りるのでいっしょに降りました。私は子どもを負っていたので、船から降りるときに、荷物をすべて船に残してしまいました。

一九四四（昭和一九）年一〇月一日、上陸した日の翌日、台湾空襲の帰りの米軍のグラマン機に、私たちの乗ってきた三隻の船が発見され撃沈されました。あとで聞いた話ですが、カミギン島には日本軍の通信基地があつて狙われたようです。

以上において、南洋群島で戦時引揚に応じた沖縄出身者のなかには、横浜・神戸から鹿児島を経由して戦時中に沖縄に帰還したものや、鹿児島などで沖縄に向かう船を待つていたものの、海上交通が途絶したからであろうが、沖縄に帰還できずに、熊本などの九州各地に移動して敗戦後に沖縄に引き揚げたものもいた。このように、戦時引揚者は、南洋群島からの引揚げ後に日本本土での流浪を余儀なくされた。

第二節 フィリピン・台湾における戦時引揚者

沖縄県内の自治体史掲載の証言によると、パラオやヤップ出港後に、フィリピンのミンダナオ島に上陸して敗戦を迎えるものや、フィリピンのセブ島、ルソン島のマニラを経由して台湾の高雄に上陸して敗戦を迎えるものがいた。後者には、マニラ出港後に戦闘に巻き込まれたため、カミギン島に漂着して高雄に到着したものもいた。ただし、フィリピンや台湾への戦時引揚者数は不明である。これらの証言に基づいて、フィリピン・台湾を経由した戦時引揚の様相について明確にしよう。

1. セブ島からルソン島マニラへ

津波古貞子と山里千賀子はパラオで美山丸に乗ったが、美山丸は米軍に撃沈され、その後に乗ったジヨクジャ丸も翌日に米軍の攻撃を受け、護衛の木造船などでフィリピンのセブ島に上陸した²⁹。この船団とは別で、川上信子は、「ルソン島のマニラに直航する予定でしたが、危ないので周囲を駆逐艦に守られながら、二日ほどかかってフィリピンのセブ島に四月二〇日ごろ着きました」³⁰という。さらに、新城キヨは「ナハ（義母）、ウト（義妹）とその家族三人、カマド（義妹）たちと一緒にミンダナオ島に避難した」³¹と証言する。このように、フィ

リピンを経由した戦時引揚者もいたのである。

戦時引揚者は、セブ島の教会に収容された。川上信子は「セブ島では教会に収容され、二週間ほど滞在したあとマニラに向かいました」と述べる。津波古は「セブ島で滞在すること約一カ月」で、「セブの教会に全員収容され」、「着のみ着のままであったため、衣服が配られやつと着替えもできることができ、また、三度の食事も与えてくれて有り難かった」と証言する。山里は「セブ島では教会らしき所に二週間位いて、さらにマニラに移動することになった」という。津波古と山里は同じ船団で引き揚げたが、セブ島に滞留した日数に関する証言はまちまちであるが、二週間から一か月間ほど滞留していたのであろう。

その後、戦時引揚者はセブ島からルソン島マニラに移動した。川上は「私たちがマニラへ着いたころは、広いマニラ湾に敵の機雷が浮遊して、非常に危険でした。その機雷を日本の海軍が機銃で爆破している最中に私たちはマニラへ着いたらしく、みんなとても緊張して息の詰まる思いでした。」と証言し、「マニラ湾に入ってから港につくまでの航海の途中、不思議なことに船は一旦、航路を逆方向にとつていました。おそらく、前進すると危険だったからだと思いますが、そのために五日ほどかかって、やっとマニラ港に着いた」という。川上の証言から判るように、生命の危険を感じながら、マニラに上陸した。

マニラでの生活について、山里は「収容所は、学校の建物であった。難民同様の私たちは、街に一步も出ることが許されなかった。治安が悪いという噂もあった。そこでの生活は、食事が一日二回でもみの混入したサイゴン米の、小さいおにぎり二個とタクアンが一切れであった」ため、「母は子供たちに栄養をつけようと、裏口に来る物売りから、米菓子や豚の三枚肉を炒めたものなどを、よく買った。一切れが五円もした高すぎると言っていたが、背に腹はかえられず、持参したお金

けど、鹿児島からは船に乗って沖縄に帰ってきた。那覇港からすぐ天願にでした」と述べる。金城ハルヨは「横浜から鹿児島に着いて、鹿児島から沖縄へ向かう船の中で次男が生まれた。船の名まえは輝邦丸でした」と証言する。山内キヨは「横浜から神戸、鹿児島に行き、鹿児島から那覇に向かった。船は敵の攻撃を恐れてあっち逃げ、こっち逃げしながら、どうにか那覇に入った」という。一九四四（昭和一九）年五月一日に沖縄に到着した幸地ヤスは「神戸から照国丸で鹿児島に行つて、鹿児島で一泊した。引き揚げてくるとき一番怖かったのは魚雷にやられることだった」と証言し、「昭和十九年五月一日に沖縄に着いて」、赤道の志喜屋に到着したと述べている。この証言から、引揚の際に米軍の攻撃を受けるのではないかとこの恐怖心を抱いていたことが判る。そして、横浜や神戸から鹿児島を経由して戦時中に沖縄に帰還して沖縄戦に巻き込まれる人々もいたのである。

鹿児島では、神戸や横浜よりも食糧が不足し、病人も続出していたという^⑧。喜友名（花城）トヨ^⑨によれば、加治木港「近くのイチマル旅館に泊まりました。旅館は食べ物が少なく、乾燥させたフィルムサーイモ（虫食い芋）と少量の米を混ぜたものを炊いて出していました」という。また「鹿児島にいたときに、娘たちが当時流行していた麻疹に罹り、鹿児島の県立病院に入院させました。パラオから持ってきた荷物を旅館に預け、付き切りで看病しました。弘子は回復していきましたが、道子は治療の甲斐もなく、亡くなりました」と証言する。このように、戦時引揚者のなかには引揚の途中で死亡する者もあり、戦時引揚が戦争という極限状態のなかで実施された。さらに、喜友名（花城）トヨは「病院から旅館に戻つてみると、預けてあった荷物が盗まれました。家財道具や衣類、毛布など南洋庁から引き揚げの際に支給された品物も、何もかもです。でも、なぜか泥棒は羽釜だけは盗

らずに残してありました」と証言するように、盗難の被害に遭うものもいたのである。

先述のように、鹿児島経由で戦時下の沖縄に帰還した人々もいたが、沖縄に帰還できずに、九州各地に移動して敗戦後に沖縄に引き揚げた人々もいた。というのも、日本軍にとつての戦局の悪化によつて日本本土と沖縄を結ぶ航路が途絶してしまい、また沖縄から日本本土や台湾に疎開させる方針が決定されたからであろう。

敗戦まで、九州で生活するものもいた。喜友名トヨは、子供とともに「鹿児島から沖縄へ出る船を待つていましたが、「鹿児島にアメリカ兵が上陸する」という噂を聞いて熊本県に移動し、お寺で一年ぐらい疎開生活を送りました」と証言する。上江洲松子は「半年して、神戸はあぶないということで、今度は熊本に行きました。引揚者はお寺に分散されていました。私たちと一緒にの人たちは、六力所ぐらいいに入っていました。私たちがいたところは熊本の川尻という郊外でした。川尻浄慶寺というお寺だったんです。一、二年ぐらいいいたんじゃないですかね」と述べる。このように、戦時中に沖縄に引き揚げることができずに熊本などで敗戦を迎えるものもいた。また喜友名（花城）トヨは、熊本で「死亡告知書が届き、主人の死を知りました」と証言するように、南洋群島での夫の戦死を日本本土で知らされるものもいた。

戦後沖縄への引揚について、上江洲松子は「一九四六年（昭和二十一）か、四七年ぐらいいに佐世保から沖縄に帰ってきました。佐世保で、一週間ぐらいいいて、沖縄に帰る船はくじ引きでした。みんな早く帰りたいものですから、われ先にくじを引いていました。一回目はくじが当たらずに、妹が病気になるっちゃって後回しになった。そのあとくじ引いたら当たって、ようやく沖縄に帰ってきました」と証言する。このように、戦後になって、沖縄に引き揚げるものもいた。

班単位の行動であり、上意下達の指示系統があったであろうことも垣間見られる。山内キヨは「船が港に着くと、私たちは手荷物だけを持って急いで船から降ろされた。荷物は後から降ろしてくれるんだろうと思っていたが、荷物も降ろさないうちに、船はどこかに行ってしまった。横浜には1週間ぐらいいた。南洋からの船が入港したと知って、港の近くに住む奥さんたちが「砂糖を持ってきているのなら、どんな物とでも換えてあげますよ」と集まってきていた。私の荷物には砂糖も入っていたのに、船から降ろすこともできず悔やまれた」と証言する。荷物が降ろされなかったことが常態化していたのかは判然としないが、日本本土でも砂糖の不足から、南洋群島からの戦時引揚者との間に砂糖との物々交換がなされていたことが垣間見られる。

2. 神戸

神戸に上陸した戦時引揚者は二八五二名であり、日本本土に上陸した戦時引揚者全体の約一七・四％に該当する。戦時引揚者の宿泊施設は、一九四一（昭和一六）年に閉鎖された移住教養所と市内四六箇所の旅館であった²³。神戸に上陸した戦時引揚者のうち、六二名が病気で入院し、入院患者一〇名を含む三三名が死亡した²⁴。横浜上陸後に神戸に移動したものは五〇三九名であった。「収容疎開者は横浜より移送せる者及神戸入港到着の者並に門司より陸行到着の者にして、其の多くは沖縄県人及朝鮮人団体」であり、母村に戻るための船舶の都合上「短くとも数十日、長きは月余に及ぶこと少しとせず」という²⁵。このように、直接神戸に上陸した戦時引揚者と、横浜上陸後に神戸へ移動して沖繩に向かう船舶を待っていた沖繩出身者なども滞留していた。神戸から戦時中に沖繩に帰還したものもいれば、九州に移動して敗戦を迎えた人々もいた。以下、神戸の滞在についてみてみよう。

直接神戸に上陸した照屋秀は「木造の疎開船は神戸までは日数はなかったが無事着いた。ネンネコ等冬の衣類の支給があった。何日かして沖繩行の船に乗ったが敵の潜水艦の出没で何回か港に逃げ込んだりしてやっと那覇に着いた」と証言するように、神戸に上陸した後に海路で沖繩に向かう途中で米軍の攻撃を受けるのではないかという緊張状態のなかで沖繩に向かったことが判る。

他方、幸地ヤスは、「横浜に一泊し汽車で神戸に行つて、そこで二か月半ぐらい避難所みたいなところにいた」と証言する。志慶真元仁は「サイパンから横浜の港に着いて、神戸の移民教養所という移民を送りだす施設があるのですが、そこにしばらくいて、そこからやっと沖繩へ。」と証言する。また、国場世範は「テニアンから横浜に着いた。（中略）引用者）神戸には収容所があったから、そこに何か月かいて沖繩に引き揚げた」という。上江洲松子は横浜に上陸して神戸に移動し、「神戸の三宮のずーっと上のほうに兵隊が入っている教養所があったんです。そこに半年ぐらいいました。七、八階ぐらいの建てものだったんですけど、そこには引揚者が入っていましたから、食事などは南洋庁がみていましたので、お金は一銭もかかりませんでした」と述べる。以上の証言から、神戸に上陸したものと、横浜上陸後に神戸に移動した人々は神戸の移民教養所などで生活したことが判る。

3. 九州

横浜や神戸から鹿児島に到着した人々は二三八五名であり、沖繩に帰還するものもいた²⁶。仲本キクエは、横浜上陸後に「鹿児島の移住組合に何日かいて、鹿児島から船が出て那覇港に着きました。宿屋に泊まってから川田へ」と証言する。池原松助は、横浜上陸後に神戸に向かい、その後「神戸から汽車に乗って鹿児島に行つたと思うんです

のなかには、戦時下における南洋群島から日本本土やフィリピン、台湾への移動を「疎開」と表現するものもあるが、植民地や占領地から母村などへの人口還流は「引揚」として捉えられていることから、この移動形態を「戦時引揚」として表現することにする。

第一節 戦時引揚における日本本土上陸について

日本本土に上陸した戦時引揚者は一万六三六八名である。日本政府としては四万六〇〇〇人を日本本土に引き揚げさせる予定であったが、日本軍にとつての戦局の悪化によって、当初予定していた総数のうちの約三五・六二%（一万六三六八名）が日本本土に移動したことになる⁽⁹⁾。

南洋群島から日本本土への戦時引揚に充てられた船舶数は延べ一〇三隻であり、飛行機数は延べ二〇機であった。その主な上陸地は、横浜、神戸、門司、呉などである。横浜上陸者は全体の七三・一%（一万一九八〇名）、神戸上陸者は全体の一七・四一%（二八五二名）、門司上陸者は全体三・七三%（六一一名）、呉上陸者は全体の三・二〇%（五二四名）であった。その他の上陸地は、芝浦、横須賀、大阪、磯子、羽田、大阪、佐世保、和歌山県勝浦、千葉県勝浦、三崎、長崎であり、それぞれの上陸者は全体の占める割合の二%未満であった⁽¹⁰⁾。

戦時引揚者は日本本土の上陸地で衣料や日用品などの支給を受けた。その後、上陸地から出身地などに移動した。沖縄県内の自治体史掲載の証言から、日本本土上陸後の移動経路をまとめると、次の通りである。上江洲松子⁽¹¹⁾は、横浜から神戸、熊本に移動し、熊本で敗戦を迎えて佐世保から沖縄に帰還した。照屋秀⁽¹²⁾、国場世範⁽¹³⁾、志慶真元仁⁽¹⁴⁾は横浜から神戸を経由して沖縄に戻った。また、金城ハルヨ⁽¹⁵⁾、幸地ヤ

ス⁽¹⁶⁾、池原松助⁽¹⁷⁾、山内キヨ⁽¹⁸⁾、仲本キクエ⁽¹⁹⁾は横浜から神戸、鹿児島を経由して沖縄に戻った。このように、日本本土に上陸した戦時引揚者のなかには、戦時中に沖縄に戻って沖縄戦に巻き込まれるものや、日本本土で敗戦を迎える人々もいた。以下では、戦時引揚者の証言に基づいて、日本本土から沖縄に帰還するまでの様相について明らかにする。

1. 横浜

南洋群島からの戦時引揚者のうち、全体の約七三・一%にあたる一万一九八〇名は横浜に上陸した。海岸付近にある四四箇所の旅館が戦時引揚者の宿泊施設にあてられた⁽²⁰⁾。横浜滞在期間については「短きに二、三日、長くとも入院患者其他沖縄県人、朝鮮人の如き団体引率の關係及特別の事情ある者を除いては、一週間程度にして帰郷の途に就けり」⁽²¹⁾という。すなわち、二日から七日までの間横浜に滞在した後各地へ移動した。ただし、日本本土から沖縄への移動手段が確保できなかったからであろうが、この日数を超えて滞在するものもいた。また、横浜に上陸した戦時引揚者のうちの一一九名が病気で入院し、入院患者一六名を含む二一名が死亡した⁽²²⁾。

横浜での状況に関する証言をみてみよう。上江洲松子は、「四月一日に横浜に着いて、そこに三日いて、それから神戸に行きました」と証言している。また、国場世範は「テニアンから横浜に着いた。横浜でテニアンは玉砕になったというのを聞いたんです。それでテニアンの話はするな、どこにスパイがいるかわからないからとっていた。私はこのときまでは班長だった」と証言する。実際に「スパイ」が存在していたか否かは別としても、「スパイ」の存在を想起することで、総力戦体制下の日本本土においても言論統制が強化されていた。また、

南洋群島からの戦時引揚と沖縄出身女性について

川 島 淳 (沖縄国際大学南島文化研究所特別研究員)

はじめに

南洋群島からの戦時引揚は、戦場となった海域において一九四三(昭和一八)年一二月から一九四四(昭和一九)年一二月に実施され、南洋群島在住の沖縄出身女性の特質について考察するうえで重要な出来事の一つである。そこで、本稿では日本本土や台湾、フィリピンに上陸した戦時引揚者の移動形態などについて明らかにする。

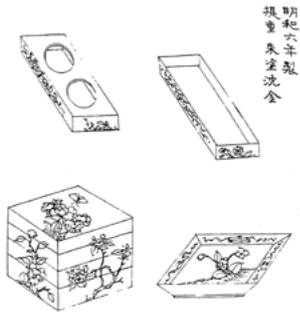
一九四一(昭和一六)年一二月八日に太平洋戦争が勃発した。翌年六月にミッドウエー海戦で日本海軍が敗北し、翌一九四三(昭和一八)年二月にガダルカナル島で日本軍は敗退した。その後、米軍が制海権を掌握しつつあり、日本の海上交通の確保も厳しい状況になった。同年九月三〇日の御前会議では、いわゆる「絶対国防圏」が策定され、マリアナ諸島やパラオ諸島などは「絶対国防圏」内に位置づけられたが、マーシャル諸島などは「絶対国防圏」の外に置かれた。また、一九四四(昭和一九)年四月一四日に「南洋群島戦時非常措置要綱二関スル件」が閣議決定されて、南洋群島に「戦時非常体制」が構築された⁽¹⁾。かかる戦争指導と政策過程の結果、「戦時非常体制」下の南洋群島では、男性は防衛戦力として南洋群島に残留させられる一方で、食糧増産や国防資源の開発に従事する者を除いた南洋群島在住の女性や子供は戦時引揚の命令・指示に応じざるをえなかった。こうして、一九四三(昭和

和一八)年一二月から翌年一二月までの間に、戦時引揚は、基本的に性別役割分業体制の構築によって実施された。したがって、「戦時非常体制」の確立に伴ってジェンダーの再編に基づく戦時引揚の実施は、それまでの「近代家族」とジェンダーの親和性を崩壊させることになり、南洋群島在住の家族のなかには分断された家族もあつたのである⁽²⁾。

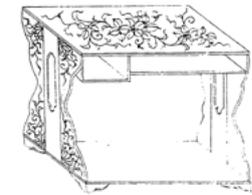
戦時引揚者は米軍の攻撃に恐怖心を抱きつつ、日本本土やフィリピン、台湾に上陸した。南洋群島から日本本土への戦時引揚者は一万六三六八人であつた⁽³⁾。他方フィリピンや台湾への引揚者もいるが、その数は現在不明である。戦時中に沖縄に帰還して戦争に巻き込まれるものもいれば、上陸した地域などで敗戦を迎えて沖縄に引き揚げるものもいた。南洋群島を出港した引揚船のなかには、米軍の攻撃で撃沈された船舶もあり、引揚の途中で死亡する者もいた⁽⁴⁾。

戦時引揚に関する従来の研究では、南洋移民の戦争体験⁽⁵⁾や、沖縄より植民地への渡航から戦後引揚までの過程⁽⁶⁾、戦時引揚と戦後引揚との連続性⁽⁷⁾、戦時引揚と性別役割分業との関係性⁽⁸⁾といった四つの枠組みで論じられた。このように戦時引揚の特質は論じ尽くされた感があるが、本稿では、戦時引揚者が日本本土やフィリピン・台湾に上陸した後に、敗戦を迎えるまでの様相について明確にする。その際に、一〇〇年後においてもあらゆる人々が検証可能な状態にある沖縄県内の自治体史に掲載されている証言を分析の対象とする。なお、証言者

図1 『琉球漆器考』の提重



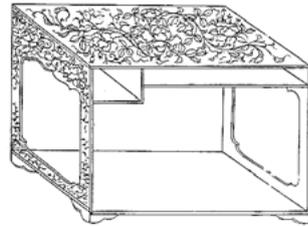
明和六年製
提重 朱塗沈金



3: 明和六年(1769)製
提重 朱塗沈金



明和六年製
提重一式
朱塗沈金



2: 明和六年(1769)製
提重一式 朱塗沈金

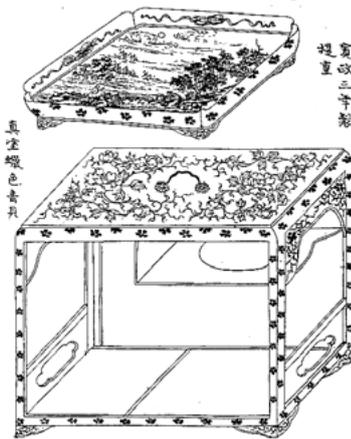


寛延二年製
貝摺
提重

1: 寛延二年(1749)製
貝摺提重



5-2



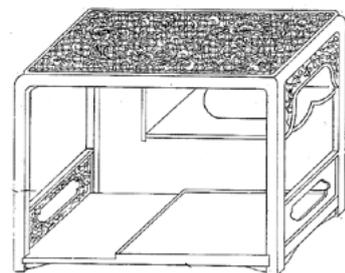
寛政三年製
提重

真塗
螺色青貝

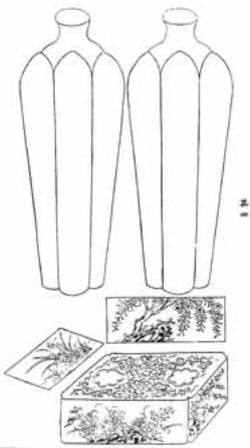
5-1: 寛政三年(1791)製
提重 真塗螺色青貝



安永四年製
沈金
提重



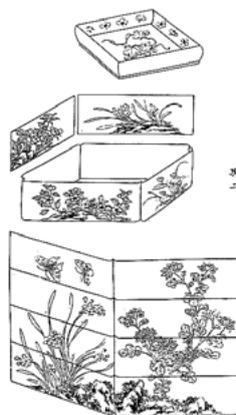
4: 安永四年(1775)製
沈金 提重



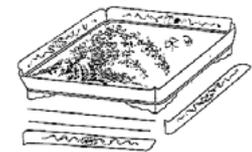
6-2 其四



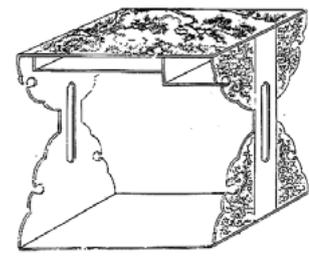
6-2 其三



6-2 其二



天保十三年製
真塗青貝
提重



6-1: 天保十三年(1842)製
真塗青貝提重

表 1・2：荒川浩和編 辨當の種類

『宴と旅の器 辨當箱 特殊製紙コレクション』⁽¹⁾ 掲載内容を表に整えた。

表 1. 一、構造形式による分類

1. 各種器物の組込み型	提重	重箱・徳利・楊枝箱・方盆・小皿・盃等を組込み、外枠に納めた形式。全体に被さる箱形外鞘を伴ふ例があり、古い形式と見られる。
	変り型提重	酒器その他の内容品に変化の見られるもの。外枠の代りに箱形、両開形等に納入した形式。婚禮道具に単に「辨當」という名称で各種器物を引出しに納めた形式もここに分類しておく。
	茶辨當	茶の湯釜・風呂以下茶道具一式を纏めて携行する道具。簡単な食器を具備する場合もある。
2. 同種器物の組込型	箱辨當	破子・箱形等の同形式の辨當箱を数個一括して納めたもの。婚禮道具に「割子辨當」として五十人分・百人分を籠長持に納める。
	扇辨當	扇面形器を数個重ねて納め、要を軸に交互に開く構造。
	提重箱	重箱や食籠形式を箱に仕込んだり、台ののせて携行し易い構造としたもの。唐物の食籠にも提手のついた形式がある。
3. 重ね入子形式	食籠	方形・円形・六角形等各様あり、重ねも二段から数段までである。重ねのない平形も食籠と称し、これに対して重ねのあるものを重食籠ともいふ。
	重箱	ほぼ方形で棧蓋を置き、大小あり、数も各様である。重台を伴う場面もある。長方形重ね箱は重箱と区別しておく。
	入子辨當	大小数個の器が順次入子式に納まる形式。円形・方形・長方形・小判形等各様ある。
	筍辨當	入子形式の変形で、積重ねると上部が細くなるので、この名がある。
	信玄辨當	多くは円形で、蓋・懸子・身がそれぞれ容器となる。
4. 単一形式	腰辨當	弦月形で懸子を納める。記録には「腰桶」と記されてゐる。*
	印籠辨當	両側に紐を通して腰に吊る形式。印籠に似てゐるので、この名がある。
	面桶	円形や小判形の曲物。一般に「メンバ」と称す。本来は一人前づつ飯を盛って配る器。
	辨當行李	竹・籐・柳等で編んだ小型の行李。
5. その他	象形	鯛・傘・壺等に象ったり、手桶に仕込んだ変り型。
	瓢箪	「箪」は竹や草で編んだ円形の器のことで、瓢に酒を、箪に飯を容れて共に携行する。

* 「一御腰桶老 黒塗花輪違蒔繪 紫糸御網二入」(『御代々御召御道具并御小道具帳』)

表 2. 二、用途による分類

1. 行樂用	提重 変り型提重 茶辨當等
2. 専用	麵重 料理重 焼物重 歌舞伎辨當等
3. 旅行用	腰辨當 辨當行李等。古くは木の葉を用いたと記録にある。行器・茶辨當も旅行用に当てられる。
4. 特定用	軍陣辨當 曲物桶に扇形の辨當箱を多数納め、陣中に携行する。船辨當・野良辨當 その他

三. 附属品等 乾飯袋 辨當包 網 重箱掛 吸筒 水飲

らない。

また、朱塗りの竹箸も二膳付く。

四段重箱と大小二つの長方形はいずれも朱漆塗に箔絵で牡丹唐草を描き、その周辺は

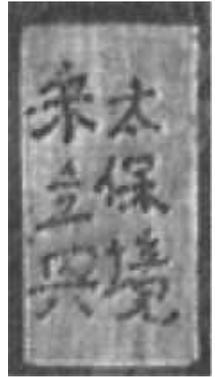


図3 角瓶底の点彫部

斜格子七宝繫文で埋め尽くす。琉球漆芸で箔絵の量産期とされる一九世紀特有の様式を伴う。底は黒漆塗。浦添市美術館には本作品と同様式で文様の異なる「朱漆山水楼閣箔絵提重」や錫製の茶筒を納めた「朱漆牡丹唐草箔絵茶弁当」があり、茶弁当の底には墨書で「大舟大通事」と銘がある⁽⁹⁾。朱漆に箔絵の華やかな携行する道具が普及していたことがわかる。

5 おわりに

提重は一七世紀には大和で遊山といった行楽用に用いられていた。『中山伝信録』が著された一七二一年頃には琉球にあり、献上品など大和向けの道具として作られたことが想像できる。実際、寸法や文様、加飾技法が異なる多様な琉球製提重があり、これらを比較するとさらに製作年代や様式の特徴が明らかになると考える。

また、琉球において提重はどのように呼称され表記され使用されていたのかはよくわからない。重箱に盛った珍味や料理など興味は尽きない。形式の異なる多様な提重も合わせて考えていきたい。

③朱透漆楼閣山水人物漆絵密陀絵沈金提重の透漆については、修復家の土井菜々子氏にもご意見を頂いた。ここに記してお礼申し上げます。

- (1) 荒川浩和 編著『宴と旅の器 辨當箱―特殊製紙コレクション』しこうしゃ図書販売 一九九〇年発行
- (2) 石澤兵吾『琉球漆器考』東陽堂 明治三十二年出版
- (3) 尚敬王の冊封副使として来琉した徐葆光の使録。一七二二年(康熙六〇)刊行。『那覇市史 資料篇第1巻3 冊封使録関係資料(読み下し編)』那覇市役所
- (4) 『那覇市史 資料篇第1巻3 冊封使録関係資料(読み下し編)』那覇市役所 一九七七年発行。また、現代語訳に原田禹雄『原田禹雄訳注 徐葆光中山傳信録』榕樹書林 一九九九年発行がある。「榼」の項目の引用は以下のとおり、「榼(野弁当)」、「士大夫の家には、野弁当がある。朱か黒塗で、金蒔絵をして、はなはだ精巧な作りである。ピクニックには、それぞれ一具をさげてゆく。中の四つ重ねの重箱には料理を詰め、横には徳利ひとつ、盃ひとつ、箸二膳がおかれ、ほぼ飲食の道具がそろっている。民家の重箱は、四角もあれば、円もあり、みな三段重ねか四段重ねで、木をくりぬいて作っている」。
- (5) 森嶋中良『琉球談』京都書肆 紀文堂梓 一七九〇年(寛政2) 書林 申椒堂主人誌 琉球大学付属図書館 仲原善忠文庫所収
- (6) 鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝 写真』岩波書店 一九八二年発行 二三四～二三七頁 同書解説版 一六三頁
- (7) (6) 同書写真版 二三八～二四〇頁 解説版 一六三～一六四頁
- (8) 荒川浩和・徳川義宣『琉球漆工藝』日本経済新聞社 一九七七年発行
- (9) 『浦添市美術館 所蔵品目録』浦添市美術館 二〇〇〇年発行 四七頁、六三頁

②朱漆牡丹唐草沈金提重 一八〇一九世紀

縦二〇〇cm 横三五・五cm 高さ三三・五cm
錫瓶口径三・〇cm 底径六・〇cm 高さ一八・〇cm

表総体朱漆塗、内・底黒漆塗の沈金の提重で違棚式仕切を設ける。四段重箱・方盆・長方形箱・長方形酒台・錫瓶一对を納める。沈金は文様を刀で線刻し、溝に金箔や金粉を鎮めて文様を表す技法。外枠天板・方盆見込・重箱蓋及び側面・盃台上は上と左右に広がる枝牡丹を表し、その隙間を斜格子に七宝繫文で埋めつくす。外枠側面は斜格子七宝繫文、ほかに渦巻文を配する。

本資料についても寸法の詳細は比較できないが、『琉球漆器考』の「明和六年（一七六九）製 提重 朱塗沈金」に外枠や内容物の形式が類似する（図1-3）。また、朱漆に沈金で牡丹と斜格子七宝繫文様の組み合わせは一七世紀頃からの琉球漆器の様式だが、「安永四年（一七七五年）製 沈金提重」（図1-4）は牡丹唐草に七宝繫文様を配し、これに類似する。

③朱透漆樓閣山水人物漆絵密陀絵沈金提重 一八〇一九世紀

縦一八・五cm 横三二・〇cm 高さ三〇・五cm
錫瓶口径三・七cm 底径五・五cm 高さ二〇・〇cm

主な画面の素地に透漆塗を施し、漆絵と密陀絵で山水人物を描く。透漆は素地に茶褐色の透明な漆を塗る方法だが、本作品は透漆部の画面に効果的に若干の彩色を施している部分があり、その外は朱漆塗にして沈金で牡丹唐草文様を施す。

違棚式仕切を設け、四段重箱・方盆・長方形箱・長方形酒台・錫瓶一对を納める。酒台は①と②は蓋と身に分れていたのに対し、本作品は底の無い単一形式である。外枠側面の形態が『琉球漆器考』の「天

保十三年（一八四二）製 真塗青貝提重」（図1-6-1）に類似する。

外枠天板・方盆見込・重箱蓋及び側面・盃台上は山水に渡り鳥・魚・人物・舟など、重箱は琴棋書画類の絵替わりである。彩色した漆で描く漆絵と、顔料を油で溶いて描く密陀絵の技を併用。外枠側面は鉄線花を描く。絵の枠線や人物の顔、鉄線花は箔絵か蒔絵の金色で表現されるが、画面の保存状態は良いため、後世に描き足された可能性も考えられる。

琉球では絵師は唐絵を学び貝摺奉行所に所属して漆器の図案も描いている。『沖縄文化の遺宝』の「桑木地蒔絵提重箱」は素地に葡萄栗鼠を福建風蒔絵で描いているとされるが、栗鼠の詳細を線で描く方法は本資料の鉄線花などに類似する。

一方、朱漆に沈金部分には、琉球漆器の典型的な様式を見ることが出来る。例えば、方盆の立ちあがり窓枠内に花唐草、外に斜格子七宝繫提重外枠の地板側面に鋸歯文と花を配置するなどである。

④朱漆牡丹唐草七宝繫箔絵提重 一九世紀

縦一五・五cm 横二五・〇cm 高さ二三・五cm

外枠は提環を伴う挿蓋式箱型の提重。天板と前後左右に墨で濃淡のある蔦と葡萄を描き、その上に透漆を塗って仕上げる。

挿蓋に朱漆で「文」と入れており、角盆としても兼用できる。内は下の仕切りに長方箱、その上を三対二の幅で縦に仕切り、左に四段重箱、右に錫製角瓶、その上にも一段設けて長方箱を納める。錫瓶には酒の注入口に納まるように同素材の盃が付く。角瓶底に「太保境 宋五因」（図3）と点彫りで刻まれている。中国福建省福州市に「太保境」という地名があるようだが、そこで作られたものを表すのか正確な意味は判

塗青貝提重箱」がある^⑥。鎌倉氏の解説によると後者は「嘉慶二十四己卯製」尚瀨王一六年（一八一六年）の銘記がある。所蔵家の平尾喜三郎が尚家什器売立会の際に数々の漆工芸品を買い受けたとし、この二件の提重を尚家旧蔵とした。同書には「桑木地蒔絵提重箱」^⑦もあり、両開形の透かしのある箱に四段重箱、方盆、十枚の方皿、取手のある瓶が納まり尚家旧蔵とある。

このほか現存資料として『琉球漆工藝』^⑧の収録や県内外の博物館施設等の収蔵品があるが、その伝来については詳らかではないのでここでは取り上げない。

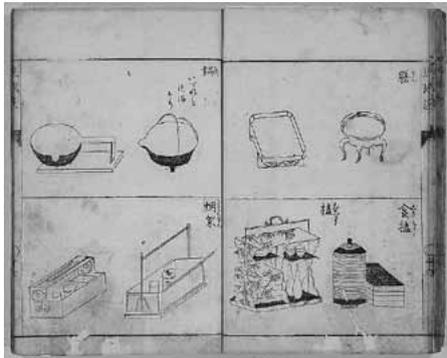
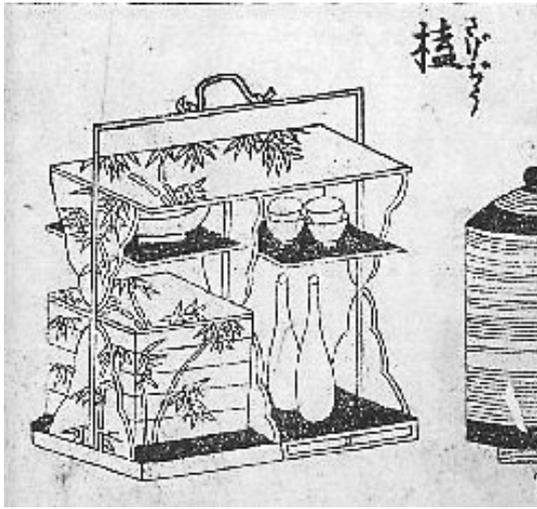


図2：上・左
『琉球談』森嶋中良著
寛政2年（1790）刊行
琉球大学附属図書館所蔵
仲原善忠文庫

3 新収蔵の提重

浦添市美術館は平成二四年度に①黒漆山水樓閣螺鈿提重、二五年度に②朱漆牡丹唐草沈金提重・③朱透漆樓閣山水人物漆絵密陀絵沈金提重・④朱漆牡丹唐草七宝繫箔絵提重の四件を収集した（巻頭カラー写真）。特に①～③は荒川氏分類の各種器物の組込み型に属する提重形式である。これまで同館は琉球製のこの形式の提重を所蔵していなかった。④は箱型の提重箱である。それぞれの寸法・形状・塗り・加飾・文様などの特徴と、先の史料とを比較する。

①黒漆山水樓閣螺鈿提重 一八〇一九世紀

縦三三・〇cm 横四一・〇cm 高さ四〇・〇cm
錫瓶口径五・〇cm 最大径一一・〇cm 高さ二三・〇cm

大型の提重で違棚式仕切を設ける。四段重箱・方盆・長方形箱・長方形酒台・錫瓶一对を納める。総体黒漆塗に螺鈿で加飾。螺鈿は夜光貝などの貝を用いた技法。山水樓閣図に人物や舟を主な文様とし、天板・酒器台に牡丹唐草と菊唐草、その周りに撫子散し文様を配する。一枚の貝を大きく使い、螺鈿の貝の色を選別して効果的に使用する特徴があり、岩や花の詳細な表現は線刻で表している。樹木の葉は数パターンの型に抜いた貝で表し、土坡などは更に細かい方形の貝を並べ精緻である。

寸法の詳細は比較できないが、『琉球漆器考』の「寛政三年（一七九二）製提重 真塗蠟色青貝」絵図に一致する（図15-1-12）。先の鎌倉芳太郎氏の遺した黒漆螺鈿の二件の提重写真とも類似する。特に「黒塗青貝提重箱一具」（縦二二・八cm 横四〇・七cm 高さ三九・六cm）は寸法も同等で大型。螺鈿の細工は本資料がやや大らかである。

(資料紹介) 浦添市美術館新収蔵の琉球製提重について

金城 聡 子 (浦添市美術館)

1 はじめに

琉球王国時代の漆器に提重^{さげじゅう}がある。提重は携行するようにつくった道具で、重箱などを納めた提重箱の略称である。浦添市美術館では平成二四年度と二五年度に加飾技法や文様などが異なる四件の琉球製提重を収集した。筆者は、平成二六年度第三期常設展示「華やぐ宴々漆器でとういむち」(平成二六年一月六日～平成二七年五月一日)で「心浮かれる行楽の器」をテーマにこれらの提重を紹介した。

ここでは展示に際して改めて確認した提重の概要と先の四件の新収蔵品について紹介する。

2 琉球関係の史料などにみる提重

携行する道具、弁当箱の研究に荒川浩和氏の「宴と旅の器 辨當箱」(一九九〇年)がある。荒川氏は屏風絵や風俗画に描かれた屋外の飲食器から提重が慶長十一年(一六〇六年)「豊国祭礼図屏風」以下に描かれていることを指摘し、大名道具にもこのような提重があることを紹介している。⁽¹⁾

また、荒川氏はこの中で弁当箱の種類を構造形式や用途により分類し(表1・2)、提重は「重箱・徳利・楊枝箱・方盆・小皿・盃等を組み込み、

外枠に納めた形式」とした。小稿では琉球製提重についてもこの分類を参考にする。

琉球関係の史料では一八八九年(明治二二)に石澤兵吾が著わした『琉球漆器考』⁽²⁾に「提重」名目の道具図が六件ある(図1)。製作年、形態、文様、加飾技法がわかり、その構造形式はどれも荒川氏分類の「1. 各種器物の組み込み型 提重」形式にほぼ一致する。

『琉球漆器考』の道具図は琉球王府の文書の写しとされているが、同書では冒頭で中国からの冊封使徐葆光が著わした『中山伝信録』⁽³⁾を抜粋して掲載している。同書中提重と思われる「榼」の部分に関する『那覇市史』読み下しは次の通りである。⁽⁴⁾

「榼(サカダル、酒器)」「士夫ノ家一榼アリ。或ハ朱或ハ黒、滲金間采ニシテ、製作甚ダ精シ。郊飲スルニ各一具ヲ携フ。中ノ四器ニ食物ヲ置キ、旁ラ酒壺一、蓋一、筋二ヲ置ク。諸具略ボ備フ。民家ノ食榼、或ハ方ニ或ハ圓ニ、皆三四層ニ作ル。木ヲ刳テ之レヲ爲ル。(圖略)」

『中山伝信録』は日本において琉球の知識を伝える書物であった。その一例として『琉球談』(一七九〇年)⁽⁵⁾もやはり『中山伝信録』を写し「榼」と仮名をふり、提重図を掲載している(図2)。このことから「榼」は「提重」と理解できる。

さらに、『琉球漆器考』の提重を理解する手掛かりとして、鎌倉芳太郎氏が『沖縄文化の遺宝』に収録した「黒塗青貝提重箱一具」と「黒

執筆者名 [執筆順]

仲 地 清	Nakachi Kiyoshi	大阪大学大学院 特任教授
宇 良 留 美	Ura Rumi	浦添市立図書館
森 田 牧 子	Morita Makiko	浦添市立図書館
仁 王 浩 司	Nio Koji	浦添市教育委員会文化課
武 部 拓 磨	Takebe Takuma	浦添市教育委員会文化課
長 濱 健 起	Nagahama Tatsuki	宜野湾市教育委員会文化課
山 府 木 碧	Yamabuki Midori	明治大学理工学部 宮腰研究室
本 多 貴 之	Honda Takayuki	明治大学理工学部
宮 里 正 子	Miyazato Masako	浦添市美術館
岡 本 亜 紀	Okamoto Aki	浦添市美術館
下 山 進	Shimoyama Susumu	吉備国際大学文化財総合研究センター
下 山 裕 子	Shimoyama Hiroko	デンマテリアル株式会社色材化学研究所
宮 腰 哲 男	Miyakoshi Tetsuo	明治大学理工学部
伊 郷 宗一郎	Igo Soichiro	明治大学大学院理工学研究科
神 谷 嘉 美	Kamiya Yoshimi	東京都産業技術研究センター
當 山 綾 乃	Toyama Ayano	浦添市美術館
川 島 淳	Kawashima Jun	沖縄国際大学南島文化研究所特別研究員
金 城 聡 子	Kinjyo Satoko	浦添市美術館

よのつぢ 浦添市文化部紀要 第11号

編集：浦添市教育委員会 文化部 浦添市美術館
〒901-2103 沖縄県浦添市仲間一丁目9番2号
TEL：098-879-3219(みにいく)
FAX：098-878-1221
発行日：2015年(平成27年)3月30日
発行：浦添市教育委員会 文化部
〒901-2501 沖縄県浦添市安波茶1丁目1番1号
浦添市役所ホームページ <http://www.city.urasoe.lg.jp>
印刷：(株)尚生堂
